

令和3年度 自己点検・評価報告書

鹿児島工業高等専門学校

目 次

はじめに（校長挨拶）	1
------------	---

第1部 令和3年度分 自己点検・評価報告書

1 自己点検・評価報告書総括	5
2 自己点検・評価報告書（簡易版）	7
3 自己点検・評価報告書（詳細版）	31

第2部 令和3年度分 外部評価報告書

1 令和4年度外部評価委員会委員名簿	61
2 令和4年度外部評価委員会列席者名簿	62
3 令和4年度鹿児島工業高等専門学校外部評価委員会実施要領	63
4 鹿児島工業高等専門学校外部評価委員会規則	64
5 外部評価委員会議事録（一部要約）	65

はじめに

鹿児島工業高等専門学校は、令和 5 年に創立 60 周年を迎えますが、15 歳の中学卒業生を受け入れる 5 年一貫教育を基本としながら、時代の変化と社会の期待に応え、大学編入、専攻科の設置などの組織制度を整備することで、多様なキャリアパスをもつ高等教育機関へと発展してきました。

これまで本校が目指してきた技術者は、どちらかという人の営みから出てきた解決困難な課題に挑戦できる技術者でした。ところが、現代社会は、地球規模での困難で緊急度の高い数々の問題に直面しています。地球の気候変動や環境破壊、大規模な自然災害や原子炉の処理、世界的な感染症の拡大などは、人類の社会経済活動の急速なグローバル化により顕在化してきたものと考えられます。今まさに世界を席卷している新型コロナウイルス感染症パンデミックもその一つです。

昨年の外部評価委員会の最後のあいさつで、「日本では、イノベーションを起こす必要があると言われながら、それが長い間できていないという問題があります。この問題はその核心部分で技術者教育と地域に根ざした“高専づくり”や“技術づくり”の問題と結びついていると思っています。半導体、電気産業の衰退の問題は、高専における技術者教育をどのように行うべきかという問題に重要な関わりをもっており、

“日本における技術イノベーションを持続的にどう起こしていくのか”

“そのために人材育成をどのようにするのか”

“地域の衰退を防ぎ、地域の人々と地域に根ざした高専づくりをいかに行うのか”

といったこれらの課題の探求を行い、総合的な研究を行い、その成果を社会に示していかなければならないと思った次第です。皆様からいただいたご意見を参考にさせていただき、さらに魅力ある鹿児島高専にしていきたいと思っております。」と述べさせていただきました。

このような状況で、令和 4 年 5 月 10 日に出された教育未来創造会議の第一次提言では、進学者のニーズ等も踏まえた成長分野への高等教育機関の再編促進・産学官連携強化が求められ、特に、デジタル等の成長分野での定員増など、産業界や地域のニーズを踏まえた高専の本科や専攻科の機能強化を図ることが求められています。

一方、政府は、TSMC の熊本への進出を契機として半導体の国内生産能力を高めるため、高専での専門人材の育成に取り組む方針を固め、2022 年度中にも九州にある 9 つの高専を対象に、半導体の製造や開発に関する教育課程を新たに盛り込みます。世界的な半導体不足のなか、技術の担い手を増やし、かつて世界をリードした“日の丸半導体”の復権につなげたいと考えているようです。

したがって、デジタル・グリーン等の成長分野への再編を促進する仕組みを構築することは意義あることで、産業界や地域のニーズも踏まえた本科や専攻科の機能強化を図らねばなりません。

そこで、本校の新しい教育プログラムを策定する必要があり、地方公共団体と本校の連携強化促進（霧島市、日置市、長島町に加え令和4年4月7日には始良市とも連携協定締結）や地域のニーズに合う人材育成のための産学官の連携強化などを図り、一人ひとりの多様な幸せと社会全体の豊かさを実現することを目的とした *Well-being* を志向する高専教育を開始しているところです。

このような背景の中で、令和4年6月21日（火）に学外有識者の方々に本校の現状をご理解いただき、ご意見およびご提言をお願いするため外部評価委員会を開催させていただき、本校の教職員が鹿児島高専の現状についてご説明申し上げ、貴重なご意見を賜りました。本報告書では、説明の概要と共にその際に行われた質疑応答やご提言等の内容をまとめております。

ご多用の中、本校の運営状況の説明に傾聴いただき、また貴重なご意見等を頂戴しました鹿児島大学工学部長木下英二様をはじめ評価委員の方々に本紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。外部評価委員会でいただいたご意見やご提言を今後の本校の運営に生かしてまいりたいと考えております。

鹿児島工業高等専門学校
校長 氷室昭三

第 1 部

令和 3 年度 自己点検・評価報告書

構成

自己点検・評価報告書総括	……………	資料1-1
自己点検・評価報告書（簡易版）	……………	資料1-2
自己点検・評価報告書（詳細版）	……………	資料1-3

令和 3 年度 自己点検・評価委員会および外部評価委員会資料

【概要】

本校では、国立高等専門学校機構の第 4 期中期計画に基づき年度計画をたてて、本校の施策を実行しています。また、当該年度の施策の計画、実行、点検・評価のために PDCA サイクルを用いており、PDCA の中でも、成果をチェックし、新たな課題を見出し、改善していくために、毎年度自己点検・評価委員会および外部評価委員会を開催し、自己点検・評価を行っています。本校は、令和元年度に期間別認証評価、監事監査、外部評価委員会を受審しましたが、その中で以下の重要な指摘を受け、その対応に向けて、令和 2 年度および令和 3 年度と取り組みを行ってきました。以下に、令和元年度の実審の際の指摘事項を記載します。

1. 機関別認証評価

- ① 自己点検・評価、研究活動、地域貢献活動に関する規定の必要性
- ② 成績資料の保管状況、成績評価方法の妥当性の検証
- ③ 満足度等を把握するアンケートの必要性

2. 監事監査

- ① キャリア教育および進路指導における学校全体としての取り組みの必要性
- ② 相互授業参観の改善の必要性
- ③ 退学率、留年率の改善

3. 外部評価委員会

- ① PDCA に基づいた評価の必要性
- ② イノベーション人材育成への取り組みについて
- ③ 企業に対する満足度調査の実施と調査結果の検証について

上記の指摘への対応のための組織として、令和 2 年度にはアクションプロジェクトチームを結成しました。また、令和 3 年度には常設の対応組織として総務企画主事、キャリア支援室長を配置し、総務企画委員会およびキャリア支援室を設置しました。この 2 年間の取り組みを通じて、上記の指摘に対して以下のような対応を行いました。

1. ①については規定を制定しました。1. ②については教務委員会で成績資料の保管状況および妥当性の検証を行うこととしました。1. ③については、教務委員会、学生委員会、総務企画委員会（キャリア支援室）が卒業生、在校生、企業アンケートの対応を行うこととしました。2. ①については、総務企画主事の下にキャリア支援室を設置し、全学的な取り組みを行うこととしました。2. ②については、総務企画委員会で FD を担当し、公開授業を実施することとしました。2. ③については、教務委員会で継続的な取り組みを行っています。3. ①については、総務企画委員会で対応することとし、令和 2 年度以降 PDCA を明記した報告書を作成しています。3. ②については、令和 4 年度に向けて、1 年生混合クラスの導入の決定やカリキュラム改定を行いました。3. ③については、1. ③と同じ指摘となっており、

総務企画委員会で企業へのアンケートを対応することとしました。

特に、3. ①への対応としては、自己点検・評価委員会の委員長を校長とした規則改正を行い、自己点検・評価委員会の機能の強化を図りました。

令和3年度の自己点検・評価においては、自己点検・評価報告書の詳細版、簡易版を作成しました。詳細版は、次に掲げる本校の3つのミッションをベースとした編纂を行いました。特に、令和2年度のエクセル形式から、ドキュメント形式に変更したことで、報告書の視認性、可用性および体裁を改善しました。

～本校のミッション～

- I. 創造性豊かで人格が優れた国際的に通用する技術者を養成すること
- II. 開発型の教育・研究に重きをおき、社会的・経済的価値あるものを創出していくこと
- III. 地域の産業、文化さらには生活を支えていく地域に根差した高専とすること

簡易版は、実行組織である各部署の長からの PDCA の報告を取りまとめた資料として編纂しました。令和3年度の簡易版で報告のあった部署は以下に示す19の部署となります。

(1)教務主事 (2)総務企画主事 (3)学生主事 (4)寮務主事 (5)研究主事・専攻科長 (6)国際交流センター長 (7)地域共同テクノセンター長 (8)グローバル・アクティブラーニングセンター長 (9)情報セキュリティ推進責任者 (10)学生何でも相談室長 (11)特定戦略タスクフォース担当 (12)機械工学科長 (13)電気電子工学科長 (14)電子制御工学科長 (15)情報工学科長 (16)都市環境デザイン工学科長 (17)一般教育科長 (18)総務課長 (19)学生課長

令和4年3月に行った令和3年度自己点検・評価委員会では、各部署からの報告をもとに委員長から改善等の助言を受け、PDCA サイクルをドライブすることができました。簡易版については、詳細版からの重要項目の抜粋という性質から変遷して、自己点検・評価における主要な資料としての位置づけとなるため、来年度以降は、位置づけおよび名称について検討を行うこととしています。

【総括】

令和3年度は、令和元年度で指摘を受けた9項目の内容について、本校としての対応が整ったと考えています。特に、自己点検・評価委員会の長に校長を据え、機能強化を図り、従来にはなかった各学科・科の目標を設定し、その上で各部署の自己点検・評価を行うことが出来たことは成果の一つとなります。

また、令和4年度から、さらに魅力ある鹿児島高専としていくために、「教育理念の改定」、「カリキュラムの改定」、「1年生混合クラスの導入」などの施策を検討し、実施を決定することができました。併せて、鹿児島高専独自の教育の取り組みとして、Well-being や Positive Education などについて教員での議論を始めています。今後、高専機構の中期計画にそった取り組みと併せて、鹿児島高専独自の取り組みをスタートさせ、学生、教職員、保護者、企業、地域等さまざまなステークホルダーに対しての責任を果たすと共に魅力向上を図っていきたいと考えています。

令和3年度自己点検・評価報告書 (簡易版)

自己点検・評価委員会

簡易版の報告内容

1. 教務主事 自己点検・評価報告
2. 総務企画主事 自己点検・評価報告
3. 学生主事 自己点検・評価報告
4. 寮務主事 自己点検・評価報告
5. 研究主事・専攻科長
自己点検・評価報告
6. 国際交流センター長
自己点検・評価報告
7. 地域共同テクノセンター長
自己点検・評価報告
8. グローバル・アクティブラーニング
センター長／情報セキュリティ推進責
任者 自己点検・評価報告
9. 学生何でも相談室長
自己点検・評価報告
10. 特定戦略タスクフォース担当
自己点検・評価報告
11. 機械工学科長 自己点検・評価報告
12. 電気電子工学科長
自己点検・評価報告
13. 電子制御工学科長
自己点検・評価報告
14. 情報工学科長 自己点検・評価報告
15. 都市環境デザイン工学科長
自己点検・評価報告
16. 一般教育科長 自己点検・評価報告
17. 総務課長 自己点検・評価報告
18. 学生課長 自己点検・評価報告
19. 校長による自己点検・評価総括

概 要

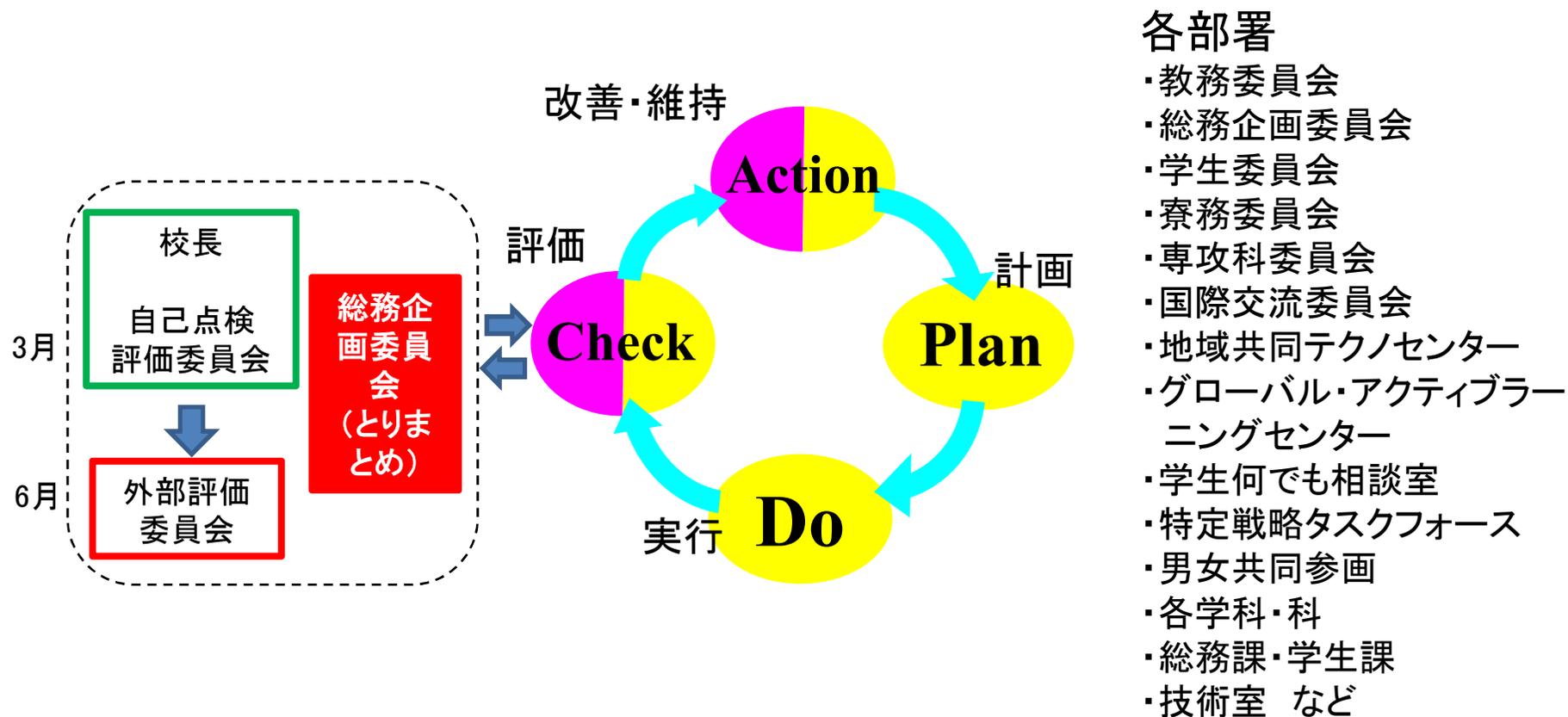
本校では、国立高等専門学校機構の第4期中期計画をベースに、年度計画および具体的なPlanを策定し、それを実現すべく、Do、Check、Actionを行っている。また、その活動状況について年度ごとに自己点検・評価委員会及び外部評価委員会を開催し、自己点検・評価を行っている。

令和3年度は、新たに総務企画委員会を設置し、自己点検・評価および外部評価を担当することとし、自己点検・評価委員会の実施方法や自己点検・評価委員会および外部評価委員会の実施時期の見直し等、効果的な自己点検の在り方を検討し実施した。

さらに、自己点検・評価委員会の体制を強化するために、校長を委員長とした規則改正を行った。

また、自己点検・評価報告書については、簡易版を新たに各部署からの主報告事項の取り纏めとして作成し、詳細版については「分類」を導入し、ミッションと各評価項目の関連が分かる形に再編した。

自己点検・評価のPDCAサイクル



目標に対し、PDCAを回し、客観的なデータをもとに自己点検・評価を行う体制

1. 教務主事 自己点検・評価報告

教務主事の所管する事項		自己評価
(1)新カリキュラムおよびカリキュラムポリシー策定 (2)留年・退学に関する対策 (3)受験生の確保および高専のPR		A B B
Plan	Do	
(1)令和4年度入学生からの新カリキュラムおよび新カリキュラムポリシーの策定。 (2)特に低学年における留年を減らす。 (3)入試広報PTを中心に、積極的に学校説明会に参加し、バーチャルオープンキャンパスの充実を図る。	(1)令和4年度から1年生は混合学級となるため、それに合わせて、大幅にカリキュラムを見直し、同時に、カリキュラムポリシーを一新した。 (2)留年対策として、前年度未修得および前期未修得の科目については、再試験・再評価の時期を早め、積極的に実施するようにした。 (3)中学校の上級学校説明会には入試広報PTを中心に派遣し、バーチャルオープンキャンパスも、内容を充実させた。	
Check	Action	
(1)各学科、これまでにない新しいカリキュラム策定し、それに見合った、カリキュラムポリシーを策定した。 (2)留年生の数はほぼ横ばいだが、1、2年生に限れば大幅に減っている。ただし、一部、再試験・再評価に消極的な教員がおり、学校の目標を十分に理解されていない。 (3)受験生を2割程度減らしたが、女子学生の入学者に限れば去年の1.4倍増となった。また、バーチャルオープンキャンパスの閲覧数が意外に伸びていない。	(1)混合学級のメリットを活かしたカリキュラムになっているかを検討し、必要に応じてカリキュラムを新しくしていく。 (2)今年以上に、再試験・再評価を積極的に実施させ、同時に多様な成績評価の導入を促進する。 (3)女子学生の更なる増加を見据えたPRを展開し、同時に男子学生の減少に歯止めをかけるよう、様々な要因を分析しPRに活かす。	

2. 総務企画主事 自己点検・評価報告

総務企画主事の所管する事項	自己評価
(1) FD・SD活動を実施する。	S
(2) キャリア支援室の活動を充実化し、より良いキャリア支援を行う。	A
(3) 各種評価への対応を行う。	A

Plan	Do
<p>(1) 鹿児島高専FDフォーラム、鹿児島高専FDレクチャーシリーズ、公開授業等のFD活動およびSDを実施する。</p> <p>(2) キャリア支援室としてキャリア支援の標準化、充実化を図る。</p> <p>(3) 外部評価、自己点検・評価、年度計画等、各種評価へ対応する。</p>	<p>(1) 鹿児島高専FDフォーラムを8回、鹿児島高専FDレクチャーシリーズを8回、公開授業を前期に実施した。新任教職員研修(5回)およびハラスメント研修のSDを実施した。</p> <p>(2) 就職進学指導ガイドライン2021を作成し、指導の標準化を行うと共に指導担当者間、指導担当と学生間の認識の共有を行った。学内合同企業セミナーをオンラインで実施した。求人面談の対応について整理した。</p> <p>(3) 外部評価、自己点検・評価の実施時期を変更した。自己点検・評価報告書(詳細版)を再編し、簡易版を新たにした。年度計画の策定会議を開催した。</p>
Check	Action
<p>(1) 鹿児島高専FDフォーラム、鹿児島高専FDレクチャーシリーズ、公開授業、SDが計画通りに実施されている。</p> <p>(2) 新設されたキャリア支援室として充実した活動がなされている。来年度は、キャリア支援室の在り方の検討を行う。</p> <p>(3) 令和3年度中の学校評価に関して対応を行っている。</p>	<p>(1) 令和4年度も同様のFD・SD活動を実施する。また公開授業については、前期、後期の2回実施する。SDレクチャーシリーズを実施する。</p> <p>(2) 鹿児島高専のキャリア支援の在り方について検討する。</p> <p>(3) 自己点検・評価委員会、外部評価委員会の実施時期の変更について、担当係や、その他の部署からの意見を聞く。</p>

3. 学生主事 自己点検・評価報告

学生主事の所管する事項	自己評価
(1)学生が意欲的に参加できる学校行事の内容の充実 (2)学生会の見える化	A A

Plan	Do
<p>(1)学生がこれまで以上に意欲的に参加できる学校行事の実施</p> <p>(2)学生会の活動を全面的にアピールする</p>	<p>(1)文化祭では、部活動が企画・立案する露店を募集 体育祭では可能な範囲で、保護者の来場を検討 クラスマッチでは、運動が少し苦手な学生でも参加できる内容の検討</p> <p>(2)広報活動の充実 定期的な挨拶運動の計画 校内放送を活用した活動</p>
Check	Action
<p>(1)文化祭は予想よりも多くの部活動から露店希望があり、飲食物禁止の中、非常に盛り上がりのある文化祭が実施できた。体育祭では4年保護者のみだが応援を認め開催し、実行委員会が導線を設定するなど、対策に努める事が出来た。クラスマッチではe-sportsも取り入れ、運動が苦手な学生も意欲的に参加することが出来た。</p> <p>(2)学生新聞を4回発行し、学内へPR出来た。 挨拶運動は天気にも左右され、巧く計画的に実施できなかった。校内放送では、感染対策の注意喚起のみならず、部活動の活躍等も伝えることが出来た。</p>	<p>(1)今年の反省を活かし、感染対策を徹底しながらも、学生会や実行委員会メンバーの意見を尊重し、学生が輝ける学校行事を企画・立案していきたい。</p> <p>(2)学生会メンバーの自覚をより高め、自主性を尊重した運営を心掛けたい。全体での定例会に加えて、各局の打ち合わせ等も増やしていきたい。</p>

4. 寮務主事 自己点検・評価報告

寮務主事の所管する事項	自己評価
(1)女子学生の増加のための取組、女子学生の比率等の把握	A
(2)新型コロナウイルス感染症への対応	A

Plan	Do
<p>(1)昨年度末に女子寮生への防犯体制の向上と、点呼作業の効率化を目的として、女子寮における入館管理のための顔認証実証実験を行った。また、顔認証による点呼については、数日間行ったのみであり、具体的なデータがあまり得られなかったため、今年度は顔認証による点呼の本格的な実証実験を行う。</p> <p>(2)新型コロナウイルス感染症に対する感染予防ガイドラインなどを作成し、寮生の感染予防の意識を高める。</p>	<p>(1)顔認証による点呼の実証実験を数回行い、認証精度について検証した。さらに、マスクや眼鏡の有無、おでこを見せる・見せない、髪を後ろで束ねるか、束ねないかによって認証精度に影響を及ぼすか検討した。また、顔認証による点呼の使い勝手についてアンケートを実施した。</p> <p>(2)作成した感染予防ガイドラインを周知し、寮生会と協力し、マスク着用や手指消毒の励行など基本的な感染予防の啓発活動に取り組んだ。また、密状態回避のため食堂や浴室の利用時間の割り振りなども行った。</p>
Check	Action
<p>(1)顔認証による点呼の実証実験の結果をNECと情報共有し、不具合点の解消を重ね、認証精度の向上を図ることができた。また、運用上の問題点も把握することができた。</p> <p>(2)開寮中の感染者はほとんど確認されず、寮内での感染も確認されなかった。しかし、学年末試験を終えた閉寮直前に感染者が相次いで確認された。</p>	<p>(1)顔認証による点呼を実施するにあたり全員の顔画像の登録が必要であるが、登録に協力が得られない学生が数名いる状況である。また、今後のNECとの連携が不透明であることも不安材料である。</p> <p>(2)コロナ禍も2年を超え、感染予防の取り組みへの慣れが見受けられる。感染の収束も見えない中、今一度緊張感を持たせる取り組みが必要である。</p>

5-1. 研究主事・専攻科長 自己点検・評価報告

研究主事・専攻科長の所管する事項	自己評価
(1) 科研費採択率の向上 (2) 第5ブロックの共通目標達成のための取組	A B

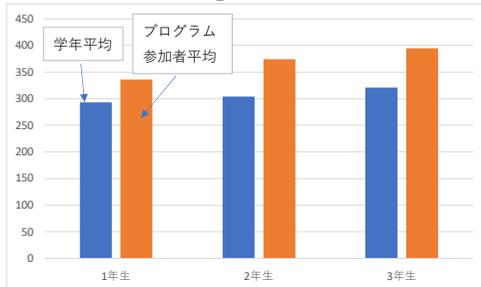
Plan	Do
<p>(1) 科学研究費助成事業の応募及び採択率を向上させるために、プロジェクト・チームを設置する。</p> <p>(2) 第5ブロックの共通目標について、学内で共通理解を深めていく。 共通目標: ①専門系: 査読付き論文2編以上 一般系: 論文2編以上・著書1冊以上 ②外部資金: 過去3年分の実績額(平均)の110%及び科研費採択率前年度比3%増</p>	<p>(1) 採択率を向上させるためにプロジェクト・チームによる査読を行い、教職員に対して適切な指導・助言等の支援を行った。</p> <p>(2) 第5ブロックの共通目標について、学内で周知を行い、高専機構等の研究力アップに関するイベントについては、積極的な参加を呼びかけた。</p>
Check	Action
<p>(1) 科研費の申請件数は、昨年度と同じ57件であるが、採択率は7.4%から15.8%に増加した。</p> <p>(2) 以前に比べ、学内の共通理解が深まってきており、教員の参加者も増加してきている。本年度の論文数は32件(延べ数)であった。因みに、イベントへ参加する教員は、比較的研究力の高い教員であり、同じ顔ぶれとなっている。</p>	<p>(1) 次年度以降もチームによる査読を行い、申請書をブラッシュアップし採択率の向上を目指す。更に、第5ブロック科研費獲得オンライントレーニング及び国立高専科研費申請書査読者ネットワークによる科研費研究計画調書の査読システムの積極的な活用を促す。</p> <p>(2) 第5ブロックの共通目標達成者数をチェックし、目標未達成者については、今後3年間の研究計画書(論文投稿計画書)の提出を求める。また、高専機構主催の研究力強化プログラムへの積極的な参加を継続して呼びかける。</p>

5-2. 研究主事・専攻科長 自己点検・評価報告

研究主事・専攻科長の所管する事項		自己評価
(1)学修単位の学修時間の把握		A
(2)特例適用教員数の向上		A
Plan	Do	
<p>(1)講義第1週目に自学自習チェックシートを配布し、定期試験終了後、回収し確認する。また、試験では、講義で教授した内容に加え、自学自習が必要な発展的な設問を設け、学修時間のエビデンスとすることを検討する。</p> <p>(2)特例教員数の向上について、申請時にヒアリングを行い、書類の記入方法(業績の見せ方など)について指導する。また、筆頭著者、責任著者としての論文執筆を増やすよう指導を行う。</p>	<p>(1) 今年度から、自学自習チェックシートを導入し、学修時間が不足している学生に対し、科目担当教員から指導を行った。</p> <p>(2)特例適用教員の申請時に、研究主事及び研究主事補でヒアリングを実施し、本人たちの意思を尊重しながら、申請書類の記入方法について、5名にアドバイス・指導を行った。</p> <p>・令和5年度入学生から、九州大学との連携教育プログラムにおける連携教員としての参加を積極的に呼びかけた。連携教員となることで、指導実績、研究実績の積み増しが見込まれる。</p>	
Check	Action	
<p>(1) 学生の自学自習の内容及び時間等を把握することができ、学生への指導へ活用させることができた。</p> <p>(2)申請した5名中、3名が承認された。結果として、特例認定教員率は63.2%となった。</p>	<p>(1) 次年度以降も、科目担当者がチェックシートを活用し、学生への指導に活用していく。</p> <p>(2)特例適用教員数の向上については、次年度以降も継続的にヒアリングを行っていく。</p>	

6. 国際交流センター長 自己点検・評価報告

国際交流センター長の所管する事項	自己評価
(1) グローバルマインド, 異文化理解力の育成 (2) 英語力向上	A A

Plan	Do
<ul style="list-style-type: none"> ● 海外協定校 (NTIストックホルム校) とのオンライン異文化交流 ● 「English Camp」(オンラインプログラム) の開発と実施 ● 「Debate & Discussion」(オンラインセミナー) の開発と実施 	<ul style="list-style-type: none"> ● オンライン異文化交流を全7回実施, 本校参加学生数は延べ73名 ● 「English Camp」 バーチャルホームステイ, 参加学生15名(2日間) 模擬国連スタイルプログラム, 参加学生12名(3日間) ● 「Debate & Discussion」(オンラインセミナー), 参加学生数12名(60分×8回)
Check	Action
<ul style="list-style-type: none"> ● アンケートによる満足度調査. 全員が満足と回答. ● TOEIC-Bridgeスコアの学年別平均点  <p data-bbox="705 1189 1097 1364">ToEIC-Bridgeスコア すべての学年で学年平均よりも高い</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● オンライン異文化交流プログラムの充実 ● English Campなどのオンラインプログラムに加えて, TOEICスコアアップ講座などを開発 ● TOEIC-Bridgeに加えて, 各プログラム毎のプレ・ポストテストによる英語力向上のチェック

7. 地域共同テクノセンター長 自己点検・評価報告

地域共同テクノセンター長の所管する事項		自己評価
(1)霧島市、日置市との連携		A
(2)キャリア教育における自治体との連携		A
(3) KTC企業による特別講義等を通じたキャリア教育の状況、成果の把握		A
Plan	Do	
(1)生涯学習講座 ニューライフカレッジ霧島「隼人学」の開催(霧島市教育委員会)	(1)感染症対策に留意しながら講座を5回開催した。(7月10日、10月9日、11月13日、12月11日、1月8日)	
(2)自治体と連携して地方創生講義を実施し、学生へのキャリア教育を行う	(2)2年生を対象に11月24日に霧島市と日置市による地方創生特別講義を実施した。	
(3)KTC企業と連携し、地域企業特別講義・地域企業研究会を実施し、学生へのキャリア教育を行う	(3)3年生対象に11月17日、1年生対象に12月8日に「地域企業特別講義」を実施し、4年生及び専攻科1年生対象に「地域企業研究会」を行った。	
Check	Action	
(1)高等教育機関と自治体が連携して開催する全国でも例を見ない取組であり、優れた運営と学習成果が地域の活性化に寄与すると評価されている。聴講者アンケートでも良い評価が得られている。	(1)今後も引き続き連携・協力して事業を継続する。	
(2)自治体独自の取り組みや自治体で働くOBのアドバイスを聴く場となり、学生にとって将来を考える良い機会となった。	(2)今後も各自治体と連携しながら事業を実施する。アンケートから、学生が「自治体」の活動を知らないのので、知見を広げ、またキャリア教育として必要と判断する。	
(3)地域企業の持つ優れた技術や鹿児島で働くOBの声を聴き、学生が地域企業の魅力を理解し今後の就職活動の為に知識習得や情報収集の機会となった。	(3)アンケート結果より、学生に「地域企業で働くということ」を知る機会が必要と判断されることから、キャリア教育の一環として継続して実施する。そのために業種等の偏りがないように気をつける。	

8. グローバル・アクティブラーニングセンター長 / 情報セキュリティ推進責任者

自己点検・評価報告

グローバル・アクティブラーニングセンター長 / 情報セキュリティ推進責任者の所管する事項	自己評価
(1) キャンパス情報ネットワークシステム - コンテンツフィルタ	A
(2) 情報セキュリティ維持・向上への全教職員への意識啓発	A

Plan	Do
<p>(1) コンテンツフィルタ適用除外申請フロー改善 同じサイトを毎年度申請する必要がある不便、との声に対し、「未分類」を理由としたフィルタリングが継続されないようにする。</p> <p>(2) 全教職員を対象とした情報セキュリティ教育の実施 情報セキュリティを他人事としないため、永らく実施されていなかった本校独自の全教職員を対象とした情報セキュリティ教育の再起ち上げが必要である。</p>	<p>(1) 年次の許可リストへの登録の際、配信リストの提供元へも分類申請を行うようにした。</p> <p>(2) 試行として、「情報の格付け一覧について」を動画周知した。</p>
Check	Action
<p>(1) 年次の処理のため、効果は来年度末まで確認できないため、確認は来年度末頃に行う。</p> <p>(2) 情報セキュリティインシデントは発生していない 教育動画は、2021/11/8現在、全教職員140名中101名(72.4%)にしか視聴されなかった。</p>	<p>(1) ※確認が来年度末頃になるため、その結果により検討する。</p> <p>(2) 重要な事項については全教職員に直接認識してもらえるように、総務企画主事(情報セキュリティ副責任者)と連携して検討する。</p>

9. 学生何でも相談室長 自己点検・評価報告

学生何でも相談室長の所管する事項	自己評価
(1) いじめ対策研修の実施 (2) 匿名Webフォームの運用	S A

Plan	Do
(1) 全学生に対するいじめ対策研修を4月に実施するとともに、教職員に対する研修を実施する。 (2) 匿名Webフォームを設置し、学生が気軽に相談・質問・意見できる環境を整備する。	(1) 4月20日に鹿児島大学教育学部准教授の方を講師に迎え、全学に対し講演会を実施した。 12月3日に教職員集会を活用して、いじめ防止に関する研修会を実施した。 (2) FORMSを用い、「学生何でも相談&質問&意見箱」を設置した。教室等にQRコードを掲示するとともに、Moodle上にもリンクを作成した。
Check	Action
(1) 一方的な講演ではなく、ワークや問いかけもあり、学生が考えることができる講演会となった。 教職員向けの研修会については、グループ学習形式でいじめ事例に対するの検討を行い、非常に好評であった。 (2) 学生からの相談・質問・意見が71件あり、そのすべてに対応できた。特にMoodleに掲載した回答は好評である。	(1) 次年度についても、継続して学生向けの講演会、教職員向けの研修会を実施予定である。 (2) 一部ではあるが、匿名にありがちな不遜な意見も見受けられた。ネットリテラシー教育を強化しつつ、学生がさらに気軽に利用できる環境の提供を続ける予定である。

10. 特定戦略タスクフォース担当自己点検・評価報告

特定戦略タスクフォース担当の所管する事項	自己評価
(1)自治体と連携し、地域課題の解決と人材育成を行う (2)本校教員に対する科研費に関する講習会の実施	A A

Plan	Do
<p>(1)包括連携協定を締結した長島町との相互協力を更に進めると同時に、他自治体との連携を踏まえた相互協力体制構築を進める</p> <p>(2)科研費獲得のための講習会等の実施</p>	<p>(1)長島町との受託研究を継続して事業を行った。加えて大崎町、始良市との将来的連携を踏まえて地域課題解決のために協力を行った。</p> <p>(2)長岡技術科学大学の教員を講師として、科研費獲得のための講習会を実施した。</p>
Check	Action
<p>(1)長島町との受託研究は地域未利用のバイオマスを活用して順調に進んでいる。また長島町だけでなく大崎町、始良市についても学生を同行させ、複眼的視野を持つ学生を育成するための人材育成の場としている。</p> <p>(2)講習会だけでなく、より具体的アドバイスがもらえるよう他大学の教員へ橋渡しをするフォローも行った。</p>	<p>(1)今後も継続して長島町との事業を継続する。大崎町、始良市については、包括連携協定締結に向け、相互に協力できる具体的な事項を洗い出す。また学生の教育についても継続していく。</p> <p>(2)今後も継続して講習会を実施していく。</p>

11. 機械工学科長 自己点検・評価報告

機械工学科の目標	自己評価
(1) ストレート卒業率 85% を目指して、学科教員担当科目の単位取得率を 90% とする。	A
(2) 女子学生のケア、入試倍率の増、教育・職場環境改善のため、女性教員を採用する。	S

Plan	Do																				
<p>(1-1) 1年生に対しては、チューター制を利用して、学生の学習方法について、必要に応じて、アドバイスを行う。</p> <p>(1-2) 1年機械基礎数学において、小テストでの不合格者に対して、復習を行わせた後にやり直し試験を行う。</p> <p>(1-3) 1年生チュートリアルを実施して、数学を中心に自学自習を行わせて、自主的・継続的に学習する力を身につけさせる。</p> <p>(1-4) 全学年の学生に対して、科目担当教員が単位取得率90%に向けて、学習の指導を行う。</p> <p>(1-5) 個々の学生の目的に応じた自発的・継続的学習の取り組みとして、資格取得試験およびコンテストへの参加を推奨する。</p> <p>(2) 公募の際、女性の積極的な募集を行っていることを明記する。</p>	<p>(1-1) チューター制を利用して、学生の得意・不得意科目の把握を行い、学習方法について、適宜、アドバイスを行った。</p> <p>(1-2) 機械基礎数学において、小テストの不合格者に対して、復習をさせた後に、やり直し試験を行った。</p> <p>(1-3) 毎週木曜日4限目に主として数学の自学自習を行わせ、自学・自習の習慣を身につけさせる活動を行った。</p> <p>(1-4) 原級留置対策のため、補講などを実施した後に、再評価・再試験等の充実を図った。</p> <p>(1-5) 4年生に安全の資格認定試験、意匠設計に係る授業の一環として2・3年生に自動車デザインコンテストへの参加に取り組みさせた。</p> <p>(2) 男女共同参画の推進および同等の評価と認められる場合に女性を優先的に採用する旨、募集要領に明記して、公募を行った。</p>																				
Check	Action																				
<p>(1) 機械工学科教員の担当科目で、学生が90%以上、単位を修得した科目の割合にて、目標達成率を評価した。ストレート卒業を目指す1年生については、全員の進級が達成されたが、再評価試験で結果的に進級できた学生が7名いる。また、安全の資格試験に受検の15名全員が合格し、自動車デザインコンテストに30名の応募があり、自発的に取り組む学生がみられたことから、項目(1)をAと判定する。</p> <table style="margin-left: 20px;"> <tr> <td>1年生</td> <td>83%(数学:95%)</td> <td>原級留置</td> <td>0/42名 (0%)</td> </tr> <tr> <td>2年生</td> <td>60%</td> <td>原級留置</td> <td>2/42名 (4%)</td> </tr> <tr> <td>3年生</td> <td>80%</td> <td>原級留置</td> <td>11/44名 (25%)</td> </tr> <tr> <td>4年生</td> <td>100%</td> <td>原級留置</td> <td>2/46名 (4%)</td> </tr> <tr> <td>5年生</td> <td>77%</td> <td>原級留置</td> <td>3/42名 (7%)</td> </tr> </table> <p>(2) 女性教員の採用に至ったため、Sと判定する。</p>	1年生	83%(数学:95%)	原級留置	0/42名 (0%)	2年生	60%	原級留置	2/42名 (4%)	3年生	80%	原級留置	11/44名 (25%)	4年生	100%	原級留置	2/46名 (4%)	5年生	77%	原級留置	3/42名 (7%)	<p>(1-1) 単位未修得の科目については、早期の単位修得を目指し、教科担当、担任および学科が連携して、学生の学習指導を行う。</p> <p>(1-2) 成績不振や欠席の多い学生には、体調不良や心の悩み等を伴っている場合が多く、担任、科目担当、学科、学校、保護者、外部機関で情報を共有・連携し、早い段階から学習・生活指導を行う。</p> <p>(1-3) 提出物を出せない学生については、授業中に課題を行わせて提出させる等、授業での工夫を行う。</p> <p>(1-4) 資格試験やコンテストへの参加者や資格取得・入賞者の増を目指し、引き続き、学生への広報や支援を行っていく。</p> <p>(2) 女性教員のきめ細やかな目線による教育、学生指導、授業方法、進路指導、入試広報活動、職場環境等の改善にトライしてもらい、学科として活動の支援・協力・展開を行っていく。</p>
1年生	83%(数学:95%)	原級留置	0/42名 (0%)																		
2年生	60%	原級留置	2/42名 (4%)																		
3年生	80%	原級留置	11/44名 (25%)																		
4年生	100%	原級留置	2/46名 (4%)																		
5年生	77%	原級留置	3/42名 (7%)																		

12. 電気電子工学科長 自己点検・評価報告

電気電子工学科の目標	自己評価
(1)留年(原級留置)・退学者(1～5年)を5人程度以下/年とする	A

Plan	Do
<p>過去4年間の電気電子工学科の留年・退学者(転学・休学を除く,1～5年)</p> <p>R2年度:10人 R1年度:5人 H30年度:15人 H29年度:10人 (平均10人/年)(過去4年間)</p> <p>目標:留年(原級留置)・退学者(1～5年)を5人程度以下(半減)/年とする</p>	<p>・成績不振学生への補講・再評価・再試験実施:当該科目に対する学生の理解度向上(単位未修得率大幅低減)(2、3年生の留年者無し)(令和3年度)</p> <p>・チュータ制導入:1・2年生に対して学科全教員の割当:面談(成績、生活相談)等実施(2年生の留年者無し)(令和3年度)</p>
Check	Action
<p>目標に対する結果:電気電子工学科の留年・退学者(1～5年)(転学・休学を除く)(令和3年度)⇒4人(目標達成)</p> <p>1年:1人(留年) 2年:無し 3年:無し 4年:2人(留年) 5年:1人(自発的な退学)</p>	<p>(令和4年度実施予定内容)</p> <p>・電気電子工学科の魅力を受験生(中学生)に伝える広報活動の充実化:①学科PRパンフレットの刷新、②オープンバーチャルキャンパス(学科コーナ)の充実化(現時点では再生回数と入試倍率の関係が不明:調査検討等要)</p> <p>・継続して行う活動(学科教員):①チュータ制(1・2年生)、②SHR(1・2年生)(1回/週)、③成績不振学生への補講・再評価・再試験実施(より深い理解度・専門への興味向上を目指す)</p>

13. 電子制御工学科長 自己点検・評価報告

電子制御工学科の目標	自己評価
(1)遠隔授業コンテンツの充実化としてオンデマンド用の授業教材は動画で作成する。	A
(2) 1, 2年生のチュートリアルを通して低学年から留年者対策を行う。	A
(3)科目の単位修得率向上対策を実施し, 各科目において未修得者を1割以下にする。	A

Plan	Do
<p>(1)遠隔授業コンテンツの充実化としてオンデマンド用の授業教材は動画で作成する。</p> <p>(2) 1,2年生のチュートリアルを通して低学年から留年者対策を行う。</p> <p>(3)科目の単位修得率向上対策を実施し, 各科目において未修得者を1割以下にする。</p>	<p>(1)前期の遠隔授業, それ以降の期間の遠隔授業において, オンデマンド用の授業教材は動画を作成する。</p> <p>(2)チュートリアルは, 前期1回, 後期1回を学科全体として実施し, あとはチューター(担当教員)の判断で実施した。</p> <p>(3)科目の補講(クラス全員また個人)や演習および試験のやり直し試験を実施した。</p>
Check	Action
<p>(1)アンケートを実施し, 動画コンテンツの作成・活用状況を確認した。今年度の座学の遠隔授業で動画コンテンツを利用した:10名中8名, 今後の遠隔授業や補助教材として, 動画コンテンツを活用する予定:10名中9名。</p> <p>(2)低学年の学生状況の把握が可能となり, 早期の対策が可能となった。その結果, 1,2年の留年者が令和2年度の3名から令和3年度は1名に減った。</p> <p>(3)1-5年の専門科目の未修得率を調査し, 50科目中47科目(94%)で, 未修得率が1割以下となっている。</p>	<p>(1)令和4年度の遠隔授業では, 学科教員全員が「遠隔授業実施のガイドライン」に沿って, オンデマンド(動画コンテンツの作成・活用)およびオンラインで実施する。</p> <p>(2)チュートリアルが留年生対策には有効であったため継続して行っていく。</p> <p>(3)令和4年度は令和3年度の実績を超えて, 各科目において未修得1割以下にする。</p>

14. 情報工学科長 自己点検・評価報告

情報工学科の目標	自己評価
(1)学科の留年者数を7名以下にする。 (2)査読付き論文を学科で年間3本採録を目指す。	A A

Plan	Do
(1) 学科の留年者数を7名以下にする。 (2) 査読付き論文を学科で年間3本採録を目指す。	(1) 後期中間試験前後1ヶ月の専門科目における小テスト、単元テスト、中間試験等の実施計画を公表、掲示し、自主的に勉学に取り組ませた。 (2) 論文投稿を意識した。
Check	Action
(1) 留年生数1年1名(転学1名を含む)、2年0名、3年6名(病気3名を含む)、4年1名(休学1名を含む)、5年1名(休学1名を含む)計10名(転学、病気ならびに休学者数6名を含む)。病気等理由有の留年生を除くと3名であり、目標を達成。 (2) 採録数は6本で目標を達成(フルペーパー4、レター1、国際会議発表3)。ただし、レター1は0.5本、国際会議発表1は0.5本とカウントした。	(1) 単位を落として進級した学生に対しては、再試験において早めに回復させるように指導する。さらに、ケアが必要な学生は、学科全教員にも情報の共有化をはかり、学科教員で注意深く見守り、学生の不調を早めに察知できるようにする。 (2) 継続的に論文投稿、採録を目指す。

15. 都市環境デザイン工学科長 自己点検・評価報告

都市環境デザイン工学科の目標		自己評価
<p>令和3年度 良好なキャンパス環境の創出の事業計画「小さな風景に変化を！ 広がる想像力」が令和2年度に採択されている。</p> <p>(1) 学年を横断し多くの学生が設計，施工に広く関わることによって，より魅力的な校内環境の整備を目指す。</p> <p>(2) 学科の学生全体が関わる新たなPBLの形を模索し，今後の同様のPBLに向けたモデルケースとする。</p>		<p>A</p> <p>A</p>
<h3>Plan</h3>	<h3>Do</h3>	
<p>※高安研究室(5年生)を中心に実施した。</p> <p>学生アンケート(1～3年)による意見聴取と課題設定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実施場所の決定 → 階段・踊り場(都市環境棟) ・実施内容の具体化 → 壁の塗り替え，窓の色付け 		
<h3>Check</h3>	<h3>Action</h3>	
<p>(1) 学生アンケートによる評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・建築設計の学習意欲の向上だけでなく，学校生活に対する意欲の向上につながる(67%)。 ・窓の色，壁の色については，概ね好評(79%)だったが，好き嫌いもあった。 <p>(2) 学科横断型PBLとしての活用を目指したが，低学年の学生はアンケートによる参加にとどまった。</p>	<p>(1) 同様の事業を行う場合の参考にする。 → 令和4年度の予算を申請中</p> <p>(2) 今後，展示物や展示方法を通して，新たな学科横断型PBLとしての活用を目指す。</p>	

16. 一般教育科長 自己点検・評価報告

一般教育科の目標	自己評価
<p>(1)国語 授業及び家庭学習を充実させるために、宿題や提出物の管理と指導を徹底して、日常的な学習の習慣化を促す。</p> <p>(2)社会 学生の主体的な学びを促す教授方法を実践し、教科として共有する。</p> <p>(3)数学 各科目の学年末における成績の平均点が、各クラスとも70点以上になるように努める。</p> <p>(4)物理 物理実験の内容の改善</p> <p>(5)化学 化学Ⅱ 対策用の課題を夏休みに出し、単位未修得者を少しでも減らす。</p> <p>(6)英語 外部検定試験の受験者を増やす。</p> <p>(7)ドイツ語 CefR完全対応を目指す。</p> <p>(8)保健・体育 積極的な声かけを行いスポーツ活動への参加を促すとともに、学生の体力向上を目指す。</p>	<p>A:5教科 国、社、物、英、ドイツ</p> <p>B:3教科 数、化、保体</p>

Plan	Do
<p>各教科担当教員により上記の目標を立て、適宜対応を行った。</p>	<p>授業内容や手法の工夫・改善、学生たちへの情報提供、長期休暇中を含めた宿題などの工夫、学生への積極的な声かけなどを各教科で実施した。</p>
Check	Action
<p>基本的には全教科で良い方向への進捗が見られ、様々な工夫が結果に反映されたと考える。</p> <p>一方、学年により学生の学力差が大きくなるため評価が次第に下がったり、遠隔授業のため実施が困難になる面も見られた。</p>	<p>今年度の成果を次年度の授業に活かしつつ、今回思うように成果が得られなかった項目については実施内容の改善を検討し、更に評価を高いものにしたいと考えている。</p>

17. 総務課長 自己点検・評価報告

総務課長の所管する事項（一部抜粋）	自己評価
(1)人事に関する計画（職員の資質向上）	A
(2)研究成果の社会実装に向けた研究活動等の広報	A
(3)建物改修に伴う円滑な移転の実施	A

Plan	Do
<p>(1)職員の積極的な人事交流を進め、多様な人材育成を図る。</p> <p>(2)特色ある研究推進・産学連携活動や、社会実装の成果等に関する記事を作成し、本校のPRに繋げる。</p> <p>(3)情報工学科棟及び第二志学寮改修に係る移転業務について、関係する教職員の要望等を考慮し、出来る限り教育研究活動に支障が出ないように実施する。</p>	<p>(1)職員の人事交流希望を確認し、派遣先との調整を行う。</p> <p>(2)社会実装に向けた研究活動をはじめとする、社会との結び付きが強い活動をプレスリリース案にまとめ、機構本部（研究推進課）に提出した。</p> <p>(3)移転作業スケジュールや物品の一時保管場所など、可能な限り関係する教員の要望等を考慮し調整した。また、移転準備のアナウンスや梱包資材の配布などを早くから行った。</p>
Check	Action
<p>(1)本年度から職員1名を他機関へ派遣することとした。（現在計2名派遣中）</p> <p>(2)提出した記事が配信会社（PRTIMES）を通じてプレスリリースされた。昨年7月から毎月WEB配信されたのは、鹿児島高専のみである。</p> <p>(3)工事日程の関係で往路の移転開始が夏期休業開始直後となり準備作業の時間が限られたが、概ね円滑に移転できた。</p>	<p>(1)次年度以降も交流のための検討を積極的に行う。</p> <p>(2)引き続き記事の投稿を行うと同時に、地元記者クラブ等にも独自の配信を行う。</p> <p>(3)今後同様の移転業務を行う際は、事前準備作業についても、業者に委託できる作業がないか検討する。（教職員の負担軽減のため）</p>

18. 学生課長 自己点検・評価報告

学生課長の所管する事項	自己評価
(1)教務・入試に関すること	A
(2)学生厚生補導、寄宿舎に関すること	A
(3)図書、広報に関すること	A

Plan	Do
<p>(1)-1 カリキュラムポリシー(本科)の見直し及び令和4年度新入生からの混合クラス導入に向けたカリキュラムの改訂。</p> <p>(1)-2 海外提携校との連携及び各種プログラムの実施。</p> <p>(2) 学生の各種コンテスト等への参加推進。</p>	<p>(1)-1 教務委員会、教務主事・主事補会議で議論を重ね、カリキュラムポリシーは共通事項を作成し、各学科にて学科別を作成、教務委員会で全体版として取り纏めた。また、新教育課程表及び関係規則(課程修了要件、外部単位の取扱い等)について整備した。</p> <p>(1)-2 NTIストックホルム校とのオンライン交流、異文化理解力向上プログラム等を実施した。</p> <p>(2) SSD(Supporting Students Dream)プロジェクトチームを設置し、11件を採択し支援した。</p>
Check	Action
<p>(1)-1 教務委員会、教務主事・主事補会議、各学科での議論を重ね、カリキュラムポリシーは段階的に取り纏め、教務委員会で確認・修正をもって見直した。また、新教育課程表及び関係規則に関する意見を集約、運営会議での審議・了承をもってカリキュラム改訂を行った。</p> <p>(1)-2 集計済みの事後アンケートでは参加学生全員から満足度に対し高評価が得られた。</p> <p>(2) 支援体制を確立し、活動の募集、選定を実施した。</p>	<p>(1)-1 高専機構の教育方針や時代のニーズ等を踏まえた、3つのポリシー及びカリキュラムのさらなる検討、見直しを、適宜、実施してゆく。</p> <p>(1)-2 海外提携校との連携推進や各種プログラムの充実を図ってゆく。</p> <p>(2) 継続した支援により活動の活発化を推進するとともに、今後は活動報告や参加学生アンケート等によりさらなる充実を図る。</p>

19. 校長による自己点検・評価総括

校長による自己点検評価総括

(1)本校の課題として、次のような項目があげられる。

- ・*Society5.0*実現に向けた方策
- ・国際的に魅力ある鹿児島高専の実現
- ・社会的な問題解決に対し、新たな価値を創出できる本校の姿
- ・地方創生への貢献
- ・変化に柔軟に対応できる組織の実現

(2)中期的な課題として、次のような項目があげられる。

- ・多様かつ優れた教員の確保
- ・教育の質向上と改善
- ・学生支援、生活支援
- ・国際性の涵養
- ・地域貢献
- ・財政問題への対応

(3)短期的な課題として、次のような項目があげられる。

- ・コロナ禍への対応
- ・教育課程の再編
- ・科研費、外部資金の獲得
- ・情報の発信
- ・留年、退学への対策
- ・教員評価の透明性
- ・情報セキュリティ対策の強化
- ・研究活動の活性化

(4)上記の問題に対応するために、大きな柱としては以下の内容の検討が必要である。

- ・科学技術イノベーション人材育成のため、社会実装に向けた実践的学習の強化
- ・リベラルアーツの強化
- ・開発型の研究力の強化
- ・分野横断的能力の育成
- ・教育課程の再編
- ・企業との共同研究

(5)重要な点は、学生が教えられる教育から、自ら学ぶ教育への転換である。学生が自らの意思で将来のキャリアを描くために、挑戦・成長できる環境と機会を創出すべきである。

(6)学生が*Well-being*のために何をなすべきかを考えて実行するような*Positive Education*を導入したい。学生自身の*Well-being*の実現向上と共に社会の*Well-being*の実現向上に貢献できるシステムを作り上げていきたい。

令和 3 年度

自己点検・評価報告書（詳細版）

鹿児島工業高等専門学校

目次

I. 令和3年度の自己点検・評価概要	35
II. 令和3年度の評価項目に対する自己点検・評価結果	36
1. 本校のミッションに関する取り組み	36
1.1 国際的に通用する創造性豊かで人格が優れた技術者を養成すること	36
1.1.1 教育の質の保証	36
(a) 学位授与方針について	36
・カリキュラムポリシーの見直し(本科)	36
・社会状況、技術動向に応じた3つのポリシーの見直し(定期的見直し)	36
(b) 本科の教育について	36
・成績保管状況の把握	36
・成績評価の妥当性の把握	37
・試験問題のレベル、繰り返し問題チェックの把握	37
・学修単位の学修時間の把握	37
(c) 専攻科の教育について	38
・試験問題のレベル、繰り返し問題チェックの把握	38
・学修単位の学修時間の把握	38
1.1.2 教育の成果	38
(a) 本科の教育の成果について	38
・留年率、退学率の改善の方策(全国の平均を目安とする)	38
・入試倍率の把握(確保)	39
・本科生の学外研究発表の推進、状況の把握	39
1.1.3 グローバル教育(国際交流)	39
(a) 英語力向上の取り組みについて	39
・提携校との連携	39
・提携校との連携プログラムに参加した学生のTOEIC等の点数の把握	40
(b) 海外インターンシップについて	40
・提携校との連携プログラムに参加した学生のTOEIC等の点数の把握	40
1.1.4 学生支援	41
(a) 学生支援体制について①	41
・教育、生活環境の利用状況や満足度等を学校として把握し、改善するための体制の整備、 学習環境(含ICT)の把握、留学生支援に対する把握、障害者支援に対する把握	41
(b) 学生支援体制について②	41
・キャリア支援、進路指導の全学的取組推進(キャリア支援室設置)	41
・キャリア支援、進路指導状況の把握・ガイドライン等の策定	42
(c) 学生支援体制について③	42
・いじめ対策研修の実施	42
(d) 学生支援体制について④	42
・特色ある取り組みの推進と状況把握(各種コンテスト参加推進:SSD)	42
(e) 在校生学生アンケートについて	43

・ 在校生（4年生以下）に対するアンケート（学生の多様なニーズの把握）	43
(f) 卒業生（5年生）学生アンケートについて	43
・ 卒業生（5年生）に対するアンケート（達成度、満足度、授業改善要望）	43
1.2 開発型の教育・研究に重きをおき、社会的・経済的価値あるものを創出していくこと	44
1.2.1 教育の成果	44
(a) 専攻科の教育の成果について	44
・ 環境創造工学プロジェクトの取組、環境創造工学プロジェクトでの長島町関連取組の継続	44
・ 定員充足率、達成度の把握、満足度の把握、専攻科修了率の把握、学位取得率の把握、プログラム修了率等の把握	44
・ 専攻科生の学外研究発表の推進、状況の把握	44
1.2.2 研究	45
(a) 教員の研究業績について	45
・ 第5ブロックの共通目標達成のための取組	45
・ 特例適用教員数の向上	45
(b) 科研費と外部資金について	46
・ 科研費採択率向上	46
1.2.3 社会連携（企業との連携）	46
(a) 企業との連携について①	46
・ NECとの連携状況の把握	46
1.3 地域の産業、文化さらには生活を支えていく地域に根差した高専とすること	46
1.3.1 社会連携	46
(a) 自治体等との連携について	46
・ 教育における自治体との連携	46
・ 技術士会との共同教育	47
・ 霧島市、日置市との連携	47
・ 委員等による自治体との連携	47
・ キャリア教育における自治体との連携	48
(b) 鹿児島高専テクノクラブ（KTC）について	48
・ KTC企業見学状況等のKTCによるキャリア教育の状況、成果の把握	48
・ 共同研究状況の把握	49
・ KTC事業の把握	49
(c) 企業との連携について②	49
・ 京セラ株式会社との連携	49
1.3.2 学生支援	50
(a) 学生支援体制について⑤	50
・ 地域に根差した特色ある取り組みの推進と状況把握（吹奏楽演奏訪問、メカトロ部小学校訪問、錦江スポーツクラブ、Robogals）	50
2. ミッション以外の取り組み	51
(a) 教育理念、ミッション、学習教育目標等の改定・整理	51

(b)	各学科のPDCA実施	51
(c)	自己点検・評価報告書をミッションベースで再編	51
3.	管理運営	52
3.1	管理運営	52
(a)	教育組織について	52
・	女性教員の増加のための取組、体制、組織、女性教員比率の把握	52
・	女子学生の増加のための取組、女子学生の比率等の把握	52
(b)	FD研修、表彰、SD等について	53
・	教員相互の授業参観の改善	53
・	教育力の質の向上のための研修等	53
・	遠隔授業の質の向上のための研修等	54
・	学生の評価による授業評価の把握	54
・	FDフォーラム・FDレクチャーシリーズの開催	54
・	新任教職研修（SD関連）	55
・	ハラスメント防止（SD関連）	55
(c)	自己点検・評価	55
・	教員による自己点検票の改定	55
・	各規定の制定	56
・	PDCAに基づいた評価の必要性（PDCAサイクルの再構築）	56
・	企業に対する満足度調査の実施と調査結果の検証について	56
・	魅力ある鹿児島高専への取り組み：混合クラス、PBL、共通実験	56
4.	各外部評価の指摘事項の改善点	57
4.1	指摘事項	57
(a)	ミッションに対する評価項目の成熟化	57
(b)	数値目標の評価と具体化	57
(c)	教員間の議論を深める	58
(d)	自己評価委員会の責任体制の構築と議論、フィードバックの必要性	58
(e)	自己評価書の詳細版のわかりやすい工夫（構成、文言等）	58
(f)	Sは100パーセントか、Sの意味づけをしっかりとつける	59

令和3年度の自己点検・評価概要

本校では、国立高等専門学校機構の第4期中期計画をベースに、年度計画および具体的なPlanを策定し、それを実現すべく、Do、Check、Actionを行っている。また、その活動状況について年度ごとに自己点検・評価委員会及び外部評価委員会を開催し、自己点検・評価を行っている。

令和3年度は、新たに総務企画委員会を設置し、自己点検・評価および外部評価を担当することとし、自己点検・評価委員会の実施方法や自己点検・評価委員会および外部評価委員会の実施時期の見直し等、効果的な自己点検の在り方を検討し実施した。

さらに、自己点検・評価委員会の体制を強化するために、校長を委員長とした規則改正を行った。

また、自己点検・評価報告書については、簡易版を新たに各部署からの主報告事項の取り纏めとして作成し、詳細版については「分類」を導入し、ミッションと各評価項目の関連が分かる形に再編した。

<自己評価基準>

達成度と自己評価	評価基準
S：計画以上に進行している	「目標以上の成果が得られている」、または「目標以上の成果が得られる形で進んでいる」
A：計画通りに進行している	「目標通り100%の成果が得られている（ほぼ目標通りの成果が得られている形を含む）」 または「目標通り100%の成果が得られる形で進んでいる」
B：計画からやや遅れている	「目標には届かなかったが、概ね70%以上の成果が得られている」 または「目標には届かないが、概ね70%以上の成果が得られる形で進んでいる」
C：計画から遅れている	「目標の50%以上70%未満の成果にとどまっている」 または「目標の50%以上70%未満の成果となる形で進んでいる」
D：計画から大幅に遅れている	「目標の50%未満の成果にとどまっている」 または「目標の50%未満の成果となる形で進んでいる」

1. 本校のミッションに関する取り組み

1.1 国際的に通用する創造性豊かで人格が優れた技術者を養成すること

1.1.1 教育の質の保証

(a) 学位授与方針について

番号	項目	内容
1	取組事項	カリキュラムポリシーの見直し(本科)
	P【計画】	令和2年度、ディプロマポリシー（本科）について見直しを行ったため、令和3年度は、カリキュラムポリシー（本科）についての見直しを行う。
	D【行った活動】	教務委員会、教務主事・主事補会議で議論を重ね、カリキュラムポリシー（共通事項）を作成し、その後、学科長へ各学科のカリキュラムポリシー（学科別）の作成を依頼した。 再度、教務委員会でカリキュラムポリシー（全体版）について確認し、見直しを行った。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	教務委員会、教務主事・主事補会議、各学科で議論を重ね、カリキュラムポリシー見直しを行うことができた。
	自己評価	A：計画通りに進んでいる
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	ディプロマポリシー及びカリキュラムポリシーについては、今後、時代のニーズに合わせながらカスタマイズさせていく。
2	取組事項	社会状況、技術動向に応じた3つのポリシーの見直し（定期的見直し）
	P【計画】	本科と専攻科の3ポリシー（①アドミッションポリシー、②ディプロマポリシー、③カリキュラムポリシー）については、必要に応じて見直しを行う。
	D【行った活動】	専攻科の3ポリシーの見直しについて検討し、令和3年度は変更する必要ないと判断した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	本科は高専機構における基本方針の見直しと変更、専攻科は大学改革支援・学位授与機構（機関別認証評価）の審査における指摘事項等を受けて、本校の3ポリシーを変更すべきかどうかを検討、判断している。検討の結果、令和3年度はポリシーの変更は必要ないと判断した。
	自己評価	A：計画通りに進んでいる
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	3ポリシーの見直しは、今後も必要に応じて検討を行う。

(b) 本科の教育について

番号	項目	内容
1	取組事項	成績保管状況の把握
	P【計画】	成績保管資料について、教員は試験実施後2か月以内に指定フォルダへ保管するよう依頼する。 令和2年度分の成績保管資料を令和3年度にチェックする。
	D【行った活動】	令和2年度分を令和3年4月にチェックを行った。 令和3年度の成績保管資料については、卒業判定会議、進級判定会議で保管を依頼した。また、3月の教務委員会で令和3年度の成績保管資料のチェック体制等について確認された。

	C【得られた成果および自己評価の理由】	令和2年度成績保管資料をチェックした結果、問題はなかった。 令和3年度成績保管資料についても、適切に保管する体制が取れている。
	自己評価	A：計画通りに進んでいる
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	教員として基本的な業務であるため、指導を含め、引き続き管理を強化していく。
2	取組事項	成績評価の妥当性の把握
	P【計画】	成績評価の妥当性について、シラバスの評価方法に基づき評価されているかどうか教務委員会で確認する。
	D【行った活動】	教務委員会で令和2年度分の確認対象科目を決定し、各科の教務委員が確認を行った。確認結果については、教務委員会で報告し情報を共有した。 必要に応じて、教務主事から科目担当者へ指導を行った。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	成績保管資料を確認した結果、特に大きな問題点は確認されなかった。また、科目担当者へ確認（ヒアリング）した結果、シラバスの修正を要する科目もあったが、特に大きな問題はなかった。
	自己評価	A：計画通りに進んでいる
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	教員として基本的な業務であるため、指導を含め、引き続き管理を強化していく。
3	取組事項	試験問題のレベル、繰り返し問題チェックの把握
	P【計画】	試験実施科目については、セルフチェックシート（紙媒体）を提出させる。 教務委員会（3月）で、1年分のセルフチェックシートを確認し、試験問題のレベルや難易度について確認する。
	D【行った活動】	科目担当教員からセルフチェックシート（紙媒体）の提出はあるものの、学校（教務委員会）として、1年分のセルフチェックシートを確認することは出来なかった。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	学校（教務委員会）としての把握は、遅れているものの、科目担当者は、セルフチェックシートを提出することにより、試験問題のレベルや学生の理解度等を再確認するようになってきた。
	自己評価	B：計画からやや遅れている
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	教員として基本的な業務であるため、指導を含め、引き続き管理を強化していく。
4	取組事項	学修単位の学修時間の把握
	P【計画】	学修単位の学修時間の把握について、教務委員会等で議論を重ね、対応方針等について検討していく。
	D【行った活動】	教務委員会、教務主事・主事補会議で、学修単位の学修時間の把握等について検討を重ねた。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	学修時間の把握については、大きく2つの案にまとめられたが、どちらの方が本校にふさわしいか検討中である。
	自己評価	B：計画からやや遅れている

	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	引き続き、教務委員会の検討課題とし、教務委員会で検討を重ねていく。
--	---------------------------	-----------------------------------

(c) 専攻科の教育について

番号	項目	内容
1	取組事項	試験問題のレベル、繰り返し問題チェックの把握
	P【計画】	本科と同様に、試験実施科目については、セルフチェックシート（紙媒体）を提出させる。 専攻科委員会（3月）で、1年分のセルフチェックシートを確認し、試験問題のレベルや難易度について確認する。
	D【行った活動】	科目担当教員からセルフチェックシート（紙媒体）の提出はあるものの、学校（専攻科委員会）として、1年分のセルフチェックシートを確認することは出来なかった。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	学校（専攻科委員会）としての把握は、遅れているものの、科目担当者は、セルフチェックシートを提出することにより、試験問題のレベルや学生の理解度等を再確認するようになってきた。
	自己評価	B：計画からやや遅れている
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	教員として基本的な業務であるため、指導を含め、引き続き管理を強化していく。
2	取組事項	学修単位の学修時間の把握
	P【計画】	学修単位の学修時間の把握については、講義第1週目に自学自習チェックシートを配布し、定期試験終了後、回収、確認する。また、試験では、講義で教授した内容に加え、自学自習が必要な発展的な設問を設け、学修時間のエビデンスとすることを検討する。
	D【行った活動】	令和3年度から、自学自習チェックシートを導入し、学修時間が不足している学生に対し、科目担当教員から指導を行った。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	学生の自学自習の内容及び時間等を把握することができ、学生への指導へ活用させることができた。
	自己評価	A：計画通りに進んでいる
A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度以降も、科目担当者がチェックシートを活用し、学生への指導へ活用していく。	

1.1.2 教育の成果

(a) 本科の教育の成果について

番号	項目	内容
1	取組事項	留年率、退学率の改善の方策（全国の平均を目安とする）
	P【計画】	令和2年度に実施した学習状況を把握するためのアンケート調査の結果を分析し、今後の学習指導等へ活用していく。 また、前期終了科目で「不可」の科目については、全学的に早期の対応（再評価）を依頼する。
	D【行った活動】	令和2年度に実施したアンケート結果を分析することはできていないが、前期終了科目で「不可」の科目について、全学的に

		早期（10月中）の対応（再評価）を依頼した。 令和3年度末の状況は、留年率3.37%、退学・転学率1.35%となった。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	留年対策に係る学生支援の在り方について、今後、入学する学生の質の低下を考慮し、教員が自ら授業力・対応力・人間力等を向上させることが、今後の課題と考えられる。
	自己評価	B：計画からやや遅れている
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	引き続き、教務委員会の検討課題とし、教務委員会で検討を重ねていく。
2	取組事項	入試倍率の把握（確保）
	P【計画】	入試広報プロジェクトチームを中心に入試広報活動を行っていく。また、入試広報活動のWeb化についても推進させていく。
	D【行った活動】	鹿児島県内の中学校（72校）へ入試広報プロジェクト・チーム（PT）を派遣し、入試広報に係るPR活動を行うことができた。本校のホームページに学校説明会（バーチャルオープンキャンパス）に係る動画を学科ごとに準備することができた。（①学科紹介、②在校生の声、③研究室紹介、④学科PR等）
	C【得られた成果および自己評価の理由】	コロナ禍の影響で、限られた範囲での入試広報活動となったが、入試広報活動のWeb化を推進させることができた。しかし、Webの閲覧状況が想定より増えていなかった。また入試倍率についても、令和2年度と比較して低下した。
	自己評価	B：計画からやや遅れている
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度以降も引き続き、入試広報活動を推進していく。また、Webの閲覧状況が増える方策について検討していく。
3	取組事項	本科生の学外研究発表の推進、状況の把握
	P【計画】	令和3年度末に、本科生の学外発表の状況を各学科の教務委員が把握し、教務委員会に報告する。
	D【行った活動】	各学科の教務委員は、学外発表の状況を把握し、教務係へ報告したが、学校（教務委員会）として、学外発表の状況を把握することは出来なかった。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	令和3年度内に完結できなかったため、令和4年度の教務委員会で報告し内容を確認する。
	自己評価	B：計画からやや遅れている
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度も同様に学外発表の推進、状況の把握を行う。

1.1.3 グローバル教育（国際交流）

(a) 英語力向上の取り組みについて

番号	項目	内容
	取組事項	提携校との連携
	P【計画】	1) NTI スtockホルム校（SWE）とのオンライン交流を不定期に開催する 2) ①異文化理解力向上プログラム、②課題解決力向上プログラ

1		ムを9月に開催する 3) グローバルコミュニケーション力向上プログラムを2月から3月にかけて開催する
	D【行った活動】	1) ①異文化交流：全5回実施。本校参加学生数は延べ58名 ②3D-CG Workshop：全2回実施、本校からの参加学生数は延べ15名 2) ①2日間のバーチャルホームステイ（カナダ、オーストラリア）を実施、参加学生15名 ②3日間のプログラムを模擬国連スタイルで実施、参加学生12名 3) 英語での意見発表、ディベートの基礎スキル向上のためのセミナー、60分×8回の実施、参加学生数12名
	C【得られた成果および自己評価の理由】	1)、2)ともに、事後アンケートで参加学生全員が「おおいに満足している」もしくは「いづらか満足している」と回答するなど、非常にポジティブな回答が得られた。 3) 全日程終了後にアンケート調査を行う。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	1) 提携校との連携 オンライン交流プログラムを充実させ、英語力向上に努める。 2) 3) 異文化理解力、課題解決力、グローバルコミュニケーション力育成に加えて、TOEICスコアアップ講座など資格取得につながるオンラインプログラムを開発・実施する。
2	取組事項	提携校との連携プログラムに参加した学生のTOEIC等の点数の把握
	P【計画】	令和3年度に開催した提携校との連携プログラムに参加した学生のTOEIC-Bridgeの点数の把握を行う。
	D【行った活動】	令和4年1月19日に1～3年生がTOEIC-Bridgeを受験したため、連携プログラムに参加した学生の平均点と学年平均点を比較した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	TOEIC-Bridgeスコアの学年平均値と提携校との連携プログラム参加学生（うち、1～3年生）の平均値とを比較した結果、すべての学年において、プログラム参加学生の平均値の方が各学年平均値よりも高いという結果が得られた。 （学年平均値：＜1年生＞293 ＜2年生＞304 ＜3年生＞321、プログラム参加学生の平均値：＜1年生＞336 ＜2年生＞374 ＜3年生＞395）
	自己評価	A：計画通りに進行している
A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	TOEIC-Bridgeに加えて、オンライン教材を用いた「TOEICスコアアップチャレンジ」および「多読・多聴マラソンチャレンジ」のプレ・ポストテストを実施し、英語力向上プログラムの効果を検証する。	

(b) 海外インターンシップについて

番号	項目	内容
	取組事項	提携校との連携プログラムに参加した学生のTOEIC等の点数の把握

1	P【計画】	海外インターンシップのオンライン開催を検討する。
	D【行った活動】	海外インターンシップのオンライン開催を検討したが、相手先機関等との調整が難航し、実施できなかった。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	新型コロナウイルスの影響により、海外インターンシップを実施できなかった。
	自己評価	C：計画から遅れている
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	新型コロナウイルスの感染状況を考慮しながら、令和4年度も海外インターンシップの実施を検討する。

1.1.4 学生支援

(a) 学生支援体制について①

番号	項目	内容
1	取組事項	教育、生活環境の利用状況や満足度等を学校として把握し、改善するための体制の整備、学習環境（含 ICT）の把握、留学生支援に対する把握、障害者支援に対する把握
	P【計画】	令和2年度に実施した満足度調査アンケートでの回答を参考に改善可能な点について検討するとともに、令和3年度も満足度調査アンケートを実施する。
	D【行った活動】	令和2年度のアンケートの回答を基に、女子更衣室の整備、体育館ワックス頻度の増加等の改善を行うとともに、2月13日に全学生向けに満足度調査アンケートを実施し、回答を取集中である。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	教育、生活環境の利用状況や満足度等を学校として把握することができ、得られた意見を基に改善できた事項もあった。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	満足度調査アンケートについては、毎年度実施することを学生委員会で決定した。 令和3年度の意見を基に、令和4年度改善すべき事項を学生委員会でも共有する予定である。

(b) 学生支援体制について②

番号	項目	内容
1	取組事項	キャリア支援、進路指導の全学的取組推進（キャリア支援室設置）
	P【計画】	キャリア支援室を設置し、各学科が実施しているキャリア支援について整理し、キャリア支援プログラムを企画し、実施する。
	D【行った活動】	キャリア支援室を設置し、各学科のキャリア支援内容を調査した。求人面談の対応手順について整理し、学生係、各科担任と共有した。 令和3年度のキャリア支援プログラムとして、就職に関するセミナー、学内合同セミナー等を企画し、実施した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	求人面談の対応手順について整理し、就職に関するセミナー、学内合同企業セミナー等を企画し、実施した。

	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	これまで行ってきたキャリア支援プログラムの整理を行った上で、新たなキャリア支援プログラムを計画・立案し、キャリア支援プログラムの年間計画を作成し、学生へ周知する。
2	取組事項	キャリア支援、進路指導状況の把握・ガイドライン等の策定
	P【計画】	キャリア支援、進路指導状況を把握し、就職・進学指導ガイドラインの策定を行う。 求人管理システム導入の検討を行う。
	D【行った活動】	就職・進学指導ガイドラインを作成し、学内へ周知した。また、就職・進学指導ガイドラインの内容を学生用にまとめ、4年生へ周知した。 2社から求人管理システムの案内・説明を頂き、求人管理システム導入の検討を行った。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	就職・進学指導ガイドラインは、計画通りに作成でき、学生へも周知できた。 求人管理システムについては、どのシステムを導入するか検討中である。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	求人管理システムについては、どのシステムを導入するか令和4年度中に決定する。

(c) 学生支援体制について③

番号	項目	内容
1	取組事項	いじめ対策研修の実施
	P【計画】	全学生に対するいじめ対策研修を4月に実施するとともに、教職員に対する研修を実施する。
	D【行った活動】	令和3年4月20日に鹿児島大学教育学部准教授の方を講師に迎え、「いじめ問題の難しさと大人として心がけたいこと」と題して、全学に対し講演会を実施した。 12月3日に教職員集会を活用して、いじめ防止に関する研修会を実施した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	学生向けの研修については、一方的な講演ではなく、ワークや問いかけもあり、学生が考えることができる講演会となった。教職員向けのいじめ防止に関する研修会については、グループ分けを行い、グループ学習形式でいじめ事例に対しての検討を行い、非常に好評であった。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度についても、継続して学生向けの講演会、教職員向けの研修会を実施予定である。

(d) 学生支援体制について④

番号	項目	内容
	取組事項	特色ある取り組みの推進と状況把握（各種コンテスト参加推進：SSD）
	P【計画】	Supporting Students Dreams プロジェクトチームを設置し、申請要件等を定めるとともに、募集、採択、実施効果の検証等を

1		実施する。
	D【行った活動】	令和3年5月12日にプロジェクトチームが設置され、教員に対し募集を行った。審議の結果、11件の活動を採択した。採択した活動については、進捗状況調査及び参加学生のアンケートを実施し、活動報告を提出してもらう。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	募集から活動選定まで当初の予定通りに遂行できた。ただし、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、予定していたコンテスト等の中止等から当初の計画を遂行できていない活動もあった。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度についても、継続して募集等を行う予定であり、採択件数が増え、活動が活発化することにより、活力ある学校を推進することができると考えている。

(e) 在校生学生アンケートについて

番号	項目	内容
1	取組事項	在校生（4年生以下）に対するアンケート（学生の多様なニーズの把握）
	P【計画】	令和2年度に実施した満足度調査アンケートでの回答を参考に改善可能な点について検討するとともに、令和3年度も満足度調査アンケートを実施する。
	D【行った活動】	令和2年度のアンケート回答で記載のあったニーズを基に、匿名のweb意見箱の運用、教室の清掃用具の整備等を行うとともに、令和4年2月13日に全学生向けに満足度調査アンケートを実施し、回答を取集中である。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	学生のニーズを学校として把握することができ、得られた意見を基に改善できた事項もあった。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	満足度調査アンケートについては、毎年度実施することを学生委員会で決定した。 令和3年度の意見を基に、令和4年度、改善すべき事項を学生委員会でも共有する予定である。

(f) 卒業生（5年生）学生アンケートについて

番号	項目	内容
1	取組事項	卒業生（5年生）に対するアンケート（達成度、満足度、授業改善要望）
	P【計画】	卒業生（5年生）に対するアンケート（達成度、満足度、授業改善要望）結果を分析し、今後の学校運営に繋げていく。
	D【行った活動】	今回の卒業生アンケートについても、高専機構からの質問に本校の質問を追加させて3月に実施した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	アンケート結果の分析が出来ていないため、令和4年度にアンケート結果を分析し、教務委員会で報告する。
	自己評価	B：計画からやや遅れている
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度以降も引き続き、アンケート結果について教務委員会にて検討していく。

1.2 開発型の教育・研究に重きをおき、社会的・経済的価値あるものを創出していくこと

1.2.1 教育の成果

(a) 専攻科の教育の成果について

番号	項目	内容
1	取組事項	環境創造工学プロジェクトの取組、環境創造工学プロジェクトでの長島町関連取組の継続
	P【計画】	学生が分野を横断して複数のグループを作り、長島町の地域課題を抽出し、ものづくりを通して課題解決を目指す。 本取り組みは単年度で終わらせるのではなく、継続的に実施する。成果を長島町サテライトキャンパスで発表し、発表者と参加者で情報交換を行い、問題点の改善に努め、令和4年度に繋げる。最終的にはパイロットスケール※1)の試作品を作成する。 ※1)パイロットスケール：工場を建てる一歩手前ぐらいの規模の設備をパイロットプラントということが多いが、そのパイロットプラントを使った実験をパイロットスケール実験と呼ぶことがある。
	D【行った活動】	令和2年度までの課題について、計画どおり単年度で終わらせることなく、引き続き実施した。令和4年3月に長島町への調査を予定していたが、新型コロナウイルスの影響もあり、調査を実施することが出来なかった。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	現在、長島町で実施しているこの取り組みについて、今後、長島町以外の市町村で実施ができないか模索する。
	自己評価	B：計画からやや遅れている
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	長島町での環境創造工学プロジェクトの取組は、令和4年度以降に実施検討を行う。
2	取組事項	定員充足率、達成度の把握、満足度の把握、専攻科修了率の把握、学位取得率の把握、プログラム修了率等の把握
	P【計画】	定員充足率、達成度、満足度、専攻科修了率、学位取得率、プログラム修了率等の状況を把握するため、データを整理する。
	D【行った活動】	専攻科委員会で各項目データを整理し状況を把握した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	現在、各項目の状況について把握まで行われている。今後、分析が必要かどうかについて専攻科委員会で検討する。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度も同様に定員充足率、達成度の把握、満足度の把握、専攻科修了率の把握、学位取得率の把握、プログラム修了率等を把握する。必要に応じて分析も行っていく。
3	取組事項	専攻科生の学外研究発表の推進、状況の把握
	P【計画】	教員へ外部資金の獲得を促すと共に、学生の学外発表を推奨する。
	D【行った活動】	外部資金の獲得については、教職員へ周知を行い、必要に応じて、ヒアリング等を行った。 学外研究発表について、全学生が参加したことを確認した。
	C【得られた成果および自己評価】	本校の研究内容（進捗状況、発表状況等）について、学校とし

	の理由】	て把握することができた。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度以降も引き続き、学外研究発表の推進、状況の把握を行っていく。

1.2.2 研究

(a) 教員の研究業績について

番号	項目	内容
1	取組事項	第5ブロックの共通目標達成のための取組
	P【計画】	第5ブロックの共通目標について、学内で共通理解を深めていく。 共通目標：①専門系：査読付き論文2編以上 一般系：論文2編以上・著書1冊以上 ②外部資金：過去3年分の実績額（平均）の110%及び科研費採択率前年度比3%増
	D【行った活動】	第5ブロックの共通目標について、学内で周知を行い、高専機構等の研究力アップに関するイベントについては、積極的な参加を呼びかけた。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	以前に比べ、学内の共通理解が深まってきており、教員の参加者も増加してきている。令和3年度の論文数は32件（延べ数）であった。因みに、イベントへ参加する教員は、比較的研究力の高い教員であり、同じ顔ぶれとなっている。
	自己評価	B：計画からやや遅れている
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	5ブロックの共通目標達成者数をチェックし、目標未達成者については、今後3年間の研究計画書（論文投稿計画書）の提出を求める。また、高専機構主催の研究力強化プログラムへの積極的な参加を継続して呼びかける。
2	取組事項	特例適用教員数の向上
	P【計画】	特例適用教員数の向上については、申請時にヒアリングを行い、書類の記入方法（業績の見せ方など）について指導する。また、筆頭著者、責任著者としての論文執筆を増やすよう指導を行う。
	D【行った活動】	特例適用教員の申請時に、研究主事及び研究主事補でヒアリングを実施し、本人たちの意思を尊重しながら、申請書類の記入方法について、5名にアドバイス・指導を行った。令和5年度入学生から、九州大学との連携教育プログラムにおける連携教員としての参加を積極的に呼びかけた。連携教員となることで、指導実績、研究実績の積み増しが見込まれる。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	特例適用教員数の向上については、申請した5名中、3名が承認された。結果として、特例認定教員率は63.2%となった。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	特例適用教員数の向上については、令和4年度以降も継続的にヒアリングを行っていく。

(b) 科研費と外部資金について

番号	項目	内容
1	取組事項	科研費採択率向上
	P【計画】	科学研究費助成事業の応募及び採択率を向上させるために、プロジェクトチームを設置する。
	D【行った活動】	採択率を向上させるためにプロジェクトチームによる査読を行い、教職員に対して適切な指導・助言等の支援を行った。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	令和4年度科研費への申請件数は、令和3年度科研費と同様に57件であり、採択件数は、4件から9件に増加した。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度以降もプロジェクトチームによる査読を行い、申請書をブラッシュアップし、採択率の向上を行いたい。

1.2.3 社会連携（企業との連携）

(a) 企業との連携について①

番号	項目	内容
1	取組事項	NEC との連携状況の把握
	P【計画】	顔認証システムを図書館及び女子寮へ導入し、実証実験を実施する。
	D【行った活動】	顔認証システムを図書館及び女子寮へ導入し、実証実験を実施した。 新たに生体情報を用いた授業改善の実証実験を実施した。 4年生を対象に、特別インターンシップを実施した。 主に低学年向けにDXプロジェクトを実施した。 教員向けAI教育に係る研修会を実施した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	概ね予定していた計画案件については実施できた。 当初、計画していなかった案件についても、NEC と連携し実施することができた。
	自己評価	S：計画以上に進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度以降も引き続き、NEC との連携を推進していく。

1.3 地域の産業、文化さらには生活を支えていく地域に根差した高専とすること

1.3.1 社会連携

(a) 自治体等との連携について

番号	項目	内容
1	取組事項	教育における自治体との連携
	P【計画】	令和2年度から引き続き、霧島市との連携について、NEC との三者で地域共創の事業計画を検討する。
	D【行った活動】	NEC と本校の2者間で会議（Zoom）を実施し、検討を重ねている。霧島市内の小中学校へのICT教育については霧島市教育委員会と、また地域共創については霧島市情報政策課と打合せを

		行う事が出来た。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	コロナ禍の状況ではあったが、対面やZoomを活用し、連携について検討を重ねることができた。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	霧島市内の小中学校への出前授業を含めた連携の計画は、令和4年度に向けて進めていく。 NECとの三者で地域共創の事業計画については令和4年度も継続して取り組みを行う。
2	取組事項	技術士会との共同教育
	P【計画】	鹿児島県技術士会と本校との共同教育を全学科で実施する。
	D【行った活動】	12月下旬から1月下旬にかけて、鹿児島県技術士会から講師を招き、技術士会との共同教育を実施した。 ○科目名 M科：創造実習、E科：電気電子工学実験V、S科：特別講座、I科：卒業研究、C科：工学セミナー
	C【得られた成果および自己評価の理由】	鹿児島県技術士会との関係も良好で、現在、技術士会との共同教育は10年以上継続されている。今後も引き続き、継続していきたい。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度以降も鹿児島県技術士会との連携を深め、技術士会との共同教育を継続させていく。
3	取組事項	霧島市、日置市との連携
	P【計画】	霧島市教育委員会（志学館大学含む）と連携し、生涯学習講座ニューライフカレッジ霧島「隼人学」を開催する。 日置市の主催で例年開催される「企業の魅力説明会」、「異業種交流懇話会総会」等に参加する。
	D【行った活動】	コロナ禍の状況ではあったが講座を5回開催した。（7月10日、10月9日、11月13日、12月11日、1月8日） 日置市主催で開催される日置市異業種交流懇話会総会（5月7日）、日置市企業の魅力説明会（6月30日）に参加した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	ニューライフカレッジ霧島「隼人学」は高等教育機関と自治体が連携して開催する全国でも例を見ない取組であり、優れた運営と学習成果が地域の活性化に寄与すると評価され、全国市民大学連合から優良市民大学として認定されている。本校の教員も講師として登壇し、鹿児島高専のPRにもつながった。 日置市主催の各事業へ参加し、日置市の学校及び企業関係者等と意見交換を行うことで、日置市の将来ビジョンや日置市地域の企業が抱える課題等について情報収集することができた。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	今後も継続して霧島市、日置市と協力し各事業を行い、地方創生に繋がる活動を行っていく。
	取組事項	委員等による自治体との連携
	P【計画】	各自治体主催の委員会に委員として参加する。
	D【行った活動】	各種外部会議等に委員として参加した。

4		<ul style="list-style-type: none"> ・霧島市ふるさと創生有識者会議 ・鹿児島県工業技術センター研究開発推進会議 ・かごしま産業支援センター新事業進出支援事業審査会 等
	C【得られた成果および自己評価の理由】	各種委員会・会議に参加して、自治体（地域）の活性化を推進する施策・取組に対する助言や、県内企業に対する技術支援等のアドバイスをを行った。本校の学識的な知見を提供するとともに、地方自治体や県内企業が抱える課題解決に向けた取り組み等について理解することができた。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	今後も継続して各外部委員会・会議に参加し、「地域に根差した鹿児島高専」としての活動を継続していく。
5	取組事項	キャリア教育における自治体との連携
	P【計画】	地方創生特別講義として、霧島市と日置市に、2年生に対して特別講義を実施して頂く。
	D【行った活動】	地方創生特別講義として以下のとおり実施した。 ・11月24日 霧島市、日置市（対象：本科2年生）
	C【得られた成果および自己評価の理由】	感染・感染拡大防止を踏まえた形で講演を実施した。地方創生に向けた霧島市・日置市独自の取り組み、OBからのアドバイス等についての講演を聴くことにより、学生からは「地方創生について知ることが出来て、自分は将来どこで働いていくかを考える良い機会になった。」等の意見が寄せられ、学生にとって有意義な特別講演となった。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	Webを活用した実績を活かし、令和4年度以降もそれぞれの場面に柔軟に対応しながら継続して事業を実施する。また、アンケート結果を踏まえて、令和4年度の実施に向けて事業内容等の改善を図る。

(b) 鹿児島高専テクノクラブ (KTC) について

番号	項目	内容
1	取組事項	KTC 企業見学状況等の KTC によるキャリア教育の状況、成果の把握
	P【計画】	KTC 企業による特別講義及び地域企業研究会開催によるキャリア教育として、令和2年に続きコロナ禍の状況で企業見学会が実施出来ない為、1年生及び3年生を対象に KTC 企業による特別講義を行う。また本科4年生及び専攻科1年生を対象に、感染症対策に十分配慮して地域企業研究会を行う。成果についてはともに実施後のアンケートを行う予定である。
	D【行った活動】	KTC 企業による「地域企業特別講義」「地域企業研究会」を以下のとおり実施した。 <ul style="list-style-type: none"> ・地域企業特別講義 11月17日（本科3年生） ・12月8日（本科1年生） ・地域企業研究会 1月18日（本科4年生、専攻科1年生） ともに終了後はアンケートの実施・集計を行った。

	C【得られた成果および自己評価の理由】	地域企業特別講義は、感染症対策に留意してハイブリッド方式で実施した。学生にとって学びのモチベーションを高めるきっかけとなった。また業界の動向・本校のOBの業務内容やアドバイスを聴くことにより、将来のキャリアについて考える機会となった。 地域企業研究会は最大限の感染症対策を講じて対面形式で行うことが出来た。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	コロナ禍の状況を踏まえて柔軟に対応しながら、継続して事業を実施する。また、アンケート結果について分析し、令和4年度の実施に向けて事業内容等の改善を図る。
2	取組事項	共同研究状況の把握
	P【計画】	共同研究については新規の共同研究契約があった際には、令和2年度より継続して、企画係にて一覧を作成し、校務連にて報告する。
	D【行った活動】	共同研究について一覧を作成し、校務連で報告を行っている。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	共同研究の受入れ実績について、毎月の校務連で報告を行うことができた。これにより、外部資金等の現状を確認することができた。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度も継続して、共同研究一覧を作成、校務連にて報告を行う。
3	取組事項	KTC 事業の把握
	P【計画】	KTC 事業に関する年間計画を検討する。事業の実施方法等についてはKTC 三役に相談し、テクノセンタースタッフ会議にて実質的協議を行う。
	D【行った活動】	令和3年5月10日、7月8日にKTC 会長、副会長と会議を行った。事業の実施方法についてテクノセンタースタッフ会議を行い、令和4年2月末時点で27回開催している。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	KTC の各事業については、その都度、会長、副会長及びテクノスタッフで協議し、会長・副会長の意向を汲みながら、コロナ禍の状況に対応して事業を実施することができた。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	Web を活用した実績を活かし、令和4年度以降もコロナ禍の状況を踏まえて柔軟に対応しながら継続して事業を実施する。また、アンケート結果について分析し、令和4年度の実施に向けて事業内容等の改善を図る。

(c) 企業との連携について②

番号	項目	内容
1	取組事項	京セラ株式会社との連携
	P【計画】	鹿児島高専と京セラ株式会社との共同教育を通して、地域に貢献できる実践的な技術者を養成できるプログラムを検討する。
	D【行った活動】	両機関における担当者が決まった。また、令和3年11月に第1回の打ち合わせを本校で実施した。本校での他企業との先行事

		例などを紹介した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	共同教育を進めていくことの提案、先行事例紹介による相互理解、そして共同教育を進めることについて担当者間での合意が確認できた。
	自己評価	B：計画からやや遅れている
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	第2回目の打ち合わせが令和4年3月に計画されていたが実施できていない。今後、授業での連携について具体案を出していく。共同教育に関する協定などの準備を進める。

1.3.2 学生支援

(a) 学生支援体制について⑤

番号	項目	内容
1	取組事項	地域に根差した特色ある取り組みの推進と状況把握（吹奏楽演奏訪問、メカトロ部小学校訪問、錦江スポーツクラブ、Robogals）
	P【計画】	地域に根差した特色ある取り組みの推進を行うため、課外活動の支援を行う。
	D【行った活動】	当初予定していたメカトロニクス研究部の小学校訪問や吹奏楽部演奏訪問、Robogalsについては、新型コロナウイルス感染症の影響により実施することができなかった。 錦江スポーツクラブへの学生への参画についても、新型コロナウイルス感染症の影響で中断する期間が多く、例年に比べ活動実績が少なかった。 サイバーセキュリティボランティアとして、本校学生が離島の小学校で活動を行い、後援会と調整し、支援を行った。 学生主事を中心として、近隣自治体である真孝地区の会長と意見交換を行い、学生会を中心として水やり等地域貢献の実施を検討した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	新型コロナウイルス感染症の影響で、活動自体が縮小しているため、当初の計画から遅れが生じている。 ただし、学生主事を中心に学生会を活用した近隣自治体への地域貢献の検討、意見交換等、令和4年度につながる成果が得られた。
	自己評価	B：計画からやや遅れている
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	今後も学生主事を中心として、学生を活用した地域貢献について検討していくとともに、新型コロナウイルス感染症の影響で複数年実施できていない活動に対し、支援を行っていきたい。

2. ミッション以外の取り組み

(a) 教育理念、ミッション、学習教育目標等の改定・整理

番号	項目	内容
1	P【計画】	教育理念、ミッション、学習教育目標等の改定整理について検討を行い、関係部署で議論をしてもらうように依頼する。
	D【行った活動】	教育理念の改定について、総務企画委員会で議論を行い、改定した。ミッション、学習教育目標等については、令和3年度の改定・整理の必要性はないと判断した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	従来、1 目的、2 教育理念、3 教育理念を達成するための3つの目標、4 ミッションと複数あったものを、1 目的、2 教育理念、3 ミッションの形に整理できた。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和3年度に実施しているので、令和4年度以降当面は見直しの検討の予定はない。

(b) 各学科のPDCA実施

番号	項目	内容
1	P【計画】	自己点検・評価の在り方を見直し、各科、学科についてもPDCAを実施することで、学科での目標の共有化、協働を促進し、教育での発展的な活動を行う。
	D【行った活動】	各科、学科のPDCAを作成し、総務企画委員会にて報告された。Planについて、各科、学科で取り組む。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	自己点検・評価委員会にて、各科、各学科もPDCAの実施状況を点検・評価し、報告を行った。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度以降も各学科のPDCAを実施する。

(c) 自己点検・評価報告書をミッションベースで再編

番号	項目	内容
1	P【計画】	自己点検・評価報告書を本校のミッションベースの項目で再編し、ミッションに即した活動を明確化する。
	D【行った活動】	総務企画委員会にて、本校のミッションベースの項目に再編した自己点検・評価報告書を作成した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	自己点検・評価委員会（総務企画委員会）にて、本校のミッションベースの自己点検・評価項目になっていることを確認した。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	本項目は、令和3年度に実施し、本目標は達成された。令和4年度以降についても、引き続き、自己点検・評価報告書の改善を行っていく。

3. 管理運営

3.1 管理運営

(a) 教育組織について

番号	項目	内容
1	取組事項	女性教員の増加のための取組、体制、組織、女性教員比率の把握
	P【計画】	女性教員比率（令和3年5月1日現在） 機構全体：11.8% 本 校：4.28% 機構全体の比率を目標値とし、引き続き教員の公募文にポジティブアクションを記載し、女性教員の増加を目指す。
	D【行った活動】	令和3年度に行った教員公募において、公募文にポジティブアクション※2)を記載して公募した。 ※2) ポジティブアクション：積極的格差是正措置。男女間の差別を解消して、働く意欲と能力のある女性が活躍できるように、企業が自主的に行う取り組みのこと。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	令和3年度の11件の教員公募において、計29名の応募者中、女性応募者は3名であり、1名採用に至った。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	今後も引き続きポジティブアクションを記載し、女性教員の増加を目指す。
2	取組事項	女子学生の増加のための取組、女子学生の比率等の把握
	P【計画】	<ul style="list-style-type: none"> ・ 志願倍率（女子生徒）の増加に向けた取組を行う。 ・ 女子更衣室の整備を進める。 ・ Robogals 鹿児島市の学生による小中学生対象のワークショップを行い、理工系を目指す女子を増やす取組を行う。 ・ 令和2年度末に女子寮生への防犯体制の向上と、点呼作業の効率化を目的として、女子寮における入館管理のための顔認証実証実験を行った。また、顔認証による点呼については、数日間行ったのみであり、具体的なデータがあまり得られなかったため、令和3年度は顔認証による点呼の本格的な実証実験を行う。
	D【行った活動】	<p>学校説明会や中学生向けパンフレットでは、女子学生が活躍している話題を多く取り入れて説明を行った。</p> <p>令和3年4月から設置された女子更衣室の運用について、ロッカー配置等を決定するとともに、時計、立ち鏡等の必要物品を整備した。また、女子学生向けの施設等に関する満足度調査アンケートを実施し、女子学生が不満に感じている点の把握を行った。</p> <p>新型コロナウイルスの影響により、ワークショップの実施は困難であった。しかし、南日本小学生プログラミング大会でデモンストレーションを行うことは出来た。（12月末）</p> <p>顔認証による点呼の実証実験を数回行い、認証精度について検</p>

		証した。さらに、マスクや眼鏡の有無、おでこを見せる見せない、髪を後ろで束ねるか、束ねないかによって認証精度に影響を及ぼすか検討した。また、顔認証による点呼の使い勝手についてアンケートを実施した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	令和2年度と同等の女子学生の志願倍率を確保することができ、合格者は約1.5倍増の49名となった。 女子更衣室の設備については、徐々に設備が整ってきている状況であり、当初の計画は概ね達成できた。今後は、アンケートの女子学生の意見を考慮し、さらなる改善につなげていきたい。2017年発足時からの継続的な取り組みにより、推薦入試での女子中学生の受験者数が増加した。 顔認証による点呼の実証実験の結果をNECと情報共有し、不具合の解消を重ね、認証精度の向上を図ることができた。また、運用上の問題点も把握することができた。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度以降も引き続き、入試広報活動を推進していく。 アンケート結果を考慮し、ソフト、ハード両面から継続して女子更衣室の整備を進める。 引き続き、女子小中学生を対象としたワークショップを実施する。また、コロナ禍でも実施可能なワークショップの内容を模索する。特に、離島や僻地などの受験者数が少ない地域の訪問を検討する。 顔認証による点呼を実施するにあたり全員の顔画像の登録が必要であるが、登録に協力頂けない学生が数名いる状況である。また、今後のNECとの連携が不透明であることも不安材料である。

(b) FD研修、表彰、SD等について

番号	項目	内容
1	取組事項	教員相互の授業参観の改善
	P【計画】	教員の授業力向上を目的として、公開授業を令和3年度前期に実施する。
	D【行った活動】	令和3年6月14日（月）～7月9日（金） 4週間の期間で公開授業を実施した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	公開授業（1回以上）の参加率89.7%で令和2年度の81.8%より向上した。 実施担当者より、各教員に「公開授業アンケート」によるフィードバックを行った。また、公開授業参観者は、授業実施者に対して、「公開授業メモ」を渡した。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度は、公開授業を前期、後期と実施し、教員が公開授業へ参加しやすい実施体制での実施を行う。
	取組事項	教育力の質の向上のための研修等
	P【計画】	授業力アップアクティビティの一環として、遠隔授業スキルの向上を図る。

2	D【行った活動】	Moodle を利用した小テスト作成の講座を令和3年9月に実施した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	参加できなかった教員に対しては、動画を作成し、配信した。Moodle の小テストを活用している教員は、年度当初より増加した。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度以降も引き続き、授業力アップアクティビティを推進していく。
3	取組事項	遠隔授業の質の向上のための研修等
	P【計画】	遠隔授業のガイドラインを作成する。
	D【行った活動】	総務企画委員会で遠隔授業のガイドラインを作成し、令和3年7月20日、教職員に向けてガイドラインを周知した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	総務企画委員会で遠隔授業のガイドラインを作成し、令和3年7月20日、教職員に向けてガイドラインを周知した。
	自己評価	A：計画通りに進行している
A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	遠隔授業のガイドラインに沿って、遠隔授業が実施されているか確認を行う。	
4	取組事項	学生の評価による授業評価の把握
	P【計画】	授業アンケートを実施し、今後の授業改善へ繋げる。
	D【行った活動】	授業アンケートを実施し、教務委員会で報告・分析し、今後の授業改善へ繋げている。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	学校指定のアンケート以外でも同様の手法を用いて、各教員が独自に授業に関するアンケートを実施し、改善に結び付ける動きがみられた。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度以降も引き続き、授業改善に向けた取り組みを行っていく。
5	取組事項	FD フォーラム・FD レクチャーシリーズの開催
	P【計画】	鹿児島高専FD フォーラム、鹿児島高専FD レクチャーシリーズを実施し、教育能力の向上および知識の共有を図る。
	D【行った活動】	<p>【鹿児島高専FD フォーラム】</p> <p>(1) 校長裁量経費を頂いた先生方の研究の取り組みの紹介と質疑応答 6/9</p> <p>(2) Well-being を志向するエンジニア教育について 7/7</p> <p>(3) 宇部高専の取り組み（ベトナム高専支援プロジェクトなど）や本部の国際協力の活動について 9/1</p> <p>(4) 有明高専における混合学級の導入 9/10</p> <p>(5) 令和2年度新任教員スタートアップ経費（校長裁量経費）に係る研究報告会 10/13</p> <p>(6) いじめに関する研修会 12/8</p> <p>(7) AI・データサイエンスに関する講演 1/12</p> <p>(8) ジェンダーに関する講演 3/9</p> <p>【鹿児島高専FD レクチャーシリーズ】</p> <p>(1) 若手セミナー 仕事カブラッシュアップ 5/7</p>

		(2) オンライン英会話講座 9/1~10/31 (3) COMPASS 5.0 事業紹介と教育プログラム AI・数理データサイエンス分野 12/1 (4) Well-beingに関する勉強会 12/13 (5) ニューフェースセミナー 1/14 (6) 令和4年度担任研修 3/30 (7) オンライン英会話講座 3/1~3/31 (8) Discussion&Debate 3/14
	C【得られた成果および自己評価の理由】	鹿児島高専FDフォーラム、鹿児島高専FDレクチャーシリーズともに充実した内容での実施がなされている。
	自己評価	S：計画以上に進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度についても充実した鹿児島高専FDフォーラム、鹿児島高専FDレクチャーシリーズを計画して実施する。
6	取組事項	新任教職研修（SD関連）
	P【計画】	新任教職員研修を実施し、職務遂行に必要な基礎知識等を理解し、資質の向上を図る。
	D【行った活動】	校長、教務主事、総務企画主事、学生主事、寮務主事、研究主事・専攻科長、国際交流センター長、地域共同テクノセンター長が、各所管する内容について、5回にわたって研修を実施する。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	計5回、210分の研修を実施した。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度についても同様に実施する。
7	取組事項	ハラスメント防止（SD関連）
	P【計画】	改正労働施策総合推進法（パワハラ防止法）の施行にあわせて、パワーハラスメントの防止、共通理解を目的に実施する。
	D【行った活動】	日時：令和3年10月11日（月）～令和3年11月26日（金） 内容：ハラスメントに関する動画研修
	C【得られた成果および自己評価の理由】	パワーハラスメントを含むハラスメントの防止対策をさらに促進するため、ハラスメントに対する関心と理解を深めることを目的として実施した。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	今後も総務企画委員会の専門委員会において、必要なSDを実施する。

(c) 自己点検・評価

番号	項目	内容
1	取組事項	教員による自己点検票の改定
	P【計画】	教員による自己点検票を改定して、幅広い活動で自己点検が行えるようにする。
	D【行った活動】	総務企画委員会にて、各科、各学科の意見を聴取しながら作成を進めている。
	C【得られた成果および自己評価】	総務企画委員会での取りまとめが遅れており、取りまとめ後に

	の理由】	校長へ、答申する予定としている。
	自己評価	B：計画からやや遅れている
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度以降も検討を続ける。
2	取組事項	各規定の制定
	P【計画】	評価機関から求められている各種アンケートについて、実施間隔等が定められていないものがあり、それらについて実施期間定める。
	D【行った活動】	在校生満足度アンケートは、学生委員会・学生係で「毎年」実施することとした。 卒業生アンケートは、教務委員会で「毎年」実施することとした。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	各種アンケートについて実施部署の確認、実施間隔等を決定した。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	定められた実施間隔で実施されているかについて、自己評価点検委員会でチェックする。
3	取組事項	PDCA に基づいた評価の必要性（PDCA サイクルの再構築）
	P【計画】	自己点検・評価報告書を PDCA の項目で記載して、PDCA サイクルの実施を確認する。特に、自己点検・評価委委員会の機能を強化し、各部署の責任者によるブリーフィングを行い、PDCA サイクルの実施状況を確認、共有する。
	D【行った活動】	科、学科も含めて各部署において PDCA を実施し、自己点検・評価委員会にて PDCA サイクルの実施状況を確認した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	各部署からの自己点検・評価報告書の内容で PDCA サイクルの実施状況を確認し、自己点検・評価委員会において実施状況の認識の共有を図った。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度以降も PDCA サイクルの実施、確認を行う。
4	取組事項	企業に対する満足度調査の実施と調査結果の検証について
	P【計画】	企業アンケートは不定期での実施であったが、実施間隔を定め、令和4年度を初年度として実施をする。
	D【行った活動】	企業アンケートは、総務企画委員会・キャリア支援室・学生係・企画係にて「3年ごと」に実施することとした。 また、令和4年度から実施することとした。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	企業アンケートについて実施間隔を決定した。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度に計画に基づいて企業アンケートを実施する。
	取組事項	魅力ある鹿児島高専への取り組み：混合クラス、PBL、共通実験
	P【計画】	令和4年度からの混合クラス実施に向けて、クラス編成の在り方、共通科目について実施の在り方を定める。

5	D【行った活動】	混合クラスのクラス編成は、教務主事、総務企画主事、教務係で編成した。 PBL（創作活動）については、担当者間で実施に向けて検討を進めた。 共通実験（工学基礎実習）については、機械工学科が初年度の担当として、担当者間で実施に向けて検討を進めた。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	混合クラスのクラス編成については、編成方法を定めた。 PBL（創作活動）については、担当者間の打ち合わせを実施し、実施方法について検討を進めた。 共通実験（工学基礎実習）については、機械工学科を中心に担当者間で実施方法について検討を進めた。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度末に、実施状況を確認する。

4. 各外部評価の指摘事項の改善点

4.1 指摘事項

(a) ミッションに対する評価項目の成熟化

番号	項目	内容
1	P【計画】	ミッションに対する評価項目を整理する。
	D【行った活動】	自己点検・評価報告書（簡易版）、自己点検・評価報告書（詳細版）を改善し、特に詳細版ではミッションと関連する評価項目を明確化する。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	再編された自己点検・評価報告書（詳細版）によりミッションに対する評価項目が整理されている。新たな自己点検・評価報告書（簡易版）で、各部署の重点的取り組みが明確化されている。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度以降も改善を図る。

(b) 数値目標の評価と具体化

番号	項目	内容
1	P【計画】	数値化できる評価項目については数値化を実施する。
	D【行った活動】	目標として数値化できる内容は数値化を行う。また結果報告については可能な限り数値を入れて評価をする。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	詳細版において評価を行った60項目のうち、数値目標は1項目のみであった。項目によっては、数値目標を立てづらい内容も多い。
	自己評価	C：計画から遅れている
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度は、可能な範囲で数値目標を掲げることを推進する。

(c) 教員間の議論を深める

番号	項目	内容
1	P【計画】	教員間の議論を委員会等を通じて深める。
	D【行った活動】	定期的に委員会を開催し、委員会の所管事案について対応すると共に、教員間の議論を通じて共通認識を図る。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	3月15日現在 教務委員会 25回開催 総務企画委員会 19回開催 学生委員会 21回開催 寮務委員会 20回開催 専攻科委員会 15回開催 等 主要な委員会については定期的に開催し、議論を行った。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度以降についても同様に議論を深めていく。

(d) 自己評価委員会の責任体制の構築と議論、フィードバックの必要性

番号	項目	内容
1	P【計画】	自己点検・評価委員会の責任体制の構築及びフィードバックを行う。
	D【行った活動】	校長を委員長とし、自己点検・評価委員会の体制強化を実施する。 自己点検・評価委員会において、各責任者からブリーフィングを実施し、フィードバックを行うとともに、責任の明確化を行う。 自己点検・評価委員長が自己点検の総括を行う。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	校長を委員長とし、自己点検・評価委員会の体制強化を行った。 自己点検・評価委員会において、各委員から所管している事項についてのブリーフィングを行い、フィードバックおよび責任の明確化を実施した。 委員長による自己点検の総括を行った。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	自己点検・評価委員会の責任体制の妥当性確認および自己点検の結果について、各部署、各委員会にてフィードバックを行っていく。

(e) 自己評価書の詳細版のわかりやすい工夫（構成、文言等）

番号	項目	内容
	P【計画】	自己点検・評価報告書の詳細版の構成について、本校のミッションベースにて評価項目を整理する。 また、外部の方が分かりやすい文章表現になるように文言等を工夫する。

1	D【行った活動】	自己点検・評価報告書の詳細版について、本校のミッション、目標ベースにて評価項目を整理し、また、評価項目が重複しないように工夫した。 文章表現についても外部の方でも分かりやすいように留意して作成した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	自己点検・評価委員会にて、自己点検・評価報告書内容について、項目が整理されていること、文章表現が分かりやすいかについて確認した。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度以降も自己点検・評価報告書の改善を行う。

(f) Sは100パーセントか、Sの意味づけをしっかりとつける

番号	項目	内容
1	P【計画】	自己点検・評価報告書の評語の意味について数値化する。
	D【行った活動】	評語（S、A、B、C）について数値化し、意味づけを行った。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	数値化された評語に基づいて自己点検が行われている。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	評語と数値の整合性があるかについて各責任者から意見をもらい、必要に応じて検討する。

第2部

令和3年度分 外部評価報告書

令和4年度外部評価委員会委員名簿

外部評価委員

役職名	氏 名
第1号委員 鹿児島大学 工学部長	きのした えいじ 木 下 英 二
第2号委員 霧島市教育委員会 教育委員	かわ の よしひろ 河 野 良 弘
第2号委員 始良市立蒲生中学校 校長	にし ゆかり 西 ゆかり
第3号委員 鹿児島県工業技術センター所長	くぼ あつし 久 保 敦
第4号委員 (株)九州タブチ 代表取締役社長 鹿児島高専テクノクラブ会長	つるがの み お 鶴ヶ野 未 央
第5号委員 南九州ケーブルテレビネット(株) 代表取締役社長	やまぐち とし き 山 口 俊 樹
第6号委員 霧島市長	なかしげ しんいち 中 重 真 一
第6号委員 (株)相良製作所 代表取締役社長 鹿児島高専同窓会長	さがら まさよし 相 良 正 典

鹿児島工業高等専門学校外部評価委員会規則（一部抜粋）

（組織）

第3条 委員会は、人格識見が高く、かつ、本校の発展に理解ある次の各号に掲げる学外者の中から、校長が委嘱した若干名の委員をもって組織する。

- (1) 大学、高等専門学校等の高等教育機関の教員及び経験者等
- (2) 本校の所在する地域の教育関係者
- (3) 地方自治体等研究機関の研究者等
- (4) 産業界の有識者
- (5) 報道機関の有識者
- (6) その他校長が必要と認める者

令和4年度外部評価委員会 鹿児島高専出席者名簿

会場参加者

	役職名	氏名
1	校長	氷室昭三
2	副校長(教務主事)	松田信彦
3	副校長(総務企画主事)	岸田一也
4	校長補佐(学生主事)	北園裕一
5	校長補佐(寮務主事)	室屋光宏
6	校長補佐(研究主事・専攻科長)	新田敦司
7	校長補佐(国際交流センター長)	徳永仁夫
8	校長補佐(地域共同テクノセンター長)	武田和大
9	総務企画主事補	今村成明
10	事務部長	深見清治
11	総務課長	平野秀二
12	学生課長	浦口健一
13	総務課長補佐	中村浩太郎

オンライン参加者

	役職名	氏名
1	学科長(機械工学科)	田畑隆英
2	学科長(電気電子工学科)	井手輝二
3	学科長(電子制御工学科)	島名賢児
4	学科長(情報工学科)	玉利陽三
5	学科長(都市環境デザイン工学科)	山田真義
6	学科長(一般教育科)	篠原学

令和4年度鹿児島工業高等専門学校外部評価実施要領

1. 趣旨

鹿児島工業高等専門学校の自己点検・評価について、外部の有識者により本校の教育・研究活動等の評価、助言を受ける。

2. 評価方法

外部評価は、鹿児島工業高等専門学校の自己点検・評価報告書等に基づき、教育・研究活動等について行う。

委員会終了後、各委員に外部評価結果について、報告書の提出を依頼する。

3. 外部評価委員

- | | |
|------------|--------------------------------|
| (1) 木下 英二 | 鹿児島大学 工学部長 |
| (2) 河野 良弘 | 霧島市教育委員会 教育委員 |
| (3) 西 ゆかり | 始良市立蒲生中学校 校長 |
| (4) 久保 敦 | 鹿児島県工業技術センター所長 |
| (5) 鶴ヶ野 未央 | 鹿児島高専テクノクラブ会長 (株)九州タブチ 代表取締役社長 |
| (6) 山口 俊樹 | 南九州ケーブルテレビネット(株) 代表取締役社長 |
| (7) 中重 真一 | 霧島市長 |
| (8) 相良 正典 | 鹿児島高専同窓会長 (株)相良製作所 代表取締役社長 |

4. 外部評価日時

令和4年6月21日(火) 14:00~16:45

鹿児島工業高等専門学校 大会議室(管理棟2階)

5. 事前配付資料

- (1) 令和3年度 自己点検・評価報告書
- (2) 令和3年度 学校要覧

6. 次第

- (1) 開会
- (2) 校長挨拶
- (3) 委員及び本校出席者の紹介
- (4) 委員長選出
- (5) 自己点検・評価報告書の説明
- (6) 質疑応答
- (7) 外部評価委員打合せ
- (8) 講評及び閉会

鹿児島工業高等専門学校外部評価委員会規則

(設置)

第1条 鹿児島工業高等専門学校（以下「本校」という。）に外部評価委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(目的)

第2条 委員会は、本校が行った自己点検・評価結果等について検証を行い、本校の教育・研究等の改善に資することを目的とする。

(組織)

第3条 委員会は、人格識見が高く、かつ、本校の発展に理解ある次の各号に掲げる学外者の中から、校長が委嘱した若干名の委員をもって組織する。

- (1) 大学、高等専門学校等の高等教育機関の教員及び経験者等
- (2) 本校の所在する地域の教育関係者
- (3) 地方自治体等研究機関の研究者等
- (4) 産業界の有識者
- (5) 報道機関の有識者
- (6) その他校長が必要と認める者

(委員の委嘱)

第4条 委員の委嘱は、外部評価委員会の開催に合わせて、必要な期間行うものとする。

(委員長)

第5条 委員会に委員長を置き、委員の互選により選出する。

2 委員長は委員会を召集し、その議長となる。

(報告書と公開)

第6条 外部評価を行ったときは、報告書を作成し、公開するものとする。

(運営)

第7条 委員会の運営については自己点検・評価委員会が行う。

附 則

- 1 この規則は、平成16年5月21日から施行する。
- 2 この規則施行後、最初に第3条に規定する委員となる者の任期は、第5条の規定にかかわらず、平成18年3月31日までとする。
- 3 鹿児島工業高等専門学校と有識者との懇談会要項は、廃止する。

附 則

この規則は、平成22年4月1日から施行する。

外部評価委員会議事録（一部要約）

開会～校長挨拶

<氷室校長>

本日はお忙しい中、外部評価委員会にご出席賜わりまして誠にありがとうございます。最初に本校の状況等について、少しでも説明したいと思います。

まず新型コロナウイルス感染関係ですが、鹿児島県の感染者数数の推移を図1に示すように5月中旬から段々と減少傾向にあります。本校の昨年4月からの感染者数の推移を図2に示しますが、2月に急に増加しました。これは、学年末試験後の気のゆるみのためか、学生がたくさん感染してしまいました。次は5月の連休明けに増加してしまいましたが、全国的に行動制限がなかったためと思われる。

基本的にはコロナウイルス感染症の影響下にあっても、本校では学生に寄り添い、学生が安心し、また十分納得した形で学修できるような対応を講じると同時に、十分な感染対策を講じた上での面接授業の実施など学修者本位の教育活動の実施と、新型コロナウイルス感染症の拡大防止に向けた取組の両立を図っています。



図1 鹿児島県の新型コロナウイルス感染者の推移

<https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/data/pref/kagoshima.html>

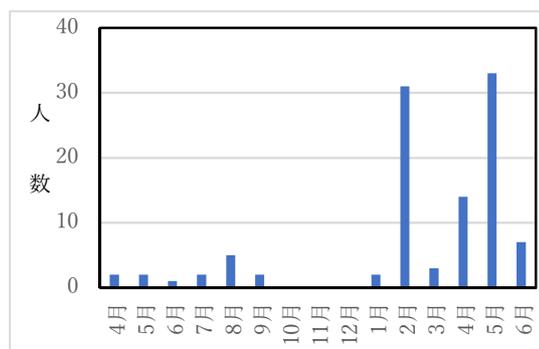


図2 鹿児島高専の新型コロナウイルス感染者数の推移（R3年度から）

新しい委員の方もおられるので、高専のことについて話しをしておきたいと思います。高専というのは、深く専門の学芸を教授し、職業に必要な能力を育成するという目的の下に誕生した学校です。

全国には、現在高専は57校ありますが、国立は51校、公立が3校、私立が3校です。

卒業すると、卒業生には準学士の称号が与えられます。卒業後、就職する者60%、専攻科へ行く者16%、あるいは大学に編入学する者32%となっています。ちなみに、専攻科から66%が就職し、34%が大学院へ進学しています。

今、15才人口が段々減ってきて、高専も入学者が少なくなっていくのではないかと思います。意外と人気が高く、四国の徳島に「神山まると高専」が2023年4月に開校予定です。それから滋賀県に高専がなかったのですが、2027年に県立高専ができることになっており、高専の拡充がはじまったといえるでしょう。

鹿児島高専の沿革ですが、昭和38年に二

期校として、機械工学科 2 学級と電気工学科 1 学級の 3 学級で開校しました。昭和 42 年に土木工学科を増設し、さらに 61 年には情報工学科を増設しました。そして平成 3 年になって、機械工学科の 2 学級のうち 1 学級を電子制御工学科に改組し、平成 12 年に専攻科を設置しました。その後、平成 15 年に電気工学科を電気電子工学科に改称し、平成 16 年には独立行政法人になりました。

さらに平成 22 年に土木工学科を都市環境デザイン工学科に改称し、平成 27 年には土木工学専攻を建設工学専攻に改称しました。

次に入学者数の推移ですが、減少傾向だったところ、昨年度少しこれを盛り返しました。それから卒業生について、平成 16 年に独立行政法人になり、それ以降は就職者数と進学者数の割合は、ほぼ定常的な状態になっています。就職の 5 割弱が製造業に就いているという特徴があるかと思えます。

今後の高専について、去年 5 月に自由民主党文部科学部会高等専門学校小委員会から「令和 4 年度予算における高専の機能の更なる高度化に向けた決議」が出され、高専の高度化を一層加速するため、五つのことが書いてあります。

一つ目は、「多数の技術やノウハウを活かして積極的に貢献するため、ソフト・ハード両面の教育の高度化を一層進め、AI・IT 技術を駆使して、DX を実現し、様々な社会課題を解決できる人材を育成すること」と、このようなことが書いてあります。

高専生の優れた発想力、創造力を形にするためのアントレプレイナー教育の充実などを進め、活力ある社会の実現に貢献する。

二つ目としては、「SDGs の理念を踏まえ、

カーボンニュートラル、再生可能エネルギー、サイバーセキュリティなどの *Society 5.0* の時代に必要とされる分野の教育・研究を積極的に推進する」。それから、小中学校への *STEAM* 教育のことも書かれております。

三つ目は「国際化」です。外なる国際化と内なる国際化を一層進めていくといったところが書かれてあります。

四つ目は、老朽化したところが一様に目立つようになってきたので、これを少し整備していく予算を、きちんと確保するといったところが書いてあります。

五つ目は、商船、帆船に関する船のことが書いてあります。

また、岸田首相になって教育未来創造会議を閣議決定で設置しておりまして、今ようやく第一次の策定がなされたところでございます。この 5 月に出ておりますが、「我が国の未来をけん引する大学等と社会の在り方について」ということで、まとめられた中には、高専は、「産業界ニーズを踏まえた機能強化」、これがまた新たなキーワードでございまして。デジタル等の成長分野の定員増など、産業界の地域のニーズを踏まえた高専や専攻科の機能強化を図る「高度化」と「機能強化」という言葉が今、非常に言われているところでございまして。

それから、今年の 1 月 3 日の読売新聞オンラインを見ると、政府は半導体の国内生産能力を高めるために、九州 8 高専において、半導体の製造や開発に関する教育課程を新たに盛り込むなどして、専門人材育成に取り組むという報道がありました。ここに九州 8 高専と書いてありますが、沖縄を含めて 9 高専で取り組むことになっておりまして、川上から川下までと書いてありま

すが、材料から応用まで、全ての分野、高専でそのような技術者を育てていこうということでございます。色々な九州地域の産業界など、大学、高専含めた中で、そのような半導体人材育成をやっていくということでございます。基本的には、熊本高専と佐世保高専がリードしてやっていく予定になっております。

さて、令和4年度の予算でございますが、運営費交付金625億円と言われました。この金額というのは、東京大学ほどは多くはないのですが、京都大学よりは、たくさんいただいているという状況であります。言われているのは、「高専教育の高度化」、「国際化の推進」、「設備の整備」でございます。

我々は、学生が「教えられる」から「自ら学ぶ」教育への転換を図り、学生一人ひとりが自らの意思で将来のキャリアを描き、ありたい姿になるために挑戦・成長できる環境と機会を創出しなければならないと思っております

そのために、本校では、*Well-being*を志向する高専教育を展開したいということで、昨年度から取り組んでおります。学生が何をなすべきかを考え、実行するポジティブエデュケーションを導入していきたいということでもあります。学生自身の *Well-being* を実現・向上するとともに、社会の *Well-being* 実現・向上に貢献するシステムをつくり上げていきたいということです。

「よく生きる」、「よく勉強する」といったところに視点をおいて、教育を展開しようということです。よく、成功するとそこに幸せがあるのではないかと考えて生きてきましたが、なかなかそういう幸せは感じたことがあまりないので。

むしろ今が幸せ・充実感にあふれてやっているからこそ、そこに成功が生まれてくると考えた方が良くはないかと思いません。このような考えを展開できたらいいかなと思っているところです。こういったことを基に、鹿児島高専がNECやKTCの皆様と一緒に地域のデジタル化といいますか、国はデジタル田園都市国家構想と言っていますが、そういったものが実現できないかなと思っております。

サイバーセキュリティーやクラウドネットワーク、生体認証、ハイウェア、こういったことに関する取り組みなど、これらはすでにやっていますが、県警とサイバーボランティアの活動もやっております。先ほど出てきた半導体人材育成、こういった取り組みをやることで、この地域をスマートシティ化し、防災レジリエンスの確保やスマートヘルスケア、こういったものを目指して *Well-being* な地域を実現し、この地域を持続可能都市として、発展させていければいいと思っております。

STEAM 教育については教育委員会との連携した取り組みで、小学校、中学校へ *STEAM* 教育を展開していきたいと思っております。

Google は、「世界で最も幸せで、生産性の高い職場をつくる」と言っています。我々は、「世界で最も幸せで、学生が自ら学び大きく成長できる場をつくること」、このような高専にしていきたいと思えます。

本日はどうぞよろしくお願いいたします。

自己点検・評価報告書の説明

<今村総務企画主事補>

それでは、「令和3年度自己点検・評価報告書」について説明させていただきます。まず、「概要」についてです。本校では国立高等専門学校機構の第4期中期計画をベースに、年度計画および具体的なPlanを策定し、それを実現すべく、Do、Check、Actionを行っております。また、その活動状況について、年度ごとに自己点検・評価委員会及び外部評価委員会を開催し、自己点検・評価を行っております。

令和3年度は、新たに総務企画委員会を設置し、自己点検・評価および外部評価を担当することとし、自己点検・評価委員会の実施方法や自己点検評価委員会及び外部評価委員会の実施時期の見直し等、効果的な自己点検の在り方を検討し実施しました。

また、「自己点検・評価報告書」については、「簡易版」を新たに各部署からの主報告事項の取り纏めとして作成し、「詳細版」については、「分類」を導入し、ミッションと各評価項目の関連が分かる形に再編いたしました。

本校の自己点検・評価体制について説明いたします。教務委員会、総務企画委員会、各部署においてPDCAサイクルを回し、その結果について、総務企画委員会の方で取りまとめを行います。そして、3月に校長を委員長とした自己点検評価委員会にて、点検・評価を行います。それをもとに本日の外部評価委員会にて評価を行う体制となっております。

「直近の自己点検・評価の課題と対応」について説明します。令和元年度に機関別認証評価、監事監査、外部評価を受審しま

して、主な指摘事項に対しまして、全て改善するよう継続して取り組みを行っております。

「機関別認証評価」の指摘事項に関しては、以下のようになっております。「自己点検・評価、研究活動、地域貢献活動に関する規定の必要性」の指摘につきましては、規定を策定しました。

「成績資料の保管状況、成績評価方法の妥当性の検証」の指摘に関しましては、教務委員会の方で調査を行っております。

「満足度等を把握するアンケートの必要性」の指摘については、教務委員会、学生委員会で対応し、卒業生アンケート、学生満足度アンケートを毎年実施しております。

「監事監査」における指摘事項に関しては、以下のようになっております。「キャリア教育および進路指導における学校全体としての取り組みの必要性」の指摘に関しましては、キャリア支援室を設置しております。「相互授業参観の改善の必要性」の指摘に関しましては、総務企画委員会に対応し、公開授業を実施しております。

「退学率、留年率の改善」の指摘に関しましては、教務委員会、総務企画委員会に対応し、成績会議等で検討しており、また各学科、科においてPDCAを実施し、対応しております。

「外部評価委員会」の指摘事項に関しましては、以下のようにやっております。

「PDCAに基づいた評価の必要性」の指摘に関しましては、自己点検・評価委員会の規則の改正を行いました。また、総務企画委員会を設置しております。「イノベーション人材育成への取り組みについて」の

指摘に関しましては、1年生混合クラスを導入し、新カリキュラムを編成しております。新カリキュラムにおきましては、PBLとしまして、創作活動、学科横断的な実習といたしまして、工学基礎実習を導入しております。

「企業に対する満足度調査の実施と調査結果の検証」についての指摘に関しましては、総務企画委員会で対応し、学生係、企画係で3年ごとに実施すると決定しております。今年度を初年度としております。

これらの取り組みに関しまして、「令和3年度の自己点検・評価報告書」ですが、「詳細版」と「簡易版」を作成しております。

「詳細版」は、本校のミッションをベースとした自己点検・評価を記載しております。先ほどの過年度の各評価機関からの指摘されている評価基準を主として構成されておきまして、本年度はドキュメント形式の報告書を作成しました。

「簡易版」につきましては、各部署ごとの自己点検・評価を記載しており、各部署の主要な取り組みのPDCAによる構成となっております。自己点検・評価委員会での報資資料として用いまして、自己点検・評価を行いました。教務主事の所管する教務委員会をはじめとして、19の部署の自己点検・評価を実施し、最後に委員長である校長からの総括を行っております。各部署の取り組みと責任が見えるような形になっております。

「自己点検・評価報告書」の「詳細版と簡易版の関連」は、次のようになっております。詳細版につきましては、先ほど説明しましたように、ミッションベースの項目

になっております。この各項目につきまして、各部署が複数関係しており、各部署の取り組みが見えにくくなっております。それに対しまして「簡易版」は、各部署の主要な取り組みが分かるように構成されております。各部署の所管する事項、主なもの3つに対しましてPDCAを記載し、それぞれの項目に対して、自己評価を行っております。最後に、これらの報告に対しまして、校長による「自己点検・評価の総括」となっております。こちらは、私から説明するよりも氷室校長から説明していただきたいと思っております。よろしく申し上げます。

<氷室校長>

自己点検・評価の総括についてということですが、本校の課題として、そこにありますように、「*Society 5.0* 実現に向けた方策」、「国際的魅力ある鹿児島高専の実現」、「社会的な問題解決に対し、新たな価値を創出できるようにすること」、「地方創生への貢献」、「変化に柔軟に対応できる組織の実現」、こういったことがあげられると思っております。そのような中で中期的な課題（「多様かつ優れた教員の確保」、「教育の質向上と改善」、「学生支援、生活支援」、「国際性の涵養」、「地域貢献」、「財政問題への対応」など）、それから「短期的な課題」（「コロナ禍への対応」、「教育課程の再編」、「科研費や外部資金の獲得」、「情報の発信」、「留年、退学への対策」、「教員評価の透明性」、「情報セキュリティ対策の強化」、「研究活動の活性化」など）をあげております。

令和元年度にたくさんの外部からのご指摘がございました。これら課題を含めた上で令和2年度には、大概のことは解決でき

たように私は思っております、令和3年度には、さらにそれを進めた形で鹿児島高専を魅力的なものにするために取り組んでおります。

現在、具体的に取り組んでいる内容として、科学技術イノベーション人材育成を図るために、社会実装に向けた実践的な学習を強化する。リベラルアーツを強化する。

「開発型の研究力を強化する。分野横断的能力を育成する。こういったところには、例えば混合学級を今年度から導入しております。このような取組をやっておりますし、教育科課程の再編、企業との共同研究などをやっております。魅力ある、学生が、よりよく学校生活を送っていただけるような仕組みづくりに今、取り組んでいるところでございます。以上です。

<今村総務企画主事補>

続きまして、「令和2年度の外部評価委員会の指摘事項への対応」として、以下のものがあります。

「ミッションに対する評価項目の成熟化」、再編された「自己点検・評価報告書詳細版」により、ミッションに対する評価項目が整理されました。新たな「自己点検・評価報告書 簡易版」で各部署の重点的な取り組みが明確化されております。

「数値目標の評価と具体化」として、詳細版において評価を行った60項目のうち、数値目標は1項目のみでありました。この原因につきましては、項目によっては数値目標を立てづらい内容も多かったということになります。

「教員間の議論を深める」との指摘に対しましては、校長を委員長とし、自己点

検・評価委員会の体制強化を行いました。自己点検・評価委員会において、各委員から所管している事項についてのブリーフィングを行い、フィードバックおよび責任の明確化を実施しました。委員長による自己点検の総括を行っております。

「自己評価委員会の責任体制の構築と議論、フィードバックの必要性」との指摘に対しましては、校長を委員長とし、自己点検・評価委員会の体制強化を行いました。自己点検・評価委員会において、各委員から所管している事項についてのブリーフィングを行い、フィードバックおよび責任の明確化を実施しました。委員長による自己点検の総括を行っております。

「自己評価書の詳細版のわかりやすい工夫、構成、文言等」については、自己点検・評価委員会において、自己点検・評価報告書の内容について項目が整理されていること、文章表現が分かりやすいかについて確認しております。

「Sは100パーセントか、Sの意味づけをしっかりとつける」との指摘につきましては、評語、S、A、B、Cについて数値化し、意味づけを行っております。外部評価委員の方々から事前にご質問をいただいております。多数のご質問、ありがとうございました。本日の資料、事前質問への回答に一覧にしてまとめておりますので、そちらをご確認いただきたいと思います。説明は、省かせていただきます。

「自己点検・評価」をまとめたいと思います。評価審査機関からの指摘事項、課題への対応が出来ました。自己点検・評価委員会の委員長を校長とする規則改正を行い、体制強化を行いました。また自己点

検・評価およびP D C Aに対する常設の総務企画委員会を設置しました。

自己点・評価報告書、詳細版のミッションベースの再編を行い、ドキュメント形式で作成しました。自己点検・評価報告書、簡易版を部署ごとのP D C A報告書として編成し、責任・対応の見える化を行うと共に自己点検・評価委員会にて活用し、各部署の責任者に校長から助言を行いました。以上が説明となります。

各委員からの質問・意見

＜木下議長＞

今まで説明された事項や、事前配付資料等、その他につきまして、委員の方々から質問、意見をいただきたいと思っております。それを受けて、鹿児島高専の方から回答や意見を伺いたいと思っております。例年どおり、各委員が3分程度でご質問をいただき、それに高専側が回答するという形式で進行していきたいと考えております。

私は最後に質問させていただくこととしまして、順番としまして、外部評価委員会規則第3条規定の順にお願いいたします。

＜河野委員＞

全般についてのコメントという形で示されたわけですが、要点だけでも少し話をさせていただきたいと思っております。初めに令和3年度は、前年度の外部評価委員会の答申による自己点検・評価委員会の体制の強化が行われて、校長を委員長とした規則改正を行ない、また、新たに総務企画委員会を設置し、実行、点検、評価及び外部評価を担

当することとし、自己点検・評価委員会の実施方法や自己点検委員会及び外部評価委員会の実施時期の見直しなど、効果的な自己点検のあり方が検討されているということです。

2番目としましては、「自己点検・評価報告書」については「簡易版」があり、各部署から主報告事項のとりまとめとして作成し、「詳細版」については、分類を導入し、ミッションと各評価項目の関連が分かる形に再編されています。これまでの自己点検・評価に比べて、革新的な新たな発想で、「自己点検・評価報告書」の構成や内容が非常に分かり易くなっています。

それから3番目ですが、「簡易版」の方は、各部署からの報告事項としてまとめられているため、学校全般の管理運営状況がよく理解できます。

4番目は、自己評価基準がS、A、B、C、Dと5段階で、主に計画の進行状況をもとに評価されています。P D C Aの評価で大事なことは、計画の進行ではなく、目標値などの達成度状況であります。中には数値目標の達成による評価も行われていますが、計画の進行での評価も多々あります。そのため自己点検の評価点が主観的で全般的に高い評価になっています。今後、達成度の成果を客観的に求めるための評価法の工夫、これが必要であるのではないかと感じています。

5番目は、自己点検・評価について、学校関係者しか分からないような語句の使用があるわけですが、学外者にわかりづらい語句については、注釈をつけていただきますと、その内容が理解しやすくなるのではないかとということで、次回から、そのように検

討いただければと思います。

<氷室校長>

確かに若干主観的になっている点は気はしていたのですが、もう少し客観的に評価できるような形、成果で評価をできるような形にもっていきたいと思います。

それから語句の方で配慮が足りないところがございまして、大変申し訳なく思っております。以後、気を付けて、きちんと分かるような表現を使っていきたいと思います。

<西委員>

中学校の校長という立場から、鹿児島高専を受験したいという子どもたち向けという事で、いくつかお伺いしたいのですが、バーチャルオープンキャンパスを実施されていて、閲覧数が意外に伸びていません。私もこの委員を引き受けさせていただいてから、何回か拝見したのですが、誰に向けてどれくらいの閲覧数を狙って作成されたのかということと、それから女子学生は増えたのですが、男子が減っているということでしたので、その要因が何か分かれば教えていただけたらと思います。

私たちの方からのイメージでいいますと、やはり高専は難しいというイメージです。ただ簡単に入りますと、今度は留年してしまう。今、教育内容を見せていただいたのですが、やはりここについていけない子供たちが目指すということになると、その後がまた大変だということもありますので、毎年200人以上の学生さんが入学していらっしゃると思いますので、そのどこを目指しているのか、もっと増やしたいのか、そここのところをお伺いできたらと思います。

本校の生徒や、市内の生徒たちも高専に入学を希望する生徒がいるのですが、いつから目指し始めたかというアンケートをとると、やはり少し遅い生徒がおりまして、中3になってから高専を知ったという子もいます。もっと早い小学生の段階などで、興味をもたせるような取り組みをするおつもりがあるのかということをお聞きしたいと思います。ただ今、小中学生向けの何かアピールをされるのも、どちらの学校もやっているらっしゃいます。その計画も教えていただけたらと思います。

今、小中学校で凄く問題になっていることは、特性のある子どもが非常に増えていまして、始良、霧島、伊佐、この地区でも中学生で1,500人くらいいるのです。そういう生徒さんが入学されたときの精神面や安全面に対する配慮など、特性ある生徒とどのように関わっているかということがありましたら、教えていただけたらと思います。

最後に、感染症対策のことでお聞きしたいことがありまして、先日も全学校休校という感じでされているのですが、その基準等ありましたら、教えていただけたらと思います。以上です。

<松田教務主事>

この点につきましては、教務主事の松田の方から回答させていただきます。毎年、夏休みに1日体験入学、いわゆるオープンキャンパスを開催しているのですが、昨年度はコロナの影響もありまして、6月の段階で中止を決定いたしました。そのときに1日体験入学の代わりにバーチャルオープンキャンパスの作成をしたので、本来は、誰に

向けて、どのような形でということをしつかりと計画した上での構築が望ましいのではあるのですが、そこまでの余裕がなかったのが実情でした。

本校に来ていただくはずの中学生に見てもらいたいという思いで作成しているのですが、急ごしらえのところもあり、「ここにバーチャルオープンキャンパスがありますよ」というPRが十分にできていなかった事が反省点でございます。現実に見てもらいたい中学生の皆様には、ホームページがあって、ここでオープンキャンパスをやっているところが十分に伝わっていなかったのかなということを反省しております。今年は、学校訪問をする際に、ホームページのPRもあわせて行っております。今後は、しっかりとPRも含めて見てもらえるような取り組みをしていきたいと思っております。

高専の中で働いている教員には「高専は難しい」という意識はないのですが、実際、中学校訪問の際には、確かにそのような声を聞いております。実際、入試の倍率が下がってくると、学力に不安がある生徒が合格をしまい、それが結果として留年などにつながっていく懸念がありますので、できるだけ倍率は高いに越したことはないとは考えております。

ただ、基本的に留年対策は、本校に限らず全国の高専の喫緊の課題ですので、本校としても学力に不安がある生徒が入ってきたとしても、しっかり指導していけるような体制を、今後ますます構築をしていきたいと考えているところでございます。

PRに関しては、小中学生向けの公開講座や実験教室を、出来るだけ積極的に開催しております。コロナの関係もあり、ここ

数年は思うように出来ていない部分もあるのですが、できるだけ中学生だけではなく、小学生のうちに高専を知っていただく取り組みをしていきたいと思っております。

入学者アンケートを見ても、比較的、「小学校高学年や中学校1年生ぐらいに高専を知った」、あるいは「高専を目指そうと思った」と回答している学生が多いので、そういった生徒をもっともっと増やしていきたいと思っております。

現状としては入学者アンケートからいきますと、中学2年生、3年生で選んだという学生が半数を占めます、結局半分ぐらいは、小学生のときから高専をという目指した学生もいますので、そこについては、もっと早い段階からPRを展開していきたいと思っております。

「特性のある学生」の件です。経験も踏まえて申し上げますと、確かに一定数、本校にもそのような学生がおります。基本的には、そのような特性がみられたときには、担任と何でも学生相談室のカウンセラーやスクールソーシャルワーカーが、すぐに連携をして、どのように対応していくかを検討していきます。特に成績面に関しては、そのような特性のある学生に対して、サポートチームをつくって、サポートしていくという規定はあるのですが、まだ弾力的に活用できていない部分もありますので、その辺はもっと柔軟に対応していきたいと思っております。基本的には相談室が中心となり、学生のサポートにあたっていることが現状となります。

「感染症対策」については5月に休校し、2週間の遠隔授業を行いました。特に基準があったわけではなくて、本校の場合は、学

生の半数が寮生でありまして、感染や濃厚接触になった学生は寮の中で、別の部屋で隔離する状況をつくるのですが、感染が急に増え、隔離する部屋が確保できなくなり、濃厚接触の学生とそうでない学生を一緒の部屋で面倒見なくてはならない状況になったところで、残念ではありましたが寮を1回閉じて、全員を帰省をさせました。その結果、自然と学校自体が休校になり、遠隔授業という形になりました。今後は、どのような基準で、何人が感染したら休校にするなど、考えていかなければならないのかもしれませんが、今のところはケースバイケースという形で対応している状況であり、基本的にはリスク管理室会議を開いて判断をしていくこととなります。

「女子学生」の件について。今年に関しては、入学者は去年の1.4倍と非常に多かったのですが、志願者は、去年とほとんど変わっていないのです。たまたま今年は優秀な女子生徒さんが受けてくれたのではないかと認識です。志願者自体は増えておらず、本当は志願者を増やさなければいけないのですが、結果として入試で落ちる女子生徒がほとんどいなかったために、入学者増につながっていると思います。

志願者全体を見ると、男子が減ったというよりは、全体として昨年と比較すると50人近く受験生が減っています。女子生徒は志願者自体は変わっていないので、男子学生が減ったということはいえるかと思えます。今後しっかり1年生の話し等を聞きながら、どのように高専を進路で選んでいったのかというところを踏まえて、検討していきたいと思っております。

<久保委員>

県工業技術センターは、研究開発と技術支援を通して、県内企業の技術力向上がミッションになっておりまして、最近2か年で、強度試験機、走査型電子プローブ顕微鏡、ナノ粒子解析装置など、他にも鍛造に関するシミュレーションを行う、あるいはプレスを打つ機械など、様々な機械が入っております。こうした機械も、是非、科研費など、一緒に提案できたらいいのではと思っております。

学生指導のことですが、昨年度の実績を書かせていただいておりますが、15名の学生のインターンシップ、学生指導をさせていただいております。内容は、表面の粗さ、組織観察、強度と結晶構造・元素分析に関することなのですが、割と先端的な機械がありますので、高専の先生方と一緒に研究に関わる指導ということに連携できたらと思います。工業センターでも研究開発推進会議をおこなっておりまして、地域共同テクノセンター長の武田先生に当センターの研究開発推進委員になっていただいて、大変感謝しております。1問だけ質問させていただきたいと思っております。

詳細版の3.1-C企業に対する満足度調査を今年度から始めるということだったのですが、どのような企業を対象に満足度調査したいのか教えていただきたいということと、我々も毎年度、共同研究、受託研究を行っている対象企業に満足度調査を実施しております。要は、「成果はできましたか」、「また、やりたいですか」などといった質問で満足度を調査していますが、高専は、どのような感じの調査になるのか。

また共同研究や受託研究以外でも、セン

ターの技術支援を、いわゆる成績資料や依頼分析、試験者、職員の対応などについても、調査しております。こういった企業に対するアンケートをどのように、今後利用していけるのか、教えていただければと思います。

<今村総務企画主事補>

学生の満足度調査を行う企業に関しては、基本的に学生が多く行っている企業に対してアンケートを行おうと思っています。内容としては、学生が入ってからの企業に対する満足度ということで、どのような点が強みで、どのような点が弱いかを調査したい。例えば過去の調査でいうと、「英語の力が弱い」という指摘は、よく見受けられました。そのような項目に対してアンケートを取り、本校にフィードバックし、弱いところ、例えば英語力に関しては、英語教育を強化していく。強みに関しては、より伸ばしていく方法で、教育を改善していこうと考えています。

<鶴ヶ野委員>

過去の高専機構が定めていた自己点検・評価の仕組みから、鹿児島高専として提唱する「ビジョン、ミッション」に基づいて、「何を指すのか・どのようにしたいのか」ということをベースにした評価・点検に移行して2年目になります。いわゆるPDCAが2回ほど、回ったイメージで聞いていましたが、ミッションと活動の関連性みたいなものが、よく理解できるようになったと思います。以前は機構が定めたもので評価していたので、言っていることと、やっていることが随分乖離しているイメージが

ありました。少なくともこの1、2年は、ミッションに関連付けられた活動にするために、様々な評価方法や項目を見直されるなど、自己評価をどのようにやっていくのかということを深く議論されてきたのだなと感じます。

この2年間の成果というのは、非常に分かり易くなりました。外部の人間が聞いても、「こういうことを目指しながら、こういうことをやっているのだな」と非常に方法が分かり易くなったなということと同時に、校長先生が学校として目指しているものが、教員1人1人に共有・共感され、PDCAが回り始めたという印象です。

一般企業でもそうなのですが、PDCAを平面で回し、課題が出てから課題つぶしに終始している状況があります。本来は、スパイラルアップし、1年また1年とレベルを上げていきたいところなのですが、平面で考えると、なかなか上へスパイラルしていかないという状態に陥りがちになります。

教育現場で、定量的に評価するというのは難しいことは百も承知で申し上げますが、可能なものはしっかり定量的に評価してもらいたいと思います。定量的に評価するという意味も、2つの視点があるように思います。

1つは、相対評価のように全国に高専があるので、そういったところと数値で評価することや、あるいは過年度からどのように良くなってきたのか、どう変化したなどといった傾向評価というものもある。単年度だけ見て「こうなりました」ということが、本当に過年度から見たら「上を向いているのか、下を向いているのか」というところまでを見ていくと、組織としての成長が

更に垣間見えるのではないかと考えます。定量的な評価の難しさあるとは思いますが、色々な項目において、こういった相対評価、あるいは過年度評価を含めてやっていると、新たな気付きや、やらなければいけないポイントが見えてくるのではないかと思います。

もう1点は、総花的だなというイメージがあります。今年の重点テーマは何だったのでしょうか？ 各科、それぞれ役割分担があり、それぞれのビジョン・ミッションに向けたテーマがあると思いますが、学校として重点的テーマがあったのか、本年度の拘りたい重点項目みたいなものがより鮮明に出てくると良いのではないのでしょうか。今年も感染症問題や、民間ではエネルギーや原材料の高騰、インフレや円安になるなど、大きく世の中が変化しています。それに対して学校も何かしらその影響を受ける変化点や、今までとは違う環境ということがあると思います。それに対してどのように対処して、どのようにアプローチして行くのか、そのような重点的なものがあったのかどうか、また意識もしなかったのかどうか、というところであります。

評価はあくまで過去やってきたことを評価する訳ですが、将来こうなるのではないかと、という未来予測含めて、自己点検をされると、次なるものが見えてくるのではないかと思います。

<氷室校長>

非常にPDCAの我々のやり方に対する良いコメントをいただいたと思います。もちろんスパイラルアップしていくことは、非常に必要だと思います。いかに定量的に

やるかといったところなのですが、それぞれの項目について数値目標を立てて、その目標値に到達できているかというところは、きちんとやる必要があるのかなと思います。その辺りは、緩んでいたような気がします。

「今年度の重点項目」なのですが、一応は立てておきまして、表に出なかったところがあるのですが、先ほど「短期的な課題」といったところですか。例えば、昨年度でしたら、「コロナ禍の対応、教育課程の再編、科研費、外部資金の獲得、情報の発信、留年、退学への対策、教員評価の透明性、情報セキュリティ対策の強化、研究活動の活性化」、そのようなところに、3年間重きをおいて取り組んでいましたが、その部分が少し表に出なかったことが残念かなと思います。今後、改善していきたいと思います。

<山口委員>

いただきました報告書を毎年、毎回進化していくところをみて、本当に素晴らしいと思っています。最初に、成果の指標として最も重要な数値で表せる指標を設定したら、何が考えられますか、ということですか。例えば株式会社で言いますと、収入から支出を引いた利益という数値で、1年間の活動の成果とすることができるのですが、高専の成果が1年間の利益であるわけではないことは、当然なのですが、何が考えられるか、ということが質問です。ただし、数値で表せる指標、とても大事だということは、私も会社を経営している際に、決算書に出ない数値で表せない指標がとても大事だと思っています。

次は、意見なのですが、高専についてどのように思うかということ。私の娘が中学2

年の女の子で、高専についてどのように思うかということ、一中学生の意見として聞いてみました。「高専のイメージは」と聞くと、「難しそう」、「高専に何があったら行きたい」と聞くと、「ゴロゴロできる場所、イケメンがたくさんいたら行きたい。T i k T o k部をやってみたい」などと言っていました。結構アピールできると思うところは、制服ではなく、私服です。あと、「世界各地に海外留学できたらいい」と言っていました。

広報に関することなのですが、友達同士のやり取りはラインの一択らしいです。娘も深夜までラインを使って友達とやりとりするので、私の家では10時になったらW i - F i等、データ通信を切っています。ラインのオープンチャットを使うといいらしいです。

鹿児島高専のホームページやY o u T u b eを見させていただいたのですが、とても良く、斬新な印象的ホームページだと思いました。ただし中学生は、ホームページやY o u T u b eには中々行かないので、ラインから誘導する方がいいのかなと思いました。学校説明会で各地の学校に行かれていますと思うのですが、そういうところでも、中学生がラインでつながると継続的に情報交換ができるようです。

最後に質問ですが、毎年、凄い進化しているので、とても素晴らしい取り組みだと思っています。こういった取り組みというのは、教職員や学生に周知徹底・浸透させるために、どのようなことに注意して取り組んでいるかということ、是非、教えていただきたいと思いました。以上です。

<松田教務主事>

成果、指標について4つの教育到達目標があり、その4つの教育到達目標に到達できているかどうかということは、1番大事なポイントであると思っています。

毎年、卒業生に対し、4つの項目について自分が到達したと思うかどうか、アンケートをとっています。よく他の高専からも言われるのですが、本校4つ目の到達目標の「相手の立場に立って物を考える技術者」というのは、なかなか他ではありません。卒業生アンケートをここ数年見ても、他の3つは大体、「到達した」、あるいは「概ね到達している」など、ポジティブな意見が大体65パーセントぐらいでとどまっています。それに対して、4つ目の「相手の立場に立って」、ということに関して言えば、去年は86パーセントぐらいの学生が自分は「到達している」と回答しています。学生はどこまで普段意識して生活しているのかは分かりませんが、その1項目だけは、学生に浸透しているということを感じています。

コロナ禍においても企業からの求人倍率は下がることなく、また大学からも非常に高い評価をいただいています。そのような人材をきちんと輩出できているということが、何よりも1番重要ではないかと思っています。そういったことが中学生、また中学生の保護者にも評価されて、志願倍率が上がってくるのが、より良い循環ではないかと思います。少子化の問題もあり、志願倍率が伸び悩みというところもあるので、今後どのようにPRをしていけるのか、ということが課題であると思っています。

<氷室校長>

取り組みを教職員に、どのように浸透させるかということですが、年度の挨拶で予告しておいて、年度が始まったときにきちっと方向性を出して、具体的な話しをしていくということがあります。例えば、今回の *Well-being* を志向する高専のあり方というのは、2年ぐらい前に始めるのですが、最初は *Well-being* という言葉すらほとんど浸透していないのです。どうするかといいますと、まず学内で *Well-being* の勉強会を立ち上げて、その中で教員に勉強してもらい、それを高専の中でどのように展開できるのかといったところを議論して、それを高めていった上で、ようやく今年度のカリキュラムの中に入れて生み出せる。そういう状況に持って行っております。色々な項目によってやり方が違うのですが、できるだけ皆さんが理解した上でやっていくという状況を作っているつもりでございます。

<中重委員>

高専と霧島市の関係は、所在する自治体ということで、評価する立場というよりも協力・提携して、色々と進めていく関係だと思っております。高専へのお願いごと、また今後の協力体制の確認という趣旨のものが多くなるかと思えます。

小中学校におけるネットセキュリティ・リテラシーの出前授業の実施において、大変な協力をいただいていることに感謝をしたいと思います。是非、令和4年の隼人中学校での実施をもとに他の市内の小中学校への訪問等も継続してお願いできればと思っております。ギガスクールが進んで、1人1台のタブレットという環境の中で、まだ

小中学校の現場においても、その活用について、しっかりと活用しきれていないところがあるのかなという気がいたします。

文科省が旗を振ってタブレットはそろったが、小規模校は、適切に使っているところもあれば、大規模校においては、なかなか活用できていない学校が多くあるようです。

今後そのような中で、タブレットまたギガスクールと、どのように向き合っていくのか、どのような形で活用していくか、そのようなところまで含めて高専と連携ができればと思っておりますので、ご協力をよろしくお願いいたします。

次に、高専、そして志學館大学、霧島市、三者で連携している「ニューライフカレッジ霧島 隼人学」についてですが、これは全国でもなかなか例を見ない取組です。令和3年度は「地域から私と世界を変える17章」をメインテーマにSDGsの17の行動についての学習を深めることができたと考えております。是非、この取組についても、今後とも継続してお願いしたいと思います。

さて、私が自治体の立場としてお話ししなければならないことが、就職率のことなのですが、いま現在、高専の卒業生が霧島市内で、あるいは霧島市、鹿児島県内にどれぐらい就職しているかということが分かる部分があれば教えていただきたいということです。是非、大企業等に就職して県外に出た学生で、やっぱり地元に戻ってきたいという人についても、卒業生支援という形で協力いただけないかと思っております。

この6月議会で市外・県外の方への企業の雇用支援を提案しているところです。霧島市内の事業者が行う雇用のための広報や、

様々な活動に対する経費の助成を検討しています。併せて1度東京に出た方で、地元で働いてみたいが、どのようなところで働けるのか分からないというようなことで、そこでインターンをする場合の旅費や宿泊費に対して、個人にも助成をするような形で、霧島市では提案をしております。そういった情報を是非、卒業生で、戻ってきて働きたいという方々にはつないでいただいて、特にテクノクラブ等、そのような企業との結びつきがありますので、そのようなところを紹介しながら、「ここでインターンしてみませんか」とか、「霧島市が助成を行っているみたいですよ」というような協力をいただければ新卒だけではなく、高専の卒業生全般的にまた地元、ひいては鹿児島県での就職が進むのではないかと考えているところです。是非、協力をお願いいたします。

もう1つは、入学式に出て1番驚いたことは、学科ごとのクラス編成ではなく、学科を超えた、学科が入り混じったクラス編成をされていたことと、少しお話を伺ったら、将来はもっと学科自体も色々と考えていきたいという話を聞きました。私たちの感覚では、学科ごとのクラス編成が変わったというだけでも、凄く大きな進歩だと感じるのですが、そういったところについても、方向性等についてお話しが聞ければなと思うところでした。

<氷室校長>

是非、我々も霧島市と連携を強化して、色々な取り組みをやっていきたくて思っておりますので、どうぞよろしくお祈りいたします。それから、鹿児島県内の就職率は、20パーセントぐらいだと思います。

<武田地域共同テクノセンター長>

昨年度、就職を希望する学生(進学希望を除いた学生です)のうち、3割が鹿児島県内に就職しています。これは過去最高の割合になっています。

<氷室校長>

高専は大学と違い、一つの専門を極めるのではなくて、現場に行って、現場にある問題を解決できなければならない。そのためにはその専門だけではなく、色々な専門知識が必要かなと思ってました。それで、できるだけさまざまな専門の知識を深くではなく、浅くていいのですが、今の現場に出たときに躊躇なく対応できるような、そのような学生が高専生ではないかなと思っておりました。そういう人材を社会に送り出したいという思いから、今年度から混合学級が出来ましたので、これに関しては、次の機会にご議論いただきたいと思います。

もう1つその先の学科再編でございますが、正直申し上げますと、私が来た時に一度、やろうとしていたのを取り下げられているのです。そのような状況の中では、新たに再編することは非常に難しいと考えるところ、非常に周りが変わってきているところがあります。

これまで半導体というのは、ほとんど衰退している状況があったにも関わらず、急に国策として進めるところがございます。それから教育未来創造会議では、「あらゆる機能性をもった高専にしてください。大学を含めて、再編してください」といっているのです。これらは我々にとって、大きなチャンスだと思っています。できるだけこの地域が望むような技術者を鹿児島高専がつくりあげ

ていく必要があると思っております。よろしく申し上げます。

<相良委員>

氷室校長が育てたい学生の目標について言われたように、私は、その学生の姿というのが、この評価委員会が目標とする1番大事なことだろうと思います。大事なことは学生をつくるということ。優秀であれば、結果的に女子学生がどんどん入ってくれて、女性の力は凄いのので、鹿児島高専の色が出るのではないかと思います。

高専機構における半導体関係の話というのは、熊本、長崎が前面に出て、こういうときに鹿児島の名前が出してもらえないのは残念であり、PRが欲しいところです。長崎の半導体工場とそれからTSMCのことが中心になったので、佐世保と熊本高専が中心と言う話になったのだと思うのです。子どもがこの新聞を見ることはないのですが、その親は見ると思うのです。だから、親が見るときに鹿児島高専もこれを行っているなということが大事ではないかなと思いました。

先ほど混合学級について校長が触れられたので、今回は詳細な話が出てくるのではないかなと楽しみにしています。今後の学生は、技術者として初期には手にマメをつくって、現場で働いたということが必要だったかもしれませんが、バーチャルに創造しながら、ものを作ることを考えられる人が大事になるという時代がくるのではないのでしょうか。

鉄骨をつくるにも、今は図面を事務の女の子がデータ管理をし、現場の女性のオペレーターにデータを渡し、そのまま鉄板が

切れるという。これを職人の形でやろうとすると、どうしてもそのようにいかなかったのです。

そうしますと学生は、先ほど言ったように、色々なコンピューター技術を駆使して、そして夢を持って、ゲームをしている感覚でものをつくっていくぐらいの時代がこないといけないのだろうと思います。

<氷室校長>

私どもも女子学生を増やしていきたいという強い気持ちでおります。やはり女性の技術的な発想というのは、大人にないものがかかなりありますので、大変期待できていると思っています。我々も努力するのですが、鹿児島県は少し女子生徒の希望者が少ない気がするのです。以前は鳥取県にいましたが、鳥取県は、1年生の40数パーセントが女子学生になっています。我々も、さらにこれから努力して参りますので、よろしく申し上げます。

半導体人材育成ですが、私が半導体の専門家でしたら、おそらく鹿児島高専がなったと思います。1つは、先ほどおっしゃったように、TSMCが熊本に進出したことにより、1つ熊本が中心になった理由がございいます。また何故、佐世保かといいますが、佐世保高専の校長が半導体の九大の専門家なのです。それで理事長が指名をしたということがございいます。また、そのような新規になるような取り組みを展開していきたいと思っています。

<木下議長>

最後に私の方から質問点を言いたいと思っております。全体的に見て、非常に良い取

り組みをされていると、ここまで色々なP D C A活動が、高専全体の組織として、かつそれぞれの区割りといえますか、また学科に対してもP D C Aという形で動いているかなと思います。ここでは少しみえてこなかったのですが、教員あるいは職員の自己点検・評価もやられていることだと思います。それらが個人としての評価、自己点検して改善していく。これは非常に大事なことです。これまで大学教員も高専の先生方も自ら開発して、新しいことをやったりして、自己改革してきましたが、それに対して、組織として、きちっとした形をとっていく。これは非常に重要で、そこがうまくかみ合えば、おそらく組織としては、どんどん成長して、改善していくだろうと。そういった組織としての素晴らしい活動をされているなと思います。

少し重点テーマというところが見えにくかったのですが、例えば、実際に成果として留年率を改善し、実際に数値としてあがってきています。それが本質的かどうかというのは、私としては、まだ疑問はあるのですが、新たな取り組みを試みた後、きちんとそれに対してその後もフォローアップをされているのではないかと思います。そのようなことを組織として、きちんと回していることが非常に素晴らしいことだなと思いました。単に報告書をつくるためのP D C Aになりがちなところを、実質化されているというところが、報告書からもある程度、読み取れるところです。

それと、高専機構の第4期中期計画のベースがありまして、あるいは中期目標・中期計画、これが本質的に素晴らしいものであり、各高専が独自のK P I（重要業績評価指

標）を決めているということがあれば、中期計画の中でどこまで、学校が達成しようかという目標を定めて、それに対して年度ごとに、どのように進展していくのか明確にした方がよいと思います。

また、鹿児島高専の中期計画あるいは機構の年度計画と、今回の自己点検がどのような相関関係にあるのか、そこがあった方がいいかなと思います。鹿児島大学も第4期の目標を定めさせられて、それに対してどのような成果を出していくのかを検討している。特に数値目標を文科省から「決めなさい」ということで、かなりアバウトなところで決めざるを得ない。何故、こうなるからと言う根拠が十分ではなく、実績ベースで、多分もう少し上がっていきだろうという形でしか決められない部分もありまして、非常に数値を決めることは難しいところではありますが、方向性としては、国もこのように舵をきっている。我々としてもそこに沿うような形で、なおかつ特色やオリジナリティを出していくということですので、おそらく高専もそのような形になっていると思うので、それが見える形にさせていただきたいということが、私が2つ目に出した最初の点であります。

最後に教員の業績評価と給与評価。今回の外部評価委員会には直接関係ないかもしれませんが、高専の先生方あるいは事務職員の方々も過剰労働になっている部分があるのではないかと。ある数値目標を掲げて、「よし、やりましょう」となったときに、多分健康面も含めてメンタル的にも個々人に負荷がかかる。そのメンタルケアもある程度やっていただきながら、個々人がこのような目標を掲げて、全体として「目標達成で

きた」という喜び等を感じなければ、きつい話しになってくると思います。1つは、個人の業績評価をどのように行い、それが給与にどのように反映しているのかというのはお聞きしたい1つです。ベースアップが基本的に公務員体系ですので、なかなか難しいですが、どの程度その部分を給与などにのせられているのか。それから繰り返しになります、学生はもちろん教職員の全体的管理、特に健康管理あるいはメンタルケアに関して、どのような仕組みがあるのか、そこが質問です。よろしくお願いいたします。

<氷室校長>

中期計画に関してなのですが、基本的には、ほとんど機構が出しているものに沿って作っています。本来は、この場に持ってきてやるといいのですが、もの凄く時間がかかってしまうのです。ですから、この外部評価委員会のあり方というのも、だいぶ悩んでいます。何か表面上のトピックを評価していただいた方がいいのかなと思ったりしています。

これまでのやり方は、本校の取り組みすべてをここに持ってこれないので、一部を取り出した形で全般を見るので、ややこしくなってくるのだと思います。

数値目標にございますが、例えば、女性の教職員の割合を30%にするなど、なかなか達成できていないところもありますが、高専機構の中期目標に沿って取り組んではおります。

個人の業績に関しては、これは他の大学とも一緒だと思うのですが、教育、研究、社会貢献、国際交流などを含めて、全て点数化

してありまして、点数に応じて記録するシステムをとっております。細かい事を言いますと、レフリー付きの論文を書いたなど、そういったことも含めて評価しているところがございます。

委員長がおっしゃった過剰労働、メンタルヘルス、ヘルスケア、そのようなところは、1番過剰労働になっている先生に答えてもらいます。

<松田教務主事>

1番感じるのは、事務職員が教員にできない細かなところまで見てくれています。教員もそこに甘えている部分もあるので、学校全体として改善していかなければいけないと、常々感じています。確かに教員にしても、職員にしても、優秀な人のところに仕事が集まってくるという仕組みは、どこでも同じだと思っています。そのような現象が起きているのだろうと思うが、かといって均等に仕事を割り振るとうまく回るといって、そうでもありません。その点は悩ましいところだと思っています。

広い意味でのストレスマネジメントという意味で、自分自身は普段から気を付けて仕事をしていますが、それが全教職員にいきわたるようになっていく必要があると思っています。昔は色々な研修会に教員がどんどん出ていましたし、学校も予算を付けてくれていました。最近では、研修会参加を呼び掛けるアナウンスがありませんが、研修自体減っているのか、そのような出張を減らしているのか、分かりませんが、そのようなものがもっと広がればいいと思います。

<深見事務部長>

事務職員の能力の関係あるいは残業対策について、今年取り組みになりますが、事務職員の研修方針をしっかりと立て、どのような人材を事務職員として育てたいかを明確にしようと考えております。

研修についても、基本は学内でできる研修と外部でできる研修となりますが、基本的には、個人の資質・力量を高める研修と組織の力量を高める研修、2つのところを変えようと思っています。もう1つ違った研修で、メンターを付けるという研修を考えています。これは人事異動があった時、あるいは少し自分には難しいという業務にあたった時に、それを支えてくれる人のこと。それを求める人から2人指名して、その人に教えてもらいながら仕事を行うということでもあります。個人が困らないように、あるいは個人の業務をなるべく残業しないですむという、助けられるような研修というものを考えていこうと思っています。

やり方や業務をどのようにやったら効率的にできるか等、つながりということを色々考えて、企画しているところであります。おそらく今年から、そのような研修をやることにより、組織の質あるいは個人の質を高めて、なおかつ残業の軽減などにつなげていこうと考えています。

インセンティブはあるかという事について、業績評価を年間2回行っています。業績については大学と一緒にだと思えますが、目標を4月と10月に立て、それを上司との間で何をどこまで行うということを立てる。それに対してできた人については、ボーナスなど反映する、あるいは定期昇給に反映する形では、やっています。

<木下議長>

私は鹿児島大学にいまして、周りの事務職員や教員をみると、先ほど言われた鹿児島高専と同じように仕事ができる人に集まっており、なかなか非効率的な部分があります。これは企業から言うと、マネジメントとしては「何をやっているんだ」と思われるので、なかなかうまくいかないところがありまして、先ほどのメンター制度は1つの良い試みだと思います。できれば、共にそのようなところ少し改善できればという観点から質問させていただきました。ありがとうございました。

外部評価委員会 講評

<木下議長>

それでは講評に移りたいと思います。

①鹿児島高専としての中期目標・長期目標を設定し、それに対して重点項目が何かを明確にした自己点検・評価の実施。鹿児島高専独自の自己点検・評価を行うこと。

委員の話し合いで出た意見が、中長期目標を立てていただくと、最初に伺った校長の話の内容を、実際の報告書の中に織り込んで、中長期目標を設定していただきたい。その中でも重点テーマの設定、鹿児島高専独自のKPIを含めた重点テーマに沿って中長期プランを立て、それに対してどのように評価していくか。

単年度、単年度の評価や、「ここまでできました」というだけでは、将来性としては「どこに向かって何をしたいのか」、「それに対してどこまで進捗しているのか」が、本

当の意味での進歩です。目標を達成しているのか。そこが明確にはならないので、そのような形を模索していただきたいというところでは。

中長期プランとしては、将来構想を見据えた形ということになります。特に年度、年度の達成度評価の話がありましたが、進捗の部分もあってよいと思います。これは、先ほどの重点テーマに対する達成度評価ということになろうかと思えます。

その辺りをどのように工夫して、「年度計画」と、「中長期、重点テーマに基づくもの」というところを少し明確にさせていただけないかということでは。

全てクリアするというより、独自色を出して、その意味のある鹿児島高専がより輝き、あるいは生き残るという意味にもつながると思えます。

②事前質問に関する情報共有

評価委員からの事前質問は、委員会の中で情報共有ができていない。各委員が互いに情報共有できるような形で外部評価委員会が進行出来るように工夫していただきたい。

「委員それぞれがどのような意見を持っているのか」、「このようなところに何かサジェスションをした方がいいのでは」等がより明確になり、外部評価委員会がより有意義なものになると思えます。

全体的な講評としては、新しくミッションをベースにした評価、それからPDCAについて、各委員には非常に好評でした。限られた時間の中で、それを少しずつ進化させていることに対し、非常に敬意を表しますので、これをさらに進化させてもらいた

いというところでは。目標を設定し、どのようにして自己評価を行い、さらにまた目標を進化・再設定していくのか。是非、そこを組織として進化していただきたいというところをお願いといたしますか、期待したいことでもあります。

評価委員の方々が言われるのは、「かつてに比べたら物凄い進展具合だ」ということですので、これを更なる校長のリーダーシップの下、各先生方が一致協力して、一丸となって推し進めていただきたい。学生も鹿児島高専に来て本当に良かったなど、また教える先生方もこの職場に来て本当に良かったと思うような、そのような環境をつくっていただければ幸いです。今日は、ありがとうございました。

<氷室校長>

皆様、本日は本校の取り組みについて、いろいろと貴重なご意見をいただき、誠にありがとうございました。

委員からの意見も、年々レベルが高くなり、我々も非常に高いポテンシャルをもっているような気がします。

特に、令和3年度は、混合クラスの導入の決定、カリキュラムの改定作業、教育理念の改定、企業との共同教育、Well-beingを志向する高専教育の導入など、いくつかのプロジェクトチームを立ち上げて魅力ある鹿児島高専を目指して取り組んできました。

学生から「鹿児島高専に入学して良かった」、卒業生から「鹿児島高専を卒業して良かった」、また地域の子供たちから「ぜひ、鹿児島高専に入りたい」、勤めている教職員から「鹿児島高専に勤めて良かった」と思えるような高専を目指していきたいと思いま

す。

昨年のこの委員会の最後のあいさつで、半導体、電気産業の衰退の問題は、高専における技術者教育をどのように行うべきかという問題に重要な関わりをもっていると話しましたが、今年に入りTSMC熊本進出に伴い国からの半導体に関する様々な知識・技術を学べる体制構築が求められました。

また、教育未来創造会議が発足し、高専には産業界や地域のニーズを踏まえた機能強化が求められるようになりました。

これまでの学科構成を大胆に見直し、再編を促進する必要があるかもしれません。皆様からいただいたご意見を参考にさせていただき、さらに魅力ある鹿児島高専にしていきたいと思えます。今後ともどうぞよろしく申し上げます。本日はありがとうございました。

令和 3 年度

自己点検・評価報告書（詳細版）

鹿児島工業高等専門学校

目次

I. 令和3年度の自己点検・評価概要	35
II. 令和3年度の評価項目に対する自己点検・評価結果	36
1. 本校のミッションに関する取り組み	36
1.1 国際的に通用する創造性豊かで人格が優れた技術者を養成すること	36
1.1.1 教育の質の保証	36
(a) 学位授与方針について	36
・カリキュラムポリシーの見直し(本科)	36
・社会状況、技術動向に応じた3つのポリシーの見直し(定期的見直し)	36
(b) 本科の教育について	36
・成績保管状況の把握	36
・成績評価の妥当性の把握	37
・試験問題のレベル、繰り返し問題チェックの把握	37
・学修単位の学修時間の把握	37
(c) 専攻科の教育について	38
・試験問題のレベル、繰り返し問題チェックの把握	38
・学修単位の学修時間の把握	38
1.1.2 教育の成果	38
(a) 本科の教育の成果について	38
・留年率、退学率の改善の方策(全国の平均を目安とする)	38
・入試倍率の把握(確保)	39
・本科生の学外研究発表の推進、状況の把握	39
1.1.3 グローバル教育(国際交流)	39
(a) 英語力向上の取り組みについて	39
・提携校との連携	39
・提携校との連携プログラムに参加した学生のTOEIC等の点数の把握	40
(b) 海外インターンシップについて	40
・提携校との連携プログラムに参加した学生のTOEIC等の点数の把握	40
1.1.4 学生支援	41
(a) 学生支援体制について①	41
・教育、生活環境の利用状況や満足度等を学校として把握し、改善するための体制の整備、 学習環境(含ICT)の把握、留学生支援に対する把握、障害者支援に対する把握	41
(b) 学生支援体制について②	41
・キャリア支援、進路指導の全学的取組推進(キャリア支援室設置)	41
・キャリア支援、進路指導状況の把握・ガイドライン等の策定	42
(c) 学生支援体制について③	42
・いじめ対策研修の実施	42
(d) 学生支援体制について④	42
・特色ある取り組みの推進と状況把握(各種コンテスト参加推進:SSD)	42
(e) 在校生学生アンケートについて	43

・ 在校生（4年生以下）に対するアンケート（学生の多様なニーズの把握）	43
(f) 卒業生（5年生）学生アンケートについて	43
・ 卒業生（5年生）に対するアンケート（達成度、満足度、授業改善要望）	43
1.2 開発型の教育・研究に重きをおき、社会的・経済的価値あるものを創出していくこと	44
1.2.1 教育の成果	44
(a) 専攻科の教育の成果について	44
・ 環境創造工学プロジェクトの取組、環境創造工学プロジェクトでの長島町関連取組の継続	44
・ 定員充足率、達成度の把握、満足度の把握、専攻科修了率の把握、学位取得率の把握、プログラム修了率等の把握	44
・ 専攻科生の学外研究発表の推進、状況の把握	44
1.2.2 研究	45
(a) 教員の研究業績について	45
・ 第5ブロックの共通目標達成のための取組	45
・ 特例適用教員数の向上	45
(b) 科研費と外部資金について	46
・ 科研費採択率向上	46
1.2.3 社会連携（企業との連携）	46
(a) 企業との連携について①	46
・ NECとの連携状況の把握	46
1.3 地域の産業、文化さらには生活を支えていく地域に根差した高専とすること	46
1.3.1 社会連携	46
(a) 自治体等との連携について	46
・ 教育における自治体との連携	46
・ 技術士会との共同教育	47
・ 霧島市、日置市との連携	47
・ 委員等による自治体との連携	47
・ キャリア教育における自治体との連携	48
(b) 鹿児島高専テクノクラブ（KTC）について	48
・ KTC企業見学状況等のKTCによるキャリア教育の状況、成果の把握	48
・ 共同研究状況の把握	49
・ KTC事業の把握	49
(c) 企業との連携について②	49
・ 京セラ株式会社との連携	49
1.3.2 学生支援	50
(a) 学生支援体制について⑤	50
・ 地域に根差した特色ある取り組みの推進と状況把握（吹奏楽演奏訪問、メカトロ部小学校訪問、錦江スポーツクラブ、Robogals）	50
2. ミッション以外の取り組み	51
(a) 教育理念、ミッション、学習教育目標等の改定・整理	51

(b)	各学科のPDCA実施	51
(c)	自己点検・評価報告書をミッションベースで再編	51
3.	管理運営	52
3.1	管理運営	52
(a)	教育組織について	52
・	女性教員の増加のための取組、体制、組織、女性教員比率の把握	52
・	女子学生の増加のための取組、女子学生の比率等の把握	52
(b)	FD研修、表彰、SD等について	53
・	教員相互の授業参観の改善	53
・	教育力の質の向上のための研修等	53
・	遠隔授業の質の向上のための研修等	54
・	学生の評価による授業評価の把握	54
・	FDフォーラム・FDレクチャーシリーズの開催	54
・	新任教職研修（SD関連）	55
・	ハラスメント防止（SD関連）	55
(c)	自己点検・評価	55
・	教員による自己点検票の改定	55
・	各規定の制定	56
・	PDCAに基づいた評価の必要性（PDCAサイクルの再構築）	56
・	企業に対する満足度調査の実施と調査結果の検証について	56
・	魅力ある鹿児島高専への取り組み：混合クラス、PBL、共通実験	56
4.	各外部評価の指摘事項の改善点	57
4.1	指摘事項	57
(a)	ミッションに対する評価項目の成熟化	57
(b)	数値目標の評価と具体化	57
(c)	教員間の議論を深める	58
(d)	自己評価委員会の責任体制の構築と議論、フィードバックの必要性	58
(e)	自己評価書の詳細版のわかりやすい工夫（構成、文言等）	58
(f)	Sは100パーセントか、Sの意味づけをしっかりとつける	59

令和3年度の自己点検・評価概要

本校では、国立高等専門学校機構の第4期中期計画をベースに、年度計画および具体的なPlanを策定し、それを実現すべく、Do、Check、Actionを行っている。また、その活動状況について年度ごとに自己点検・評価委員会及び外部評価委員会を開催し、自己点検・評価を行っている。

令和3年度は、新たに総務企画委員会を設置し、自己点検・評価および外部評価を担当することとし、自己点検・評価委員会の実施方法や自己点検・評価委員会および外部評価委員会の実施時期の見直し等、効果的な自己点検の在り方を検討し実施した。

さらに、自己点検・評価委員会の体制を強化するために、校長を委員長とした規則改正を行った。

また、自己点検・評価報告書については、簡易版を新たに各部署からの主報告事項の取り纏めとして作成し、詳細版については「分類」を導入し、ミッションと各評価項目の関連が分かる形に再編した。

<自己評価基準>

達成度と自己評価	評価基準
S：計画以上に進行している	「目標以上の成果が得られている」、または「目標以上の成果が得られる形で進んでいる」
A：計画通りに進行している	「目標通り100%の成果が得られている（ほぼ目標通りの成果が得られている形を含む）」 または「目標通り100%の成果が得られる形で進んでいる」
B：計画からやや遅れている	「目標には届かなかったが、概ね70%以上の成果が得られている」 または「目標には届かないが、概ね70%以上の成果が得られる形で進んでいる」
C：計画から遅れている	「目標の50%以上70%未満の成果にとどまっている」 または「目標の50%以上70%未満の成果となる形で進んでいる」
D：計画から大幅に遅れている	「目標の50%未満の成果にとどまっている」 または「目標の50%未満の成果となる形で進んでいる」

1. 本校のミッションに関する取り組み

1.1 国際的に通用する創造性豊かで人格が優れた技術者を養成すること

1.1.1 教育の質の保証

(a) 学位授与方針について

番号	項目	内容
1	取組事項	カリキュラムポリシーの見直し(本科)
	P【計画】	令和2年度、ディプロマポリシー（本科）について見直しを行ったため、令和3年度は、カリキュラムポリシー（本科）についての見直しを行う。
	D【行った活動】	教務委員会、教務主事・主事補会議で議論を重ね、カリキュラムポリシー（共通事項）を作成し、その後、学科長へ各学科のカリキュラムポリシー（学科別）の作成を依頼した。 再度、教務委員会でカリキュラムポリシー（全体版）について確認し、見直しを行った。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	教務委員会、教務主事・主事補会議、各学科で議論を重ね、カリキュラムポリシー見直しを行うことができた。
	自己評価	A：計画通りに進んでいる
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	ディプロマポリシー及びカリキュラムポリシーについては、今後、時代のニーズに合わせながらカスタマイズさせていく。
2	取組事項	社会状況、技術動向に応じた3つのポリシーの見直し（定期的見直し）
	P【計画】	本科と専攻科の3ポリシー（①アドミッションポリシー、②ディプロマポリシー、③カリキュラムポリシー）については、必要に応じて見直しを行う。
	D【行った活動】	専攻科の3ポリシーの見直しについて検討し、令和3年度は変更する必要ないと判断した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	本科は高専機構における基本方針の見直しと変更、専攻科は大学改革支援・学位授与機構（機関別認証評価）の審査における指摘事項等を受けて、本校の3ポリシーを変更すべきかどうかを検討、判断している。検討の結果、令和3年度はポリシーの変更は必要ないと判断した。
	自己評価	A：計画通りに進んでいる
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	3ポリシーの見直しは、今後も必要に応じて検討を行う。

(b) 本科の教育について

番号	項目	内容
1	取組事項	成績保管状況の把握
	P【計画】	成績保管資料について、教員は試験実施後2か月以内に指定フォルダへ保管するよう依頼する。 令和2年度分の成績保管資料を令和3年度にチェックする。
	D【行った活動】	令和2年度分を令和3年4月にチェックを行った。 令和3年度の成績保管資料については、卒業判定会議、進級判定会議で保管を依頼した。また、3月の教務委員会で令和3年度の成績保管資料のチェック体制等について確認された。

	C【得られた成果および自己評価の理由】	令和2年度成績保管資料をチェックした結果、問題はなかった。 令和3年度成績保管資料についても、適切に保管する体制が取れている。
	自己評価	A：計画通りに進んでいる
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	教員として基本的な業務であるため、指導を含め、引き続き管理を強化していく。
2	取組事項	成績評価の妥当性の把握
	P【計画】	成績評価の妥当性について、シラバスの評価方法に基づき評価されているかどうか教務委員会で確認する。
	D【行った活動】	教務委員会で令和2年度分の確認対象科目を決定し、各科の教務委員が確認を行った。確認結果については、教務委員会で報告し情報を共有した。 必要に応じて、教務主事から科目担当者へ指導を行った。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	成績保管資料を確認した結果、特に大きな問題点は確認されなかった。また、科目担当者へ確認（ヒアリング）した結果、シラバスの修正を要する科目もあったが、特に大きな問題はなかった。
	自己評価	A：計画通りに進んでいる
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	教員として基本的な業務であるため、指導を含め、引き続き管理を強化していく。
3	取組事項	試験問題のレベル、繰り返し問題チェックの把握
	P【計画】	試験実施科目については、セルフチェックシート（紙媒体）を提出させる。 教務委員会（3月）で、1年分のセルフチェックシートを確認し、試験問題のレベルや難易度について確認する。
	D【行った活動】	科目担当教員からセルフチェックシート（紙媒体）の提出はあるものの、学校（教務委員会）として、1年分のセルフチェックシートを確認することは出来なかった。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	学校（教務委員会）としての把握は、遅れているものの、科目担当者は、セルフチェックシートを提出することにより、試験問題のレベルや学生の理解度等を再確認するようになってきた。
	自己評価	B：計画からやや遅れている
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	教員として基本的な業務であるため、指導を含め、引き続き管理を強化していく。
4	取組事項	学修単位の学修時間の把握
	P【計画】	学修単位の学修時間の把握について、教務委員会等で議論を重ね、対応方針等について検討していく。
	D【行った活動】	教務委員会、教務主事・主事補会議で、学修単位の学修時間の把握等について検討を重ねた。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	学修時間の把握については、大きく2つの案にまとめられたが、どちらの方が本校にふさわしいか検討中である。
	自己評価	B：計画からやや遅れている

	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	引き続き、教務委員会の検討課題とし、教務委員会で検討を重ねていく。
--	---------------------------	-----------------------------------

(c) 専攻科の教育について

番号	項目	内容
1	取組事項	試験問題のレベル、繰り返し問題チェックの把握
	P【計画】	本科と同様に、試験実施科目については、セルフチェックシート（紙媒体）を提出させる。 専攻科委員会（3月）で、1年分のセルフチェックシートを確認し、試験問題のレベルや難易度について確認する。
	D【行った活動】	科目担当教員からセルフチェックシート（紙媒体）の提出はあるものの、学校（専攻科委員会）として、1年分のセルフチェックシートを確認することは出来なかった。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	学校（専攻科委員会）としての把握は、遅れているものの、科目担当者は、セルフチェックシートを提出することにより、試験問題のレベルや学生の理解度等を再確認するようになってきた。
	自己評価	B：計画からやや遅れている
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	教員として基本的な業務であるため、指導を含め、引き続き管理を強化していく。
2	取組事項	学修単位の学修時間の把握
	P【計画】	学修単位の学修時間の把握については、講義第1週目に自学自習チェックシートを配布し、定期試験終了後、回収、確認する。また、試験では、講義で教授した内容に加え、自学自習が必要な発展的な設問を設け、学修時間のエビデンスとすることを検討する。
	D【行った活動】	令和3年度から、自学自習チェックシートを導入し、学修時間が不足している学生に対し、科目担当教員から指導を行った。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	学生の自学自習の内容及び時間等を把握することができ、学生への指導へ活用させることができた。
	自己評価	A：計画通りに進んでいる
A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度以降も、科目担当者がチェックシートを活用し、学生への指導へ活用していく。	

1.1.2 教育の成果

(a) 本科の教育の成果について

番号	項目	内容
1	取組事項	留年率、退学率の改善の方策（全国の平均を目安とする）
	P【計画】	令和2年度に実施した学習状況を把握するためのアンケート調査の結果を分析し、今後の学習指導等へ活用していく。 また、前期終了科目で「不可」の科目については、全学的に早期の対応（再評価）を依頼する。
	D【行った活動】	令和2年度に実施したアンケート結果を分析することはできていないが、前期終了科目で「不可」の科目について、全学的に

		早期（10月中）の対応（再評価）を依頼した。 令和3年度末の状況は、留年率3.37%、退学・転学率1.35%となった。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	留年対策に係る学生支援の在り方について、今後、入学する学生の質の低下を考慮し、教員が自ら授業力・対応力・人間力等を向上させることが、今後の課題と考えられる。
	自己評価	B：計画からやや遅れている
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	引き続き、教務委員会の検討課題とし、教務委員会で検討を重ねていく。
2	取組事項	入試倍率の把握（確保）
	P【計画】	入試広報プロジェクトチームを中心に入試広報活動を行っていく。また、入試広報活動のWeb化についても推進させていく。
	D【行った活動】	鹿児島県内の中学校（72校）へ入試広報プロジェクト・チーム（PT）を派遣し、入試広報に係るPR活動を行うことができた。本校のホームページに学校説明会（バーチャルオープンキャンパス）に係る動画を学科ごとに準備することができた。（①学科紹介、②在校生の声、③研究室紹介、④学科PR等）
	C【得られた成果および自己評価の理由】	コロナ禍の影響で、限られた範囲での入試広報活動となったが、入試広報活動のWeb化を推進させることができた。しかし、Webの閲覧状況が想定より増えていなかった。また入試倍率についても、令和2年度と比較して低下した。
	自己評価	B：計画からやや遅れている
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度以降も引き続き、入試広報活動を推進していく。また、Webの閲覧状況が増える方策について検討していく。
3	取組事項	本科生の学外研究発表の推進、状況の把握
	P【計画】	令和3年度末に、本科生の学外発表の状況を各学科の教務委員が把握し、教務委員会に報告する。
	D【行った活動】	各学科の教務委員は、学外発表の状況を把握し、教務係へ報告したが、学校（教務委員会）として、学外発表の状況を把握することは出来なかった。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	令和3年度内に完結できなかったため、令和4年度の教務委員会で報告し内容を確認する。
	自己評価	B：計画からやや遅れている
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度も同様に学外発表の推進、状況の把握を行う。

1.1.3 グローバル教育（国際交流）

(a) 英語力向上の取り組みについて

番号	項目	内容
	取組事項	提携校との連携
	P【計画】	1) NTI ストックホルム校（SWE）とのオンライン交流を不定期に開催する 2) ①異文化理解力向上プログラム、②課題解決力向上プログラ

1		ムを9月に開催する 3) グローバルコミュニケーション力向上プログラムを2月から3月にかけて開催する
	D【行った活動】	1) ①異文化交流：全5回実施。本校参加学生数は延べ58名 ②3D-CG Workshop：全2回実施、本校からの参加学生数は延べ15名 2) ①2日間のバーチャルホームステイ（カナダ、オーストラリア）を実施、参加学生15名 ②3日間のプログラムを模擬国連スタイルで実施、参加学生12名 3) 英語での意見発表、ディベートの基礎スキル向上のためのセミナー、60分×8回の実施、参加学生数12名
	C【得られた成果および自己評価の理由】	1)、2)ともに、事後アンケートで参加学生全員が「おおいに満足している」もしくは「いづらか満足している」と回答するなど、非常にポジティブな回答が得られた。 3) 全日程終了後にアンケート調査を行う。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	1) 提携校との連携 オンライン交流プログラムを充実させ、英語力向上に努める。 2) 3) 異文化理解力、課題解決力、グローバルコミュニケーション力育成に加えて、TOEICスコアアップ講座など資格取得につながるオンラインプログラムを開発・実施する。
2	取組事項	提携校との連携プログラムに参加した学生のTOEIC等の点数の把握
	P【計画】	令和3年度に開催した提携校との連携プログラムに参加した学生のTOEIC-Bridgeの点数の把握を行う。
	D【行った活動】	令和4年1月19日に1～3年生がTOEIC-Bridgeを受験したため、連携プログラムに参加した学生の平均点と学年平均点を比較した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	TOEIC-Bridgeスコアの学年平均値と提携校との連携プログラム参加学生（うち、1～3年生）の平均値とを比較した結果、すべての学年において、プログラム参加学生の平均値の方が各学年平均値よりも高いという結果が得られた。 (学年平均値：<1年生>293 <2年生>304 <3年生>321、プログラム参加学生の平均値：<1年生>336 <2年生>374 <3年生>395)
	自己評価	A：計画通りに進行している
A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	TOEIC-Bridgeに加えて、オンライン教材を用いた「TOEICスコアアップチャレンジ」および「多読・多聴マラソンチャレンジ」のプレ・ポストテストを実施し、英語力向上プログラムの効果を検証する。	

(b) 海外インターンシップについて

番号	項目	内容
	取組事項	提携校との連携プログラムに参加した学生のTOEIC等の点数の把握

1	P【計画】	海外インターンシップのオンライン開催を検討する。
	D【行った活動】	海外インターンシップのオンライン開催を検討したが、相手先機関等との調整が難航し、実施できなかった。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	新型コロナウイルスの影響により、海外インターンシップを実施できなかった。
	自己評価	C：計画から遅れている
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	新型コロナウイルスの感染状況を考慮しながら、令和4年度も海外インターンシップの実施を検討する。

1.1.4 学生支援

(a) 学生支援体制について①

番号	項目	内容
1	取組事項	教育、生活環境の利用状況や満足度等を学校として把握し、改善するための体制の整備、学習環境（含 ICT）の把握、留学生支援に対する把握、障害者支援に対する把握
	P【計画】	令和2年度に実施した満足度調査アンケートでの回答を参考に改善可能な点について検討するとともに、令和3年度も満足度調査アンケートを実施する。
	D【行った活動】	令和2年度のアンケートの回答を基に、女子更衣室の整備、体育館ワックス頻度の増加等の改善を行うとともに、2月13日に全学生向けに満足度調査アンケートを実施し、回答を取集中である。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	教育、生活環境の利用状況や満足度等を学校として把握することができ、得られた意見を基に改善できた事項もあった。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	満足度調査アンケートについては、毎年度実施することを学生委員会で決定した。 令和3年度の意見を基に、令和4年度改善すべき事項を学生委員会でも共有する予定である。

(b) 学生支援体制について②

番号	項目	内容
1	取組事項	キャリア支援、進路指導の全学的取組推進（キャリア支援室設置）
	P【計画】	キャリア支援室を設置し、各学科が実施しているキャリア支援について整理し、キャリア支援プログラムを企画し、実施する。
	D【行った活動】	キャリア支援室を設置し、各学科のキャリア支援内容を調査した。求人面談の対応手順について整理し、学生係、各科担任と共有した。 令和3年度のキャリア支援プログラムとして、就職に関するセミナー、学内合同セミナー等を企画し、実施した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	求人面談の対応手順について整理し、就職に関するセミナー、学内合同企業セミナー等を企画し、実施した。

	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	これまで行ってきたキャリア支援プログラムの整理を行った上で、新たなキャリア支援プログラムを計画・立案し、キャリア支援プログラムの年間計画を作成し、学生へ周知する。
2	取組事項	キャリア支援、進路指導状況の把握・ガイドライン等の策定
	P【計画】	キャリア支援、進路指導状況を把握し、就職・進学指導ガイドラインの策定を行う。 求人管理システム導入の検討を行う。
	D【行った活動】	就職・進学指導ガイドラインを作成し、学内へ周知した。また、就職・進学指導ガイドラインの内容を学生用にまとめ、4年生へ周知した。 2社から求人管理システムの案内・説明を頂き、求人管理システム導入の検討を行った。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	就職・進学指導ガイドラインは、計画通りに作成でき、学生へも周知できた。 求人管理システムについては、どのシステムを導入するか検討中である。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	求人管理システムについては、どのシステムを導入するか令和4年度中に決定する。

(c) 学生支援体制について③

番号	項目	内容
1	取組事項	いじめ対策研修の実施
	P【計画】	全学生に対するいじめ対策研修を4月に実施するとともに、教職員に対する研修を実施する。
	D【行った活動】	令和3年4月20日に鹿児島大学教育学部准教授の方を講師に迎え、「いじめ問題の難しさと大人として心がけたいこと」と題して、全学に対し講演会を実施した。 12月3日に教職員集会を活用して、いじめ防止に関する研修会を実施した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	学生向けの研修については、一方的な講演ではなく、ワークや問いかけもあり、学生が考えることができる講演会となった。教職員向けのいじめ防止に関する研修会については、グループ分けを行い、グループ学習形式でいじめ事例に対しての検討を行い、非常に好評であった。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度についても、継続して学生向けの講演会、教職員向けの研修会を実施予定である。

(d) 学生支援体制について④

番号	項目	内容
	取組事項	特色ある取り組みの推進と状況把握（各種コンテスト参加推進：SSD）
	P【計画】	Supporting Students Dreams プロジェクトチームを設置し、申請要件等を定めるとともに、募集、採択、実施効果の検証等を

1		実施する。
	D【行った活動】	令和3年5月12日にプロジェクトチームが設置され、教員に対し募集を行った。審議の結果、11件の活動を採択した。採択した活動については、進捗状況調査及び参加学生のアンケートを実施し、活動報告を提出してもらう。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	募集から活動選定まで当初の予定通りに遂行できた。ただし、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、予定していたコンテスト等の中止等から当初の計画を遂行できていない活動もあった。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度についても、継続して募集等を行う予定であり、採択件数が増え、活動が活発化することにより、活力ある学校を推進することができると考えている。

(e) 在校生学生アンケートについて

番号	項目	内容
1	取組事項	在校生（4年生以下）に対するアンケート（学生の多様なニーズの把握）
	P【計画】	令和2年度に実施した満足度調査アンケートでの回答を参考に改善可能な点について検討するとともに、令和3年度も満足度調査アンケートを実施する。
	D【行った活動】	令和2年度のアンケート回答で記載のあったニーズを基に、匿名のweb意見箱の運用、教室の清掃用具の整備等を行うとともに、令和4年2月13日に全学生向けに満足度調査アンケートを実施し、回答を取集中である。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	学生のニーズを学校として把握することができ、得られた意見を基に改善できた事項もあった。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	満足度調査アンケートについては、毎年度実施することを学生委員会で決定した。 令和3年度の意見を基に、令和4年度、改善すべき事項を学生委員会でも共有する予定である。

(f) 卒業生（5年生）学生アンケートについて

番号	項目	内容
1	取組事項	卒業生（5年生）に対するアンケート（達成度、満足度、授業改善要望）
	P【計画】	卒業生（5年生）に対するアンケート（達成度、満足度、授業改善要望）結果を分析し、今後の学校運営に繋げていく。
	D【行った活動】	今回の卒業生アンケートについても、高専機構からの質問に本校の質問を追加させて3月に実施した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	アンケート結果の分析が出来ていないため、令和4年度にアンケート結果を分析し、教務委員会で報告する。
	自己評価	B：計画からやや遅れている
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度以降も引き続き、アンケート結果について教務委員会にて検討していく。

1.2 開発型の教育・研究に重きをおき、社会的・経済的価値あるものを創出していくこと

1.2.1 教育の成果

(a) 専攻科の教育の成果について

番号	項目	内容
1	取組事項	環境創造工学プロジェクトの取組、環境創造工学プロジェクトでの長島町関連取組の継続
	P【計画】	学生が分野を横断して複数のグループを作り、長島町の地域課題を抽出し、ものづくりを通して課題解決を目指す。 本取り組みは単年度で終わらせるのではなく、継続的に実施する。成果を長島町サテライトキャンパスで発表し、発表者と参加者で情報交換を行い、問題点の改善に努め、令和4年度に繋げる。最終的にはパイロットスケール※1)の試作品を作成する。 ※1)パイロットスケール：工場を建てる一歩手前ぐらいの規模の設備をパイロットプラントということが多いが、そのパイロットプラントを使った実験をパイロットスケール実験と呼ぶことがある。
	D【行った活動】	令和2年度までの課題について、計画どおり単年度で終わらせることなく、引き続き実施した。令和4年3月に長島町への調査を予定していたが、新型コロナウイルスの影響もあり、調査を実施することが出来なかった。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	現在、長島町で実施しているこの取り組みについて、今後、長島町以外の市町村で実施ができないか模索する。
	自己評価	B：計画からやや遅れている
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	長島町での環境創造工学プロジェクトの取組は、令和4年度以降に実施検討を行う。
2	取組事項	定員充足率、達成度の把握、満足度の把握、専攻科修了率の把握、学位取得率の把握、プログラム修了率等の把握
	P【計画】	定員充足率、達成度、満足度、専攻科修了率、学位取得率、プログラム修了率等の状況を把握するため、データを整理する。
	D【行った活動】	専攻科委員会で各項目データを整理し状況を把握した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	現在、各項目の状況について把握まで行われている。今後、分析が必要かどうかについて専攻科委員会で検討する。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度も同様に定員充足率、達成度の把握、満足度の把握、専攻科修了率の把握、学位取得率の把握、プログラム修了率等を把握する。必要に応じて分析も行っていく。
3	取組事項	専攻科生の学外研究発表の推進、状況の把握
	P【計画】	教員へ外部資金の獲得を促すと共に、学生の学外発表を推奨する。
	D【行った活動】	外部資金の獲得については、教職員へ周知を行い、必要に応じて、ヒアリング等を行った。 学外研究発表について、全学生が参加したことを確認した。
	C【得られた成果および自己評価】	本校の研究内容（進捗状況、発表状況等）について、学校とし

	の理由】	て把握することができた。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度以降も引き続き、学外研究発表の推進、状況の把握を行っていく。

1.2.2 研究

(a) 教員の研究業績について

番号	項目	内容
1	取組事項	第5ブロックの共通目標達成のための取組
	P【計画】	第5ブロックの共通目標について、学内で共通理解を深めていく。 共通目標：①専門系：査読付き論文2編以上 一般系：論文2編以上・著書1冊以上 ②外部資金：過去3年分の実績額（平均）の110%及び科研費採択率前年度比3%増
	D【行った活動】	第5ブロックの共通目標について、学内で周知を行い、高専機構等の研究力アップに関するイベントについては、積極的な参加を呼びかけた。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	以前に比べ、学内の共通理解が深まってきており、教員の参加者も増加してきている。令和3年度の論文数は32件（延べ数）であった。因みに、イベントへ参加する教員は、比較的研究力の高い教員であり、同じ顔ぶれとなっている。
	自己評価	B：計画からやや遅れている
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	5ブロックの共通目標達成者数をチェックし、目標未達成者については、今後3年間の研究計画書（論文投稿計画書）の提出を求める。また、高専機構主催の研究力強化プログラムへの積極的な参加を継続して呼びかける。
2	取組事項	特例適用教員数の向上
	P【計画】	特例適用教員数の向上については、申請時にヒアリングを行い、書類の記入方法（業績の見せ方など）について指導する。また、筆頭著者、責任著者としての論文執筆を増やすよう指導を行う。
	D【行った活動】	特例適用教員の申請時に、研究主事及び研究主事補でヒアリングを実施し、本人たちの意思を尊重しながら、申請書類の記入方法について、5名にアドバイス・指導を行った。令和5年度入学生から、九州大学との連携教育プログラムにおける連携教員としての参加を積極的に呼びかけた。連携教員となることで、指導実績、研究実績の積み増しが見込まれる。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	特例適用教員数の向上については、申請した5名中、3名が承認された。結果として、特例認定教員率は63.2%となった。
	自己評価	A：計画通りに進行している
A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	特例適用教員数の向上については、令和4年度以降も継続的にヒアリングを行っていく。	

(b) 科研費と外部資金について

番号	項目	内容
1	取組事項	科研費採択率向上
	P【計画】	科学研究費助成事業の応募及び採択率を向上させるために、プロジェクトチームを設置する。
	D【行った活動】	採択率を向上させるためにプロジェクトチームによる査読を行い、教職員に対して適切な指導・助言等の支援を行った。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	令和4年度科研費への申請件数は、令和3年度科研費と同様に57件であり、採択件数は、4件から9件に増加した。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度以降もプロジェクトチームによる査読を行い、申請書をブラッシュアップし、採択率の向上を行いたい。

1.2.3 社会連携（企業との連携）

(a) 企業との連携について①

番号	項目	内容
1	取組事項	NEC との連携状況の把握
	P【計画】	顔認証システムを図書館及び女子寮へ導入し、実証実験を実施する。
	D【行った活動】	顔認証システムを図書館及び女子寮へ導入し、実証実験を実施した。 新たに生体情報を用いた授業改善の実証実験を実施した。 4年生を対象に、特別インターンシップを実施した。 主に低学年向けにDXプロジェクトを実施した。 教員向けAI教育に係る研修会を実施した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	概ね予定していた計画案件については実施できた。 当初、計画していなかった案件についても、NEC と連携し実施することができた。
	自己評価	S：計画以上に進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度以降も引き続き、NEC との連携を推進していく。

1.3 地域の産業、文化さらには生活を支えていく地域に根差した高専とすること

1.3.1 社会連携

(a) 自治体等との連携について

番号	項目	内容
1	取組事項	教育における自治体との連携
	P【計画】	令和2年度から引き続き、霧島市との連携について、NEC との三者で地域共創の事業計画を検討する。
	D【行った活動】	NEC と本校の2者間で会議（Zoom）を実施し、検討を重ねている。霧島市内の小中学校へのICT教育については霧島市教育委員会と、また地域共創については霧島市情報政策課と打合せを

		行う事が出来た。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	コロナ禍の状況ではあったが、対面やZoomを活用し、連携について検討を重ねることができた。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	霧島市内の小中学校への出前授業を含めた連携の計画は、令和4年度に向けて進めていく。 NECとの三者で地域共創の事業計画については令和4年度も継続して取り組みを行う。
2	取組事項	技術士会との共同教育
	P【計画】	鹿児島県技術士会と本校との共同教育を全学科で実施する。
	D【行った活動】	12月下旬から1月下旬にかけて、鹿児島県技術士会から講師を招き、技術士会との共同教育を実施した。 ○科目名 M科：創造実習、E科：電気電子工学実験V、S科：特別講座、I科：卒業研究、C科：工学セミナー
	C【得られた成果および自己評価の理由】	鹿児島県技術士会との関係も良好で、現在、技術士会との共同教育は10年以上継続されている。今後も引き続き、継続していきたい。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度以降も鹿児島県技術士会との連携を深め、技術士会との共同教育を継続させていく。
3	取組事項	霧島市、日置市との連携
	P【計画】	霧島市教育委員会（志学館大学含む）と連携し、生涯学習講座ニューライフカレッジ霧島「隼人学」を開催する。 日置市の主催で例年開催される「企業の魅力説明会」、「異業種交流懇話会総会」等に参加する。
	D【行った活動】	コロナ禍の状況ではあったが講座を5回開催した。（7月10日、10月9日、11月13日、12月11日、1月8日） 日置市主催で開催される日置市異業種交流懇話会総会（5月7日）、日置市企業の魅力説明会（6月30日）に参加した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	ニューライフカレッジ霧島「隼人学」は高等教育機関と自治体が連携して開催する全国でも例を見ない取組であり、優れた運営と学習成果が地域の活性化に寄与すると評価され、全国市民大学連合から優良市民大学として認定されている。本校の教員も講師として登壇し、鹿児島高専のPRにもつながった。 日置市主催の各事業へ参加し、日置市の学校及び企業関係者等と意見交換を行うことで、日置市の将来ビジョンや日置市地域の企業が抱える課題等について情報収集することができた。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	今後も継続して霧島市、日置市と協力し各事業を行い、地方創生に繋がる活動を行っていく。
	取組事項	委員等による自治体との連携
	P【計画】	各自治体主催の委員会に委員として参加する。
	D【行った活動】	各種外部会議等に委員として参加した。

4		<ul style="list-style-type: none"> ・霧島市ふるさと創生有識者会議 ・鹿児島県工業技術センター研究開発推進会議 ・かごしま産業支援センター新事業進出支援事業審査会 等
	C【得られた成果および自己評価の理由】	各種委員会・会議に参加して、自治体（地域）の活性化を推進する施策・取組に対する助言や、県内企業に対する技術支援等のアドバイスをを行った。本校の学識的な知見を提供するとともに、地方自治体や県内企業が抱える課題解決に向けた取り組み等について理解することができた。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	今後も継続して各外部委員会・会議に参加し、「地域に根差した鹿児島高専」としての活動を継続していく。
5	取組事項	キャリア教育における自治体との連携
	P【計画】	地方創生特別講義として、霧島市と日置市に、2年生に対して特別講義を実施して頂く。
	D【行った活動】	地方創生特別講義として以下のとおり実施した。 ・11月24日 霧島市、日置市（対象：本科2年生）
	C【得られた成果および自己評価の理由】	感染・感染拡大防止を踏まえた形で講演を実施した。地方創生に向けた霧島市・日置市独自の取り組み、OBからのアドバイス等についての講演を聴くことにより、学生からは「地方創生について知ることが出来て、自分は将来どこで働いていくかを考える良い機会になった。」等の意見が寄せられ、学生にとって有意義な特別講演となった。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	Webを活用した実績を活かし、令和4年度以降もそれぞれの場面に柔軟に対応しながら継続して事業を実施する。また、アンケート結果を踏まえて、令和4年度の実施に向けて事業内容等の改善を図る。

(b) 鹿児島高専テクノクラブ (KTC) について

番号	項目	内容
1	取組事項	KTC 企業見学状況等の KTC によるキャリア教育の状況、成果の把握
	P【計画】	KTC 企業による特別講義及び地域企業研究会開催によるキャリア教育として、令和2年に続きコロナ禍の状況で企業見学会が実施出来ない為、1年生及び3年生を対象に KTC 企業による特別講義を行う。また本科4年生及び専攻科1年生を対象に、感染症対策に十分配慮して地域企業研究会を行う。成果についてはともに実施後のアンケートを行う予定である。
	D【行った活動】	KTC 企業による「地域企業特別講義」「地域企業研究会」を以下のとおり実施した。 <ul style="list-style-type: none"> ・地域企業特別講義 11月17日（本科3年生） ・12月8日（本科1年生） ・地域企業研究会 1月18日（本科4年生、専攻科1年生） ともに終了後はアンケートの実施・集計を行った。

	C【得られた成果および自己評価の理由】	地域企業特別講義は、感染症対策に留意してハイブリッド方式で実施した。学生にとって学びのモチベーションを高めるきっかけとなった。また業界の動向・本校のOBの業務内容やアドバイスを聴くことにより、将来のキャリアについて考える機会となった。 地域企業研究会は最大限の感染症対策を講じて対面形式で行うことが出来た。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	コロナ禍の状況を踏まえて柔軟に対応しながら、継続して事業を実施する。また、アンケート結果について分析し、令和4年度の実施に向けて事業内容等の改善を図る。
2	取組事項	共同研究状況の把握
	P【計画】	共同研究については新規の共同研究契約があった際には、令和2年度より継続して、企画係にて一覧を作成し、校務連にて報告する。
	D【行った活動】	共同研究について一覧を作成し、校務連で報告を行っている。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	共同研究の受入れ実績について、毎月の校務連で報告を行うことができた。これにより、外部資金等の現状を確認することができた。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度も継続して、共同研究一覧を作成、校務連にて報告を行う。
3	取組事項	KTC 事業の把握
	P【計画】	KTC 事業に関する年間計画を検討する。事業の実施方法等についてはKTC 三役に相談し、テクノセンタースタッフ会議にて実質的協議を行う。
	D【行った活動】	令和3年5月10日、7月8日にKTC 会長、副会長と会議を行った。事業の実施方法についてテクノセンタースタッフ会議を行い、令和4年2月末時点で27回開催している。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	KTC の各事業については、その都度、会長、副会長及びテクノスタッフで協議し、会長・副会長の意向を汲みながら、コロナ禍の状況に対応して事業を実施することができた。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	Web を活用した実績を活かし、令和4年度以降もコロナ禍の状況を踏まえて柔軟に対応しながら継続して事業を実施する。また、アンケート結果について分析し、令和4年度の実施に向けて事業内容等の改善を図る。

(c) 企業との連携について②

番号	項目	内容
1	取組事項	京セラ株式会社との連携
	P【計画】	鹿児島高専と京セラ株式会社との共同教育を通して、地域に貢献できる実践的な技術者を養成できるプログラムを検討する。
	D【行った活動】	両機関における担当者が決まった。また、令和3年11月に第1回の打ち合わせを本校で実施した。本校での他企業との先行事

		例などを紹介した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	共同教育を進めていくことの提案、先行事例紹介による相互理解、そして共同教育を進めることについて担当者間での合意が確認できた。
	自己評価	B：計画からやや遅れている
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	第2回目の打ち合わせが令和4年3月に計画されていたが実施できていない。今後、授業での連携について具体案を出していく。共同教育に関する協定などの準備を進める。

1.3.2 学生支援

(a) 学生支援体制について⑤

番号	項目	内容
1	取組事項	地域に根差した特色ある取り組みの推進と状況把握（吹奏楽演奏訪問、メカトロ部小学校訪問、錦江スポーツクラブ、Robogals）
	P【計画】	地域に根差した特色ある取り組みの推進を行うため、課外活動の支援を行う。
	D【行った活動】	当初予定していたメカトロニクス研究部の小学校訪問や吹奏楽部演奏訪問、Robogalsについては、新型コロナウイルス感染症の影響により実施することができなかった。 錦江スポーツクラブへの学生への参画についても、新型コロナウイルス感染症の影響で中断する期間が多く、例年に比べ活動実績が少なかった。 サイバーセキュリティボランティアとして、本校学生が離島の小学校で活動を行い、後援会と調整し、支援を行った。 学生主事を中心として、近隣自治体である真孝地区の会長と意見交換を行い、学生会を中心として水やり等地域貢献の実施を検討した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	新型コロナウイルス感染症の影響で、活動自体が縮小しているため、当初の計画から遅れが生じている。 ただし、学生主事を中心に学生会を活用した近隣自治体への地域貢献の検討、意見交換等、令和4年度につながる成果が得られた。
	自己評価	B：計画からやや遅れている
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	今後も学生主事を中心として、学生を活用した地域貢献について検討していくとともに、新型コロナウイルス感染症の影響で複数年実施できていない活動に対し、支援を行っていきたい。

2. ミッション以外の取り組み

(a) 教育理念、ミッション、学習教育目標等の改定・整理

番号	項目	内容
1	P【計画】	教育理念、ミッション、学習教育目標等の改定整理について検討を行い、関係部署で議論をしてもらうように依頼する。
	D【行った活動】	教育理念の改定について、総務企画委員会で議論を行い、改定した。ミッション、学習教育目標等については、令和3年度の改定・整理の必要性はないと判断した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	従来、1 目的、2 教育理念、3 教育理念を達成するための3つの目標、4 ミッションと複数あったものを、1 目的、2 教育理念、3 ミッションの形に整理できた。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和3年度に実施しているので、令和4年度以降当面は見直しの検討の予定はない。

(b) 各学科のPDCA実施

番号	項目	内容
1	P【計画】	自己点検・評価の在り方を見直し、各科、学科についてもPDCAを実施することで、学科での目標の共有化、協働を促進し、教育での発展的な活動を行う。
	D【行った活動】	各科、学科のPDCAを作成し、総務企画委員会にて報告された。Planについて、各科、学科で取り組む。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	自己点検・評価委員会にて、各科、各学科もPDCAの実施状況を点検・評価し、報告を行った。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度以降も各学科のPDCAを実施する。

(c) 自己点検・評価報告書をミッションベースで再編

番号	項目	内容
1	P【計画】	自己点検・評価報告書を本校のミッションベースの項目で再編し、ミッションに即した活動を明確化する。
	D【行った活動】	総務企画委員会にて、本校のミッションベースの項目に再編した自己点検・評価報告書を作成した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	自己点検・評価委員会（総務企画委員会）にて、本校のミッションベースの自己点検・評価項目になっていることを確認した。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	本項目は、令和3年度に実施し、本目標は達成された。令和4年度以降についても、引き続き、自己点検・評価報告書の改善を行っていく。

3. 管理運営

3.1 管理運営

(a) 教育組織について

番号	項目	内容
1	取組事項	女性教員の増加のための取組、体制、組織、女性教員比率の把握
	P【計画】	女性教員比率（令和3年5月1日現在） 機構全体：11.8% 本 校：4.28% 機構全体の比率を目標値とし、引き続き教員の公募文にポジティブアクションを記載し、女性教員の増加を目指す。
	D【行った活動】	令和3年度に行った教員公募において、公募文にポジティブアクション※2)を記載して公募した。 ※2) ポジティブアクション：積極的格差是正措置。男女間の差別を解消して、働く意欲と能力のある女性が活躍できるように、企業が自主的に行う取り組みのこと。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	令和3年度の11件の教員公募において、計29名の応募者中、女性応募者は3名であり、1名採用に至った。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	今後も引き続きポジティブアクションを記載し、女性教員の増加を目指す。
2	取組事項	女子学生の増加のための取組、女子学生の比率等の把握
	P【計画】	<ul style="list-style-type: none"> ・志願倍率（女子生徒）の増加に向けた取組を行う。 ・女子更衣室の整備を進める。 ・Robogals 鹿児島市の学生による小中学生対象のワークショップを行い、理工系を目指す女子を増やす取組を行う。 ・令和2年度末に女子寮生への防犯体制の向上と、点呼作業の効率化を目的として、女子寮における入館管理のための顔認証実証実験を行った。また、顔認証による点呼については、数日間行ったのみであり、具体的なデータがあまり得られなかったため、令和3年度は顔認証による点呼の本格的な実証実験を行う。
	D【行った活動】	<p>学校説明会や中学生向けパンフレットでは、女子学生が活躍している話題を多く取り入れて説明を行った。</p> <p>令和3年4月から設置された女子更衣室の運用について、ロッカー配置等を決定するとともに、時計、立ち鏡等の必要物品を整備した。また、女子学生向けの施設等に関する満足度調査アンケートを実施し、女子学生が不満に感じている点の把握を行った。</p> <p>新型コロナウイルスの影響により、ワークショップの実施は困難であった。しかし、南日本小学生プログラミング大会でデモンストレーションを行うことは出来た。(12月末)</p> <p>顔認証による点呼の実証実験を数回行い、認証精度について検</p>

		証した。さらに、マスクや眼鏡の有無、おでこを見せる見せない、髪を後ろで束ねるか、束ねないかによって認証精度に影響を及ぼすか検討した。また、顔認証による点呼の使い勝手についてアンケートを実施した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	令和2年度と同等の女子学生の志願倍率を確保することができ、合格者は約1.5倍増の49名となった。 女子更衣室の設備については、徐々に設備が整ってきている状況であり、当初の計画は概ね達成できた。今後は、アンケートの女子学生の意見を考慮し、さらなる改善につなげていきたい。2017年発足時からの継続的な取り組みにより、推薦入試での女子中学生の受験者数が増加した。 顔認証による点呼の実証実験の結果をNECと情報共有し、不具合の解消を重ね、認証精度の向上を図ることができた。また、運用上の問題点も把握することができた。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度以降も引き続き、入試広報活動を推進していく。 アンケート結果を考慮し、ソフト、ハード両面から継続して女子更衣室の整備を進める。 引き続き、女子小中学生を対象としたワークショップを実施する。また、コロナ禍でも実施可能なワークショップの内容を模索する。特に、離島や僻地などの受験者数が少ない地域の訪問を検討する。 顔認証による点呼を実施するにあたり全員の顔画像の登録が必要であるが、登録に協力頂けない学生が数名いる状況である。また、今後のNECとの連携が不透明であることも不安材料である。

(b) FD研修、表彰、SD等について

番号	項目	内容
1	取組事項	教員相互の授業参観の改善
	P【計画】	教員の授業力向上を目的として、公開授業を令和3年度前期に実施する。
	D【行った活動】	令和3年6月14日（月）～7月9日（金） 4週間の期間で公開授業を実施した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	公開授業（1回以上）の参加率89.7%で令和2年度の81.8%より向上した。 実施担当者より、各教員に「公開授業アンケート」によるフィードバックを行った。また、公開授業参観者は、授業実施者に対して、「公開授業メモ」を渡した。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度は、公開授業を前期、後期と実施し、教員が公開授業へ参加しやすい実施体制での実施を行う。
	取組事項	教育力の質の向上のための研修等
	P【計画】	授業力アップアクティビティの一環として、遠隔授業スキルの向上を図る。

2	D【行った活動】	Moodle を利用した小テスト作成の講座を令和3年9月に実施した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	参加できなかった教員に対しては、動画を作成し、配信した。Moodle の小テストを活用している教員は、年度当初より増加した。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度以降も引き続き、授業力アップアクティビティを推進していく。
3	取組事項	遠隔授業の質の向上のための研修等
	P【計画】	遠隔授業のガイドラインを作成する。
	D【行った活動】	総務企画委員会で遠隔授業のガイドラインを作成し、令和3年7月20日、教職員に向けてガイドラインを周知した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	総務企画委員会で遠隔授業のガイドラインを作成し、令和3年7月20日、教職員に向けてガイドラインを周知した。
	自己評価	A：計画通りに進行している
A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	遠隔授業のガイドラインに沿って、遠隔授業が実施されているか確認を行う。	
4	取組事項	学生の評価による授業評価の把握
	P【計画】	授業アンケートを実施し、今後の授業改善へ繋げる。
	D【行った活動】	授業アンケートを実施し、教務委員会で報告・分析し、今後の授業改善へ繋げている。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	学校指定のアンケート以外でも同様の手法を用いて、各教員が独自に授業に関するアンケートを実施し、改善に結び付ける動きがみられた。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度以降も引き続き、授業改善に向けた取り組みを行っていく。
5	取組事項	FD フォーラム・FD レクチャーシリーズの開催
	P【計画】	鹿児島高専FD フォーラム、鹿児島高専FD レクチャーシリーズを実施し、教育能力の向上および知識の共有を図る。
	D【行った活動】	<p>【鹿児島高専FD フォーラム】</p> <p>(1) 校長裁量経費を頂いた先生方の研究の取り組みの紹介と質疑応答 6/9</p> <p>(2) Well-being を志向するエンジニア教育について 7/7</p> <p>(3) 宇部高専の取り組み（ベトナム高専支援プロジェクトなど）や本部の国際協力の活動について 9/1</p> <p>(4) 有明高専における混合学級の導入 9/10</p> <p>(5) 令和2年度新任教員スタートアップ経費（校長裁量経費）に係る研究報告会 10/13</p> <p>(6) いじめに関する研修会 12/8</p> <p>(7) AI・データサイエンスに関する講演 1/12</p> <p>(8) ジェンダーに関する講演 3/9</p> <p>【鹿児島高専FD レクチャーシリーズ】</p> <p>(1) 若手セミナー 仕事カブラッシュアップ 5/7</p>

		(2) オンライン英会話講座 9/1~10/31 (3) COMPASS 5.0 事業紹介と教育プログラム AI・数理データサイエンス分野 12/1 (4) Well-beingに関する勉強会 12/13 (5) ニューフェースセミナー 1/14 (6) 令和4年度担任研修 3/30 (7) オンライン英会話講座 3/1~3/31 (8) Discussion&Debate 3/14
	C【得られた成果および自己評価の理由】	鹿児島高専FDフォーラム、鹿児島高専FDレクチャーシリーズともに充実した内容での実施がなされている。
	自己評価	S：計画以上に進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度についても充実した鹿児島高専FDフォーラム、鹿児島高専FDレクチャーシリーズを計画して実施する。
6	取組事項	新任教職研修（SD関連）
	P【計画】	新任教職員研修を実施し、職務遂行に必要な基礎知識等を理解し、資質の向上を図る。
	D【行った活動】	校長、教務主事、総務企画主事、学生主事、寮務主事、研究主事・専攻科長、国際交流センター長、地域共同テクノセンター長が、各所管する内容について、5回にわたって研修を実施する。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	計5回、210分の研修を実施した。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度についても同様に実施する。
7	取組事項	ハラスメント防止（SD関連）
	P【計画】	改正労働施策総合推進法（パワハラ防止法）の施行にあわせて、パワーハラスメントの防止、共通理解を目的に実施する。
	D【行った活動】	日時：令和3年10月11日（月）～令和3年11月26日（金） 内容：ハラスメントに関する動画研修
	C【得られた成果および自己評価の理由】	パワーハラスメントを含むハラスメントの防止対策をさらに促進するため、ハラスメントに対する関心と理解を深めることを目的として実施した。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	今後も総務企画委員会の専門委員会において、必要なSDを実施する。

(c) 自己点検・評価

番号	項目	内容
1	取組事項	教員による自己点検票の改定
	P【計画】	教員による自己点検票を改定して、幅広い活動で自己点検が行えるようにする。
	D【行った活動】	総務企画委員会にて、各科、各学科の意見を聴取しながら作成を進めている。
	C【得られた成果および自己評価】	総務企画委員会での取りまとめが遅れており、取りまとめ後に

	の理由】	校長へ、答申する予定としている。
	自己評価	B：計画からやや遅れている
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度以降も検討を続ける。
2	取組事項	各規定の制定
	P【計画】	評価機関から求められている各種アンケートについて、実施間隔等が定められていないものがあり、それらについて実施期間定める。
	D【行った活動】	在校生満足度アンケートは、学生委員会・学生係で「毎年」実施することとした。 卒業生アンケートは、教務委員会で「毎年」実施することとした。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	各種アンケートについて実施部署の確認、実施間隔等を決定した。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	定められた実施間隔で実施されているかについて、自己評価点検委員会でチェックする。
3	取組事項	PDCA に基づいた評価の必要性（PDCA サイクルの再構築）
	P【計画】	自己点検・評価報告書を PDCA の項目で記載して、PDCA サイクルの実施を確認する。特に、自己点検・評価委委員会の機能を強化し、各部署の責任者によるブリーフィングを行い、PDCA サイクルの実施状況を確認、共有する。
	D【行った活動】	科、学科も含めて各部署において PDCA を実施し、自己点検・評価委員会にて PDCA サイクルの実施状況を確認した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	各部署からの自己点検・評価報告書の内容で PDCA サイクルの実施状況を確認し、自己点検・評価委員会において実施状況の認識の共有を図った。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度以降も PDCA サイクルの実施、確認を行う。
4	取組事項	企業に対する満足度調査の実施と調査結果の検証について
	P【計画】	企業アンケートは不定期での実施であったが、実施間隔を定め、令和4年度を初年度として実施をする。
	D【行った活動】	企業アンケートは、総務企画委員会・キャリア支援室・学生係・企画係にて「3年ごと」に実施することとした。 また、令和4年度から実施することとした。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	企業アンケートについて実施間隔を決定した。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度に計画に基づいて企業アンケートを実施する。
	取組事項	魅力ある鹿児島高専への取り組み：混合クラス、PBL、共通実験
	P【計画】	令和4年度からの混合クラス実施に向けて、クラス編成の在り方、共通科目について実施の在り方を定める。

5	D【行った活動】	混合クラスのクラス編成は、教務主事、総務企画主事、教務係で編成した。 PBL（創作活動）については、担当者間で実施に向けて検討を進めた。 共通実験（工学基礎実習）については、機械工学科が初年度の担当として、担当者間で実施に向けて検討を進めた。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	混合クラスのクラス編成については、編成方法を定めた。 PBL（創作活動）については、担当者間の打ち合わせを実施し、実施方法について検討を進めた。 共通実験（工学基礎実習）については、機械工学科を中心に担当者間で実施方法について検討を進めた。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度末に、実施状況を確認する。

4. 各外部評価の指摘事項の改善点

4.1 指摘事項

(a) ミッションに対する評価項目の成熟化

番号	項目	内容
1	P【計画】	ミッションに対する評価項目を整理する。
	D【行った活動】	自己点検・評価報告書（簡易版）、自己点検・評価報告書（詳細版）を改善し、特に詳細版ではミッションと関連する評価項目を明確化する。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	再編された自己点検・評価報告書（詳細版）によりミッションに対する評価項目が整理されている。新たな自己点検・評価報告書（簡易版）で、各部署の重点的取り組みが明確化されている。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度以降も改善を図る。

(b) 数値目標の評価と具体化

番号	項目	内容
1	P【計画】	数値化できる評価項目については数値化を実施する。
	D【行った活動】	目標として数値化できる内容は数値化を行う。また結果報告については可能な限り数値を入れて評価をする。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	詳細版において評価を行った60項目のうち、数値目標は1項目のみであった。項目によっては、数値目標を立てづらい内容も多い。
	自己評価	C：計画から遅れている
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度は、可能な範囲で数値目標を掲げることを推進する。

(c) 教員間の議論を深める

番号	項目	内容
1	P【計画】	教員間の議論を委員会等を通じて深める。
	D【行った活動】	定期的に委員会を開催し、委員会の所管事案について対応すると共に、教員間の議論を通じて共通認識を図る。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	3月15日現在 教務委員会 25回開催 総務企画委員会 19回開催 学生委員会 21回開催 寮務委員会 20回開催 専攻科委員会 15回開催 等 主要な委員会については定期的に開催し、議論を行った。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度以降についても同様に議論を深めていく。

(d) 自己評価委員会の責任体制の構築と議論、フィードバックの必要性

番号	項目	内容
1	P【計画】	自己点検・評価委員会の責任体制の構築及びフィードバックを行う。
	D【行った活動】	校長を委員長とし、自己点検・評価委員会の体制強化を実施する。 自己点検・評価委員会において、各責任者からブリーフィングを実施し、フィードバックを行うとともに、責任の明確化を行う。 自己点検・評価委員長が自己点検の総括を行う。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	校長を委員長とし、自己点検・評価委員会の体制強化を行った。 自己点検・評価委員会において、各委員から所管している事項についてのブリーフィングを行い、フィードバックおよび責任の明確化を実施した。 委員長による自己点検の総括を行った。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	自己点検・評価委員会の責任体制の妥当性確認および自己点検の結果について、各部署、各委員会にてフィードバックを行っていく。

(e) 自己評価書の詳細版のわかりやすい工夫（構成、文言等）

番号	項目	内容
	P【計画】	自己点検・評価報告書の詳細版の構成について、本校のミッションベースにて評価項目を整理する。 また、外部の方が分かりやすい文章表現になるように文言等を工夫する。

1	D【行った活動】	自己点検・評価報告書の詳細版について、本校のミッション、目標ベースにて評価項目を整理し、また、評価項目が重複しないように工夫した。 文章表現についても外部の方でも分かりやすいように留意して作成した。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	自己点検・評価委員会にて、自己点検・評価報告書内容について、項目が整理されていること、文章表現が分かりやすいかについて確認した。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	令和4年度以降も自己点検・評価報告書の改善を行う。

(f) Sは100パーセントか、Sの意味づけをしっかりとつける

番号	項目	内容
1	P【計画】	自己点検・評価報告書の評語の意味について数値化する。
	D【行った活動】	評語（S、A、B、C）について数値化し、意味づけを行った。
	C【得られた成果および自己評価の理由】	数値化された評語に基づいて自己点検が行われている。
	自己評価	A：計画通りに進行している
	A【継続する取り組みと今後の課題（改善）への方針】	評語と数値の整合性があるかについて各責任者から意見をもらい、必要に応じて検討する。

第 2 部

令和 3 年度分 外部評価報告書

令和4年度外部評価委員会委員名簿

外部評価委員

役職名	氏 名
第1号委員 鹿児島大学 工学部長	きのした えいじ 木 下 英 二
第2号委員 霧島市教育委員会 教育委員	かわ の よしひろ 河 野 良 弘
第2号委員 始良市立蒲生中学校 校長	にし ゆかり 西 ゆかり
第3号委員 鹿児島県工業技術センター所長	くぼ あつし 久 保 敦
第4号委員 (株)九州タブチ 代表取締役社長 鹿児島高専テクノクラブ会長	つるがの み お 鶴ヶ野 未 央
第5号委員 南九州ケーブルテレビネット(株) 代表取締役社長	やまぐち とし き 山 口 俊 樹
第6号委員 霧島市長	なかしげ しんいち 中 重 真 一
第6号委員 (株)相良製作所 代表取締役社長 鹿児島高専同窓会長	さがら まさよし 相 良 正 典

鹿児島工業高等専門学校外部評価委員会規則（一部抜粋）

（組織）

第3条 委員会は、人格識見が高く、かつ、本校の発展に理解ある次の各号に掲げる学外者の中から、校長が委嘱した若干名の委員をもって組織する。

- (1) 大学、高等専門学校等の高等教育機関の教員及び経験者等
- (2) 本校の所在する地域の教育関係者
- (3) 地方自治体等研究機関の研究者等
- (4) 産業界の有識者
- (5) 報道機関の有識者
- (6) その他校長が必要と認める者

令和4年度外部評価委員会 鹿児島高専出席者名簿

会場参加者

	役職名	氏名
1	校長	氷室昭三
2	副校長(教務主事)	松田信彦
3	副校長(総務企画主事)	岸田一也
4	校長補佐(学生主事)	北園裕一
5	校長補佐(寮務主事)	室屋光宏
6	校長補佐(研究主事・専攻科長)	新田敦司
7	校長補佐(国際交流センター長)	徳永仁夫
8	校長補佐(地域共同テクノセンター長)	武田和大
9	総務企画主事補	今村成明
10	事務部長	深見清治
11	総務課長	平野秀二
12	学生課長	浦口健一
13	総務課長補佐	中村浩太郎

オンライン参加者

	役職名	氏名
1	学科長(機械工学科)	田畑隆英
2	学科長(電気電子工学科)	井手輝二
3	学科長(電子制御工学科)	島名賢児
4	学科長(情報工学科)	玉利陽三
5	学科長(都市環境デザイン工学科)	山田真義
6	学科長(一般教育科)	篠原学

令和4年度鹿児島工業高等専門学校外部評価実施要領

1. 趣旨

鹿児島工業高等専門学校の自己点検・評価について、外部の有識者により本校の教育・研究活動等の評価、助言を受ける。

2. 評価方法

外部評価は、鹿児島工業高等専門学校の自己点検・評価報告書等に基づき、教育・研究活動等について行う。

委員会終了後、各委員に外部評価結果について、報告書の提出を依頼する。

3. 外部評価委員

- | | |
|------------|--------------------------------|
| (1) 木下 英二 | 鹿児島大学 工学部長 |
| (2) 河野 良弘 | 霧島市教育委員会 教育委員 |
| (3) 西 ゆかり | 始良市立蒲生中学校 校長 |
| (4) 久保 敦 | 鹿児島県工業技術センター所長 |
| (5) 鶴ヶ野 未央 | 鹿児島高専テクノクラブ会長 (株)九州タブチ 代表取締役社長 |
| (6) 山口 俊樹 | 南九州ケーブルテレビネット(株) 代表取締役社長 |
| (7) 中重 真一 | 霧島市長 |
| (8) 相良 正典 | 鹿児島高専同窓会長 (株)相良製作所 代表取締役社長 |

4. 外部評価日時

令和4年6月21日(火) 14:00~16:45

鹿児島工業高等専門学校 大会議室(管理棟2階)

5. 事前配付資料

- (1) 令和3年度 自己点検・評価報告書
- (2) 令和3年度 学校要覧

6. 次第

- (1) 開会
- (2) 校長挨拶
- (3) 委員及び本校出席者の紹介
- (4) 委員長選出
- (5) 自己点検・評価報告書の説明
- (6) 質疑応答
- (7) 外部評価委員打合せ
- (8) 講評及び閉会

鹿児島工業高等専門学校外部評価委員会規則

(設置)

第1条 鹿児島工業高等専門学校（以下「本校」という。）に外部評価委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(目的)

第2条 委員会は、本校が行った自己点検・評価結果等について検証を行い、本校の教育・研究等の改善に資することを目的とする。

(組織)

第3条 委員会は、人格識見が高く、かつ、本校の発展に理解ある次の各号に掲げる学外者の中から、校長が委嘱した若干名の委員をもって組織する。

- (1) 大学、高等専門学校等の高等教育機関の教員及び経験者等
- (2) 本校の所在する地域の教育関係者
- (3) 地方自治体等研究機関の研究者等
- (4) 産業界の有識者
- (5) 報道機関の有識者
- (6) その他校長が必要と認める者

(委員の委嘱)

第4条 委員の委嘱は、外部評価委員会の開催に合わせて、必要な期間行うものとする。

(委員長)

第5条 委員会に委員長を置き、委員の互選により選出する。

2 委員長は委員会を召集し、その議長となる。

(報告書と公開)

第6条 外部評価を行ったときは、報告書を作成し、公開するものとする。

(運営)

第7条 委員会の運営については自己点検・評価委員会が行う。

附 則

- 1 この規則は、平成16年5月21日から施行する。
- 2 この規則施行後、最初に第3条に規定する委員となる者の任期は、第5条の規定にかかわらず、平成18年3月31日までとする。
- 3 鹿児島工業高等専門学校と有識者との懇談会要項は、廃止する。

附 則

この規則は、平成22年4月1日から施行する。

外部評価委員会議事録（一部要約）

開会～校長挨拶

<氷室校長>

本日はお忙しい中、外部評価委員会にご出席賜わりまして誠にありがとうございます。最初に本校の状況等について、少しでも説明したいと思います。

まず新型コロナウイルス感染関係ですが、鹿児島県の感染者数数の推移を図1に示すように5月中旬から段々と減少傾向にあります。本校の昨年4月からの感染者数の推移を図2に示しますが、2月に急に増加しました。これは、学年末試験後の気のゆるみのためか、学生がたくさん感染してしまいました。次は5月の連休明けに増加してしまいましたが、全国的に行動制限がなかったためと思われる。

基本的にはコロナウイルス感染症の影響下にあっても、本校では学生に寄り添い、学生が安心して、また十分納得した形で学修できるように対応を講じると同時に、十分な感染対策を講じた上での面接授業の実施など学修者本位の教育活動の実施と、新型コロナウイルス感染症の拡大防止に向けた取組の両立を図っています。



図1 鹿児島県の新型コロナウイルス感染者の推移

<https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/data/pref/kagoshima.html>

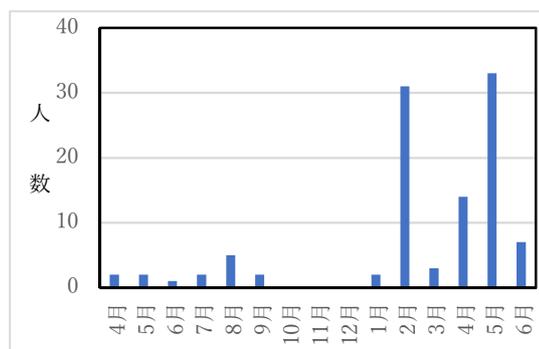


図2 鹿児島高専の新型コロナウイルス感染者数の推移（R3年度から）

新しい委員の方もおられるので、高専のことについて話しをしておきたいと思います。高専というのは、深く専門の学芸を教授し、職業に必要な能力を育成するという目的の下に誕生した学校です。

全国には、現在高専は57校ありますが、国立は51校、公立が3校、私立が3校です。

卒業すると、卒業生には準学士の称号が与えられます。卒業後、就職する者60%、専攻科へ行く者16%、あるいは大学に編入学する者32%となっています。ちなみに、専攻科から66%が就職し、34%が大学院へ進学しています。

今、15才人口が段々減ってきて、高専も入学者が少なくなっていくのではないかと思います。意外と人気が高く、四国の徳島に「神山まると高専」が2023年4月に開校予定です。それから滋賀県に高専がなかったのですが、2027年に県立高専ができることになっており、高専の拡充がはじまったといえるでしょう。

鹿児島高専の沿革ですが、昭和38年に二

期校として、機械工学科 2 学級と電気工学科 1 学級の 3 学級で開校しました。昭和 42 年に土木工学科を増設し、さらに 61 年には情報工学科を増設しました。そして平成 3 年になって、機械工学科の 2 学級のうち 1 学級を電子制御工学科に改組し、平成 12 年に専攻科を設置しました。その後、平成 15 年に電気工学科を電気電子工学科に改称し、平成 16 年には独立行政法人になりました。

さらに平成 22 年に土木工学科を都市環境デザイン工学科に改称し、平成 27 年には土木工学専攻を建設工学専攻に改称しました。

次に入学者数の推移ですが、減少傾向だったところ、昨年度少しこれを盛り返しました。それから卒業生について、平成 16 年に独立行政法人になり、それ以降は就職者数と進学者数の割合は、ほぼ定常的な状態になっています。就職の 5 割弱が製造業に就いているという特徴があるかと思えます。

今後の高専について、去年 5 月に自由民主党文部科学部会高等専門学校小委員会から「令和 4 年度予算における高専の機能の更なる高度化に向けた決議」が出され、高専の高度化を一層加速するため、五つのことが書いてあります。

一つ目は、「多数の技術やノウハウを活かして積極的に貢献するため、ソフト・ハード両面の教育の高度化を一層進め、AI・IT 技術を駆使して、DX を実現し、様々な社会課題を解決できる人材を育成すること」と、このようなことが書いてあります。

高専生の優れた発想力、創造力を形にするためのアントレプレイナー教育の充実などを進め、活力ある社会の実現に貢献する。

二つ目としては、「SDGs の理念を踏まえ、

カーボンニュートラル、再生可能エネルギー、サイバーセキュリティなどの *Society 5.0* の時代に必要とされる分野の教育・研究を積極的に推進する」。それから、小中学校への *STEAM* 教育のことも書かれております。

三つ目は「国際化」です。外なる国際化と内なる国際化を一層進めていくといったところが書かれてあります。

四つ目は、老朽化したところが一様に目立つようになってきたので、これを少し整備していく予算を、きちんと確保するといったところが書いてあります。

五つ目は、商船、帆船に関する船のことが書いてあります。

また、岸田首相になって教育未来創造会議を閣議決定で設置しておりまして、今ようやく第一次の策定がなされたところでございます。この 5 月に出ておりますが、「我が国の未来をけん引する大学等と社会の在り方について」ということで、まとめられた中には、高専は、「産業界ニーズを踏まえた機能強化」、これがまた新たなキーワードでございます。デジタル等の成長分野の定員増など、産業界の地域のニーズを踏まえた高専や専攻科の機能強化を図る「高度化」と「機能強化」という言葉が今、非常に言われているところでございます。

それから、今年の 1 月 3 日の読売新聞オンラインを見ると、政府は半導体の国内生産能力を高めるために、九州 8 高専において、半導体の製造や開発に関する教育課程を新たに盛り込むなどして、専門人材育成に取り組むという報道がありました。ここに九州 8 高専と書いてありますが、沖縄を含めて 9 高専で取り組むことになっておりまして、川上から川下までと書いてありま

すが、材料から応用まで、全ての分野、高専でそのような技術者を育てていこうということでございます。色々な九州地域の産業界など、大学、高専含めた中で、そのような半導体人材育成をやっていくということでございます。基本的には、熊本高専と佐世保高専がリードしてやっていく予定になっております。

さて、令和4年度の予算でございますが、運営費交付金625億円と言われました。この金額というのは、東京大学ほどは多くはないのですが、京都大学よりは、たくさんいただいているという状況であります。言われているのは、「高専教育の高度化」、「国際化の推進」、「設備の整備」でございます。

我々は、学生が「教えられる」から「自ら学ぶ」教育への転換を図り、学生一人ひとりが自らの意思で将来のキャリアを描き、ありたい姿になるために挑戦・成長できる環境と機会を創出しなければならないと思っております

そのために、本校では、*Well-being*を志向する高専教育を展開したいということで、昨年度から取り組んでおります。学生が何をなすべきかを考え、実行するポジティブエデュケーションを導入していきたいということであります。学生自身の *Well-being* を実現・向上するとともに、社会の *Well-being* 実現・向上に貢献するシステムをつくり上げていきたいということです。

「よく生きる」、「よく勉強する」といったところに視点をおいて、教育を展開しようということです。よく、成功するとそこに幸せがあるのではないかと考えて生きてきましたが、なかなかそういう幸せは感じたことがあまりないので。

むしろ今が幸せ・充実感にあふれてやっているからこそ、そこに成功が生まれてくると考えた方が良くはないかと思いません。このような考えを展開できたらいいかなと思っているところです。こういったことを基に、鹿児島高専がNECやKTCの皆様と一緒に地域のデジタル化といいますか、国はデジタル田園都市国家構想と言っていますが、そういったものが実現できないかなと思っております。

サイバーセキュリティーやクラウドネットワーク、生体認証、ハイウェア、こういったことに関する取り組みなど、これらはすでにやっていますが、県警とサイバーボランティアの活動もやっております。先ほど出てきた半導体人材育成、こういった取り組みをやることで、この地域をスマートシティ化し、防災レジリエンスの確保やスマートヘルスケア、こういったものを目指して *Well-being* な地域を実現し、この地域を持続可能都市として、発展させていければいいと思っております。

STEAM 教育については教育委員会との連携した取り組みで、小学校、中学校へ *STEAM* 教育を展開していきたいと思っております。

Google は、「世界で最も幸せで、生産性の高い職場をつくる」と言っています。我々は、「世界で最も幸せで、学生が自ら学び大きく成長できる場をつくること」、このような高専にしていきたいと思えます。

本日はどうぞよろしくお願いいたします。

自己点検・評価報告書の説明

<今村総務企画主事補>

それでは、「令和3年度自己点検・評価報告書」について説明させていただきます。まず、「概要」についてです。本校では国立高等専門学校機構の第4期中期計画をベースに、年度計画および具体的なPlanを策定し、それを実現すべく、Do、Check、Actionを行っております。また、その活動状況について、年度ごとに自己点検・評価委員会及び外部評価委員会を開催し、自己点検・評価を行います。

令和3年度は、新たに総務企画委員会を設置し、自己点検・評価および外部評価を担当することとし、自己点検・評価委員会の実施方法や自己点検評価委員会及び外部評価委員会の実施時期の見直し等、効果的な自己点検の在り方を検討し実施しました。

また、「自己点検・評価報告書」については、「簡易版」を新たに各部署からの主報告事項の取り纏めとして作成し、「詳細版」については、「分類」を導入し、ミッションと各評価項目の関連が分かる形に再編いたしました。

本校の自己点検・評価体制について説明いたします。教務委員会、総務企画委員会、各部署においてPDCAサイクルを回し、その結果について、総務企画委員会の方で取りまとめを行います。そして、3月に校長を委員長とした自己点検評価委員会にて、点検・評価を行います。それをもとに本日の外部評価委員会にて評価を行う体制となっております。

「直近の自己点検・評価の課題と対応」について説明します。令和元年度に機関別認証評価、監事監査、外部評価を受審しま

して、主な指摘事項に対しまして、全て改善するよう継続して取り組みを行っております。

「機関別認証評価」の指摘事項に関しては、以下のようになっております。「自己点検・評価、研究活動、地域貢献活動に関する規定の必要性」の指摘につきましては、規定を策定しました。

「成績資料の保管状況、成績評価方法の妥当性の検証」の指摘に関しましては、教務委員会の方で調査を行っております。

「満足度等を把握するアンケートの必要性」の指摘については、教務委員会、学生委員会で対応し、卒業生アンケート、学生満足度アンケートを毎年実施しております。

「監事監査」における指摘事項に関しては、以下のようになっております。「キャリア教育および進路指導における学校全体としての取り組みの必要性」の指摘に関しましては、キャリア支援室を設置しております。「相互授業参観の改善の必要性」の指摘に関しましては、総務企画委員会に対応し、公開授業を実施しております。

「退学率、留年率の改善」の指摘に関しましては、教務委員会、総務企画委員会に対応し、成績会議等で検討しており、また各学科、科においてPDCAを実施し、対応しております。

「外部評価委員会」の指摘事項に関しましては、以下のようにやっております。

「PDCAに基づいた評価の必要性」の指摘に関しましては、自己点検・評価委員会の規則の改正を行いました。また、総務企画委員会を設置しております。「イノベーション人材育成への取り組みについて」の

指摘に関しましては、1年生混合クラスを導入し、新カリキュラムを編成しております。新カリキュラムにおきましては、PBLとしまして、創作活動、学科横断的な実習といたしまして、工学基礎実習を導入しております。

「企業に対する満足度調査の実施と調査結果の検証」についての指摘に関しましては、総務企画委員会で対応し、学生係、企画係で3年ごとに実施すると決定しております。今年度を初年度としております。

これらの取り組みに関しまして、「令和3年度の自己点検・評価報告書」ですが、「詳細版」と「簡易版」を作成しております。

「詳細版」は、本校のミッションをベースとした自己点検・評価を記載しております。先ほどの過年度の各評価機関からの指摘されている評価基準を主として構成されておきまして、本年度はドキュメント形式の報告書を作成しました。

「簡易版」につきましては、各部署ごとの自己点検・評価を記載しており、各部署の主要な取り組みのPDCAによる構成となっております。自己点検・評価委員会での報資資料として用いまして、自己点検・評価を行いました。教務主事の所管する教務委員会をはじめとして、19の部署の自己点検・評価を実施し、最後に委員長である校長からの総括を行っております。各部署の取り組みと責任が見えるような形になっております。

「自己点検・評価報告書」の「詳細版と簡易版の関連」は、次のようになっております。詳細版につきましては、先ほど説明しましたように、ミッションベースの項目

になっております。この各項目につきまして、各部署が複数関係しており、各部署の取り組みが見えにくくなっております。それに対しまして「簡易版」は、各部署の主要な取り組みが分かるように構成されております。各部署の所管する事項、主なもの3つに対しましてPDCAを記載し、それぞれの項目に対して、自己評価を行っております。最後に、これらの報告に対しまして、校長による「自己点検・評価の総括」となっております。こちらは、私から説明するよりも氷室校長から説明していただきたいと思っております。よろしく申し上げます。

<氷室校長>

自己点検・評価の総括についてということですが、本校の課題として、そこにありますように、「*Society 5.0* 実現に向けた方策」、「国際的魅力ある鹿児島高専の実現」、「社会的な問題解決に対し、新たな価値を創出できるようにすること」、「地方創生への貢献」、「変化に柔軟に対応できる組織の実現」、こういったことがあげられると思っております。そのような中で中期的な課題（「多様かつ優れた教員の確保」、「教育の質向上と改善」、「学生支援、生活支援」、「国際性の涵養」、「地域貢献」、「財政問題への対応」など）、それから「短期的な課題」（「コロナ禍への対応」、「教育課程の再編」、「科研費や外部資金の獲得」、「情報の発信」、「留年、退学への対策」、「教員評価の透明性」、「情報セキュリティ対策の強化」、「研究活動の活性化」など）をあげております。

令和元年度にたくさんの外部からのご指摘がございました。これら課題を含めた上で令和2年度には、大概のことは解決でき

たように私は思っております、令和3年度には、さらにそれを進めた形で鹿児島高専を魅力的なものにするために取り組んでおります。

現在、具体的に取り組んでいる内容として、科学技術イノベーション人材育成を図るために、社会実装に向けた実践的な学習を強化する。リベラルアーツを強化する。

「開発型の研究力を強化する。分野横断的能力を育成する。こういったところには、例えば混合学級を今年度から導入しております。このような取組をやっておりますし、教育科課程の再編、企業との共同研究などをやっております。魅力ある、学生が、よりよく学校生活を送っていけるような仕組みづくりに今、取り組んでいるところでございます。以上です。

<今村総務企画主事補>

続きまして、「令和2年度の外部評価委員会の指摘事項への対応」として、以下のものがあります。

「ミッションに対する評価項目の成熟化」、再編された「自己点検・評価報告書詳細版」により、ミッションに対する評価項目が整理されました。新たな「自己点検・評価報告書 簡易版」で各部署の重点的な取り組みが明確化されております。

「数値目標の評価と具体化」として、詳細版において評価を行った60項目のうち、数値目標は1項目のみでありました。この原因につきましては、項目によっては数値目標を立てづらい内容も多かったということになります。

「教員間の議論を深める」との指摘に対しましては、校長を委員長とし、自己点

検・評価委員会の体制強化を行いました。自己点検・評価委員会において、各委員から所管している事項についてのブリーフィングを行い、フィードバックおよび責任の明確化を実施しました。委員長による自己点検の総括を行っております。

「自己評価委員会の責任体制の構築と議論、フィードバックの必要性」との指摘に対しましては、校長を委員長とし、自己点検・評価委員会の体制強化を行いました。自己点検・評価委員会において、各委員から所管している事項についてのブリーフィングを行い、フィードバックおよび責任の明確化を実施しました。委員長による自己点検の総括を行っております。

「自己評価書の詳細版のわかりやすい工夫、構成、文言等」については、自己点検・評価委員会において、自己点検・評価報告書の内容について項目が整理されていること、文章表現が分かりやすいかについて確認しております。

「Sは100パーセントか、Sの意味づけをしっかりとつける」との指摘につきましては、評語、S、A、B、Cについて数値化し、意味づけを行っております。外部評価委員の方々から事前にご質問をいただいております。多数のご質問、ありがとうございました。本日の資料、事前質問への回答に一覧にしてまとめておりますので、そちらをご確認いただきたいと思います。説明は、省かせていただきます。

「自己点検・評価」をまとめたいと思います。評価審査機関からの指摘事項、課題への対応が出来ました。自己点検・評価委員会の委員長を校長とする規則改正を行い、体制強化を行いました。また自己点

検・評価およびP D C Aに対する常設の総務企画委員会を設置しました。

自己点・評価報告書、詳細版のミッションベースの再編を行い、ドキュメント形式で作成しました。自己点検・評価報告書、簡易版を部署ごとのP D C A報告書として編成し、責任・対応の見える化を行うと共に自己点検・評価委員会にて活用し、各部署の責任者に校長から助言を行いました。以上が説明となります。

各委員からの質問・意見

＜木下議長＞

今まで説明された事項や、事前配付資料等、その他につきまして、委員の方々から質問、意見をいただきたいと思っております。それを受けて、鹿児島高専の方から回答や意見を伺いたいと思っております。例年どおり、各委員が3分程度でご質問をいただき、それに高専側が回答するという形式で進行していきたいと考えております。

私は最後に質問させていただくこととしまして、順番としまして、外部評価委員会規則第3条規定の順にお願いいたします。

＜河野委員＞

全般についてのコメントという形で示されたわけですが、要点だけでも少し話をさせていただきたいと思っております。初めに令和3年度は、前年度の外部評価委員会の答申による自己点検・評価委員会の体制の強化が行われて、校長を委員長とした規則改正を行ない、また、新たに総務企画委員会を設置し、実行、点検、評価及び外部評価を担

当することとし、自己点検・評価委員会の実施方法や自己点検委員会及び外部評価委員会の実施時期の見直しなど、効果的な自己点検のあり方が検討されているということです。

2番目としましては、「自己点検・評価報告書」については「簡易版」があり、各部署から主報告事項のとりまとめとして作成し、「詳細版」については、分類を導入し、ミッションと各評価項目の関連が分かる形に再編されています。これまでの自己点検・評価に比べて、革新的な新たな発想で、「自己点検・評価報告書」の構成や内容が非常に分かり易くなっています。

それから3番目ですが、「簡易版」の方は、各部署からの報告事項としてまとめられているため、学校全般の管理運営状況がよく理解できます。

4番目は、自己評価基準がS、A、B、C、Dと5段階で、主に計画の進行状況をもとに評価されています。P D C Aの評価で大事なことは、計画の進行ではなく、目標値などの達成度状況であります。中には数値目標の達成による評価も行われていますが、計画の進行での評価も多々あります。そのため自己点検の評価点が主観的で全般的に高い評価になっています。今後、達成度の成果を客観的に求めるための評価法の工夫、これが必要であるのではないかと感じています。

5番目は、自己点検・評価について、学校関係者しか分からないような語句の使用があるわけですが、学外者にわかりづらい語句については、注釈をつけていただきますと、その内容が理解しやすくなるのではないかとということで、次回から、そのように検

討いただければと思います。

<氷室校長>

確かに若干主観的になっている点は気はしていたのですが、もう少し客観的に評価できるような形、成果で評価をできるような形にもっていきたいと思います。

それから語句の方で配慮が足りないところがございまして、大変申し訳なく思っております。以後、気を付けて、きちんと分かるような表現を使っていきたいと思います。

<西委員>

中学校の校長という立場から、鹿児島高専を受験したいという子どもたち向けという事で、いくつかお伺いしたいのですが、バーチャルオープンキャンパスを実施されていて、閲覧数が意外に伸びていません。私もこの委員を引き受けさせていただいてから、何回か拝見したのですが、誰に向けてどれくらいの閲覧数を狙って作成されたのかということと、それから女子学生は増えたのですが、男子が減っているということでしたので、その要因が何か分かれば教えていただけたらと思います。

私たちの方からのイメージでいいますと、やはり高専は難しいというイメージです。ただ簡単に入りますと、今度は留年してしまう。今、教育内容を見せさせていただいたのですが、やはりここについていけない子供たちが目指すということになると、その後がまた大変だということもありますので、毎年200人以上の学生さんが入学していらっしゃると思いますので、そのどこを目指しているのか、もっと増やしたいのか、そこのところをお伺いできたらと思います。

本校の生徒や、市内の生徒たちも高専に入学を希望する生徒がいるのですが、いつから目指し始めたかというアンケートをとると、やはり少し遅い生徒がおりまして、中3になってから高専を知ったという子もいます。もっと早い小学生の段階などで、興味をもたせるような取り組みをするおつもりがあるのかということをお聞きしたいと思います。ただ今、小中学生向けの何かアピールをされるのも、どちらの学校もやっているらっしゃいます。その計画も教えていただけたらと思います。

今、小中学校で凄く問題になっていることは、特性のある子どもが非常に増えていまして、始良、霧島、伊佐、この地区でも中学生で1,500人くらいいるのです。そういう生徒さんが入学されたときの精神面や安全面に対する配慮など、特性ある生徒とどのように関わっているかということがありましたら、教えていただけたらと思います。

最後に、感染症対策のことでお聞きしたいことがありまして、先日も全学校休校という感じでされているのですが、その基準等ありましたら、教えていただけたらと思います。以上です。

<松田教務主事>

この点につきましては、教務主事の松田の方から回答させていただきます。毎年、夏休みに1日体験入学、いわゆるオープンキャンパスを開催しているのですが、昨年度はコロナの影響もありまして、6月の段階で中止を決定いたしました。そのときに1日体験入学の代わりにバーチャルオープンキャンパスの作成をしたので、本来は、誰に

向けて、どのような形でということをしつかりと計画した上での構築が望ましいのではあるのですが、そこまでの余裕がなかったのが実情でした。

本校に来ていただくはずの中学生に見てもらいたいという思いで作成しているのですが、急ごしらえのところもあり、「ここにバーチャルオープンキャンパスがありますよ」というPRが十分にできていなかった事が反省点でございます。現実に見てもらいたい中学生の皆様には、ホームページがあって、ここでオープンキャンパスをやっているところが十分に伝わっていなかったのかなということを反省しております。今年は、学校訪問をする際に、ホームページのPRもあわせて行っております。今後は、しっかりとPRも含めて見てもらえるような取り組みをしていきたいと思っております。

高専の中で働いている教員には「高専は難しい」という意識はないのですが、実際、中学校訪問の際には、確かにそのような声を聞いております。実際、入試の倍率が下がってくると、学力に不安がある生徒が合格をしまい、それが結果として留年などにつながっていく懸念がありますので、できるだけ倍率は高いに越したことはないとは考えております。

ただ、基本的に留年対策は、本校に限らず全国の高専の喫緊の課題ですので、本校としても学力に不安がある生徒が入ってきたとしても、しっかり指導していけるような体制を、今後ますます構築をしていきたいと考えているところでございます。

PRに関しては、小中学生向けの公開講座や実験教室を、出来るだけ積極的に開催しております。コロナの関係もあり、ここ

数年は思うように出来ていない部分もあるのですが、できるだけ中学生だけではなく、小学生のうちを高専を知っていただく取り組みをしていきたいと思っております。

入学者アンケートを見ても、比較的、「小学校高学年や中学校1年生ぐらいに高専を知った」、あるいは「高専を目指そうと思った」と回答している学生が多いので、そういった生徒をもっともっと増やしていきたいと思っております。

現状としては入学者アンケートからいきますと、中学2年生、3年生で選んだという学生が半数を占めます、結局半分ぐらいは、小学生のときから高専をという目指した学生もいますので、そこについては、もっと早い段階からPRを展開していきたいと思っております。

「特性のある学生」の件です。経験も踏まえて申し上げますと、確かに一定数、本校にもそのような学生がおります。基本的には、そのような特性がみられたときには、担任と何でも学生相談室のカウンセラーやスクールソーシャルワーカーが、すぐに連携をして、どのように対応していくかを検討していきます。特に成績面に関しては、そのような特性のある学生に対して、サポートチームをつくって、サポートしていくという規定はあるのですが、まだ弾力的に活用できていない部分もありますので、その辺はもっと柔軟に対応していきたいと思っております。基本的には相談室が中心となり、学生のサポートにあたっていることが現状となります。

「感染症対策」については5月に休校し、2週間の遠隔授業を行いました。特に基準があったわけではなくて、本校の場合は、学

生の半数が寮生でありまして、感染や濃厚接触になった学生は寮の中で、別の部屋で隔離する状況をつくるのですが、感染が急に増え、隔離する部屋が確保できなくなり、濃厚接触の学生とそうでない学生を一緒の部屋で面倒見なくてはならない状況になったところで、残念ではありましたが寮を1回閉じて、全員を帰省をさせました。その結果、自然と学校自体が休校になり、遠隔授業という形になりました。今後は、どのような基準で、何人が感染したら休校にするなど、考えていかなければならないのかもしれませんが、今のところはケースバイケースという形で対応している状況であり、基本的にはリスク管理室会議を開いて判断をしていくこととなります。

「女子学生」の件について。今年に関しては、入学者は去年の1.4倍と非常に多かったのですが、志願者は、去年とほとんど変わっていないのです。たまたま今年は優秀な女子生徒さんが受けてくれたのではないかと認識です。志願者自体は増えておらず、本当は志願者を増やさなければいけないのですが、結果として入試で落ちる女子生徒がほとんどいなかったために、入学者増につながっていると思います。

志願者全体を見ると、男子が減ったというよりは、全体として昨年と比較すると50人近く受験生が減っています。女子生徒は志願者自体は変わっていないので、男子学生が減ったということはいえるかと思えます。今後しっかり1年生の話し等を聞きながら、どのように高専を進路で選んでいたのかというところを踏まえて、検討していきたいと思っております。

<久保委員>

県工業技術センターは、研究開発と技術支援を通して、県内企業の技術力向上がミッションになっておりまして、最近2か年で、強度試験機、走査型電子プローブ顕微鏡、ナノ粒子解析装置など、他にも鍛造に関するシミュレーションを行う、あるいはプレスを打つ機械など、様々な機械が入っております。こうした機械も、是非、科研費など、一緒に提案できたらいいのではと思っております。

学生指導のことですが、昨年度の実績を書かせていただいておりますが、15名の学生のインターンシップ、学生指導をさせていただいております。内容は、表面の粗さ、組織観察、強度と結晶構造・元素分析に関することなのですが、割と先端的な機械がありますので、高専の先生方と一緒に研究に関わる指導ということに連携できたらと思います。工業センターでも研究開発推進会議をおこなっておりまして、地域共同テクノセンター長の武田先生に当センターの研究開発推進委員になっていただいて、大変感謝しております。1問だけ質問させていただきたいと思っております。

詳細版の3.1-C企業に対する満足度調査を今年度から始めるということだったのですが、どのような企業を対象に満足度調査したいのか教えていただきたいということと、我々も毎年度、共同研究、受託研究を行っている対象企業に満足度調査を実施しております。要は、「成果はできましたか」、「また、やりたいですか」などといった質問で満足度を調査していますが、高専は、どのような感じの調査になるのか。

また共同研究や受託研究以外でも、セン

ターの技術支援を、いわゆる成績資料や依頼分析、試験者、職員の対応などについても、調査しております。こういった企業に対するアンケートをどのように、今後利用していけるのか、教えていただければと思います。

<今村総務企画主事補>

学生の満足度調査を行う企業に関しては、基本的に学生が多く行っている企業に対してアンケートを行おうと思っています。内容としては、学生が入ってからの企業に対する満足度ということで、どのような点が強みで、どのような点が弱いかを調査したい。例えば過去の調査でいうと、「英語の力が弱い」という指摘は、よく見受けられました。そのような項目に対してアンケートを取り、本校にフィードバックし、弱いところ、例えば英語力に関しては、英語教育を強化していく。強みに関しては、より伸ばしていく方法で、教育を改善していこうと考えています。

<鶴ヶ野委員>

過去の高専機構が定めていた自己点検・評価の仕組みから、鹿児島高専として提唱する「ビジョン、ミッション」に基づいて、「何を指すのか・どのようにしたいのか」ということをベースにした評価・点検に移行して2年目になります。いわゆるPDCAが2回ほど、回ったイメージで聞いていましたが、ミッションと活動の関連性みたいなものが、よく理解できるようになったと思います。以前は機構が定めたもので評価していたので、言っていることと、やっていることが随分乖離しているイメージが

ありました。少なくともこの1、2年は、ミッションに関連付けられた活動にするために、様々な評価方法や項目を見直されるなど、自己評価をどのようにやっていくのかということを深く議論されてきたのだなと感じます。

この2年間の成果というのは、非常に分かり易くなりました。外部の人間が聞いても、「こういうことを目指しながら、こういうことをやっているのだな」と非常に方法が分かり易くなったなということと同時に、校長先生が学校として目指しているものが、教員1人1人に共有・共感され、PDCAが回り始めたという印象です。

一般企業でもそうなのですが、PDCAを平面で回し、課題が出てから課題つぶしに終始している状況があります。本来は、スパイラルアップし、1年また1年とレベルを上げていきたいところなのですが、平面で考えると、なかなか上へスパイラルしていかないという状態に陥りがちになります。

教育現場で、定量的に評価するというのは難しいことは百も承知で申し上げますが、可能なものはしっかり定量的に評価してもらいたいと思います。定量的に評価するという意味も、2つの視点があるように思います。

1つは、相対評価のように全国に高専があるので、そういったところと数値で評価することや、あるいは過年度からどのように良くなってきたのか、どう変化したなどといった傾向評価というものもある。単年度だけ見て「こうなりました」ということが、本当に過年度から見たら「上を向いているのか、下を向いているのか」というところまでを見ていくと、組織としての成長が

更に垣間見えるのではないかと考えます。定量的な評価の難しさあるとは思いますが、色々な項目において、こういった相対評価、あるいは過年度評価を含めてやっていると、新たな気付きや、やらなければいけないポイントが見えてくるのではないかと思います。

もう1点は、総花的だなというイメージがあります。今年の重点テーマは何だったのでしょうか？ 各科、それぞれ役割分担があり、それぞれのビジョン・ミッションに向けたテーマがあると思いますが、学校として重点的テーマがあったのか、本年度の拘りたい重点項目みたいなものがより鮮明に出てくると良いのではないのでしょうか。今年も感染症問題や、民間ではエネルギーや原材料の高騰、インフレや円安になるなど、大きく世の中が変化しています。それに対して学校も何かしらその影響を受ける変化点や、今までとは違う環境ということがあると思います。それに対してどのように対処して、どのようにアプローチして行くのか、そのような重点的なものがあったのかどうか、また意識もしなかったのかどうか、というところであります。

評価はあくまで過去やってきたことを評価する訳ですが、将来こうなるのではないかと、という未来予測含めて、自己点検をされると、次なるものが見えてくるのではないかと思います。

<氷室校長>

非常にPDC Aの我々のやり方に対する良いコメントをいただいたと思います。もちろんスパイラルアップしていくことは、非常に必要だと思います。いかに定量的に

やるかといったところなのですが、それぞれの項目について数値目標を立てて、その目標値に到達できているかというところは、きちんとやる必要があるのかなと思います。その辺りは、緩んでいたような気がします。

「今年度の重点項目」なのですが、一応は立てておきまして、表に出なかったところがあるのですが、先ほど「短期的な課題」といったところですか。例えば、昨年度でしたら、「コロナ禍の対応、教育課程の再編、科研費、外部資金の獲得、情報の発信、留年、退学への対策、教員評価の透明性、情報セキュリティ対策の強化、研究活動の活性化」、そのようなところに、3年間重きをおいて取り組んでいましたが、その部分が少し表に出なかったことが残念かなと思います。今後、改善していきたいと思います。

<山口委員>

いただきました報告書を毎年、毎回進化していくところをみて、本当に素晴らしいと思っています。最初に、成果の指標として最も重要な数値で表せる指標を設定したら、何が考えられますか、ということですか。例えば株式会社で言いますと、収入から支出を引いた利益という数値で、1年間の活動の成果とすることができるのですが、高専の成果が1年間の利益であるわけではないことは、当然なのですが、何が考えられるか、ということが質問です。ただし、数値で表せる指標、とても大事だということは、私も会社を経営している際に、決算書に出ない数値で表せない指標がとても大事だと思っています。

次は、意見なのですが、高専についてどのように思うかということ。私の娘が中学2

年の女の子で、高専についてどのように思うかということ、一中学生の意見として聞いてみました。「高専のイメージは」と聞くと、「難しそう」、「高専に何があったら行きたい」と聞くと、「ゴロゴロできる場所、イケメンがたくさんいたら行きたい。T i k T o k部をやってみたい」などと言っていました。結構アピールできると思うところは、制服ではなく、私服です。あと、「世界各地に海外留学できたらいい」と言っていました。

広報に関することなのですが、友達同士のやり取りはラインの一択らしいです。娘も深夜までラインを使って友達とやりとりするので、私の家では10時になったらW i - F i等、データ通信を切っています。ラインのオープンチャットを使うといいらしいです。

鹿児島高専のホームページやY o u T u b eを見させていただいたのですが、とても良く、斬新な印象的ホームページだと思いました。ただし中学生は、ホームページやY o u T u b eには中々行かないので、ラインから誘導する方がいいのかなと思いました。学校説明会で各地の学校に行かれていますと思うのですが、そういうところでも、中学生がラインでつながると継続的に情報交換ができるようです。

最後に質問ですが、毎年、凄い進化しているので、とても素晴らしい取り組みだと思っています。こういった取り組みというのは、教職員や学生に周知徹底・浸透させるために、どのようなことに注意して取り組んでいるかということ、是非、教えていただきたいと思いました。以上です。

<松田教務主事>

成果、指標について4つの教育到達目標があり、その4つの教育到達目標に到達できているかどうかということは、1番大事なポイントであると思っています。

毎年、卒業生に対し、4つの項目について自分が到達したと思うかどうか、アンケートをとっています。よく他の高専からも言われるのですが、本校4つ目の到達目標の「相手の立場に立って物を考える技術者」というのは、なかなか他ではありません。卒業生アンケートをここ数年見ても、他の3つは大体、「到達した」、あるいは「概ね到達している」など、ポジティブな意見が大体65パーセントぐらいでとどまっています。それに対して、4つ目の「相手の立場に立って」、ということに関して言えば、去年は86パーセントぐらいの学生が自分は「到達している」と回答しています。学生はどこまで普段意識して生活しているのかは分かりませんが、その1項目だけは、学生に浸透しているということを感じています。

コロナ禍においても企業からの求人倍率は下がることなく、また大学からも非常に高い評価をいただいています。そのような人材をきちんと輩出できているということが、何よりも1番重要ではないかと思っています。そういったことが中学生、また中学生の保護者にも評価されて、志願倍率が上がってくるのが、より良い循環ではないかと思います。少子化の問題もあり、志願倍率が伸び悩みというところもあるので、今後どのようにPRをしていけるのか、ということが課題であると思っています。

<氷室校長>

取り組みを教職員に、どのように浸透させるかということですが、年度の挨拶で予告しておいて、年度が始まったときにきちっと方向性を出して、具体的な話しをしていくということがあります。例えば、今回の *Well-being* を志向する高専のあり方というのは、2年ぐらい前に始めるのですが、最初は *Well-being* という言葉すらほとんど浸透していないのです。どうするかといいますと、まず学内で *Well-being* の勉強会を立ち上げて、その中で教員に勉強してもらい、それを高専の中でどのように展開できるのかといったところを議論して、それを高めていった上で、ようやく今年度のカリキュラムの中に入れて生み出せる。そういう状況に持って行っております。色々な項目によってやり方が違うのですが、できるだけ皆さんが理解した上でやっていくという状況を作っているつもりでございます。

<中重委員>

高専と霧島市の関係は、所在する自治体ということで、評価する立場というよりも協力・提携して、色々と進めていく関係だと思っております。高専へのお願いごと、また今後の協力体制の確認という趣旨のものが多くなるかと思えます。

小中学校におけるネットセキュリティー・リテラシーの出前授業の実施において、大変な協力をいただいていることに感謝をしたいと思います。是非、令和4年の隼人中学校での実施をもとに他の市内の小中学校への訪問等も継続してお願いできればと思っております。ギガスクールが進んで、1人1台のタブレットという環境の中で、まだ

小中学校の現場においても、その活用について、しっかりと活用しきれていないところがあるのかなという気がいたします。

文科省が旗を振ってタブレットはそろったが、小規模校は、適切に使っているところもあれば、大規模校においては、なかなか活用できていない学校が多くあるようです。

今後そのような中で、タブレットまたギガスクールと、どのように向き合っていくのか、どのような形で活用していくか、そのようなところまで含めて高専と連携ができればと思っておりますので、ご協力をよろしくお願いいたします。

次に、高専、そして志學館大学、霧島市、三者で連携している「ニューライフカレッジ霧島 隼人学」についてですが、これは全国でもなかなか例を見ない取組です。令和3年度は「地域から私と世界を変える17章」をメインテーマにSDGsの17の行動についての学習を深めることができたと考えております。是非、この取組についても、今後とも継続してお願いしたいと思えます。

さて、私が自治体の立場としてお話ししなければならないことが、就職率のことなのですが、いま現在、高専の卒業生が霧島市内で、あるいは霧島市、鹿児島県内にどれぐらい就職しているかということが分かる部分があれば教えていただきたいということです。是非、大企業等に就職して県外に出た学生で、やっぱり地元に戻ってきたいという人についても、卒業生支援という形で協力いただけないかと思っております。

この6月議会で市外・県外の方への企業の雇用支援を提案しているところです。霧島市内の事業者が行う雇用のための広報や、

様々な活動に対する経費の助成を検討しています。併せて1度東京に出た方で、地元で働いてみたいが、どのようなところで働けるのか分からないというようなことで、そこでインターンをする場合の旅費や宿泊費に対して、個人にも助成をするような形で、霧島市では提案をしております。そういった情報を是非、卒業生で、戻ってきて働きたいという方々にはつないでいただいて、特にテクノクラブ等、そのような企業との結びつきがありますので、そのようなところを紹介しながら、「ここでインターンしてみませんか」とか、「霧島市が助成を行っているみたいですよ」というような協力をいただければ新卒だけではなく、高専の卒業生全般的にまた地元、ひいては鹿児島県での就職が進むのではないかと考えているところです。是非、協力をお願いいたします。

もう1つは、入学式に出て1番驚いたことは、学科ごとのクラス編成ではなく、学科を超えた、学科が入り混じったクラス編成をされていたことと、少しお話を伺ったら、将来はもっと学科自体も色々と考えていきたいという話を聞きました。私たちの感覚では、学科ごとのクラス編成が変わったというだけでも、凄く大きな進歩だと感じるのですが、そういったところについても、方向性等についてお話しが聞ければと思うところでした。

<氷室校長>

是非、我々も霧島市と連携を強化して、色々な取り組みをやっていきたくて思っておりますので、どうぞよろしくお祈りいたします。それから、鹿児島県内の就職率は、20パーセントぐらいだと思います。

<武田地域共同テクノセンター長>

昨年度、就職を希望する学生(進学希望を除いた学生です)のうち、3割が鹿児島県内に就職しています。これは過去最高の割合になっています。

<氷室校長>

高専は大学と違い、一つの専門を極めるのではなくて、現場に行って、現場にある問題を解決できなければならない。そのためにはその専門だけではなく、色々な専門知識が必要かなと思ってました。それで、できるだけさまざまな専門の知識を深くではなく、浅くていいのですが、今の現場に出たときに躊躇なく対応できるような、そのような学生が高専生ではないかなと思っておりました。そういう人材を社会に送り出したいという思いから、今年度から混合学級が出来ましたので、これに関しては、次の機会にご議論いただきたいと思います。

もう1つその先の学科再編でございますが、正直申し上げますと、私が来た時に一度、やろうとしていたのを取り下げられているのです。そのような状況の中では、新たに再編することは非常に難しいと考えるところ、非常に周りが変わってきているところがあります。

これまで半導体というのは、ほとんど衰退している状況があったにも関わらず、急に国策として進めるところがございます。それから教育未来創造会議では、「あらゆる機能性をもった高専にしてください。大学を含めて、再編してください」といっているのです。これらは我々にとって、大きなチャンスだと思っています。できるだけこの地域が望むような技術者を鹿児島高専がつくりあげ

ていく必要があると思っております。よろしく申し上げます。

<相良委員>

氷室校長が育てたい学生の目標について言われたように、私は、その学生の姿というのが、この評価委員会が目標とする1番大事なことだろうと思います。大事なことは学生をつくるということ。優秀であれば、結果的に女子学生がどんどん入ってくれて、女性の力は凄いのので、鹿児島高専の色が出るのではないかと思います。

高専機構における半導体関係の話というのは、熊本、長崎が前面に出て、こういうときに鹿児島の名前が出してもらえないのは残念であり、PRが欲しいところです。長崎の半導体工場とそれからTSMCのことが中心になったので、佐世保と熊本高専が中心と言う話になったのだと思うのです。子どもがこの新聞を見ることはないのですが、その親は見ると思うのです。だから、親が見るときに鹿児島高専もこれをやっているなということが大事ではないかなと思いました。

先ほど混合学級について校長が触れられたので、今回は詳細な話が出てくるのではないかなと楽しみにしています。今後の学生は、技術者として初期には手にマメをつくって、現場で働いたということが必要だったかもしれませんが、バーチャルに創造しながら、ものを作ることを考えられる人が大事になるという時代がくるのではないのでしょうか。

鉄骨をつくるにも、今は図面を事務の女の子がデータ管理をし、現場の女性のオペレーターにデータを渡し、そのまま鉄板が

切れるという。これを職人の形でやろうとすると、どうしてもそのようにいかなかったのです。

そうしますと学生は、先ほど言ったように、色々なコンピューター技術を駆使して、そして夢を持って、ゲームをしている感覚でものをつくっていくぐらいの時代がこないといけないのだろうと思います。

<氷室校長>

私どもも女子学生を増やしていきたいという強い気持ちでおります。やはり女性の技術的な発想というのは、大人にないものがかかなりありますので、大変期待できていると思っています。我々も努力するのですが、鹿児島県は少し女子生徒の希望者が少ない気がするのです。以前は鳥取県にいましたが、鳥取県は、1年生の40数パーセントが女子学生になっています。我々も、さらにこれから努力して参りますので、よろしく申し上げます。

半導体人材育成ですが、私が半導体の専門家でしたら、おそらく鹿児島高専がなったと思います。1つは、先ほどおっしゃったように、TSMCが熊本に進出したことにより、1つ熊本が中心になった理由がございいます。また何故、佐世保かといいますが、佐世保高専の校長が半導体の九大の専門家なのです。それで理事長が指名をしたということがございいます。また、そのような新規になるような取り組みを展開していきたいと思っています。

<木下議長>

最後に私の方から質問点を言いたいと思っております。全体的に見て、非常に良い取

り組みをされていると、ここまで色々なP D C A活動が、高専全体の組織として、かつそれぞれの区割りといえますか、また学科に対してもP D C Aという形で動いているかなと思います。ここでは少しみえてこなかったのですが、教員あるいは職員の自己点検・評価もやられていることだと思います。それらが個人としての評価、自己点検して改善していく。これは非常に大事なことです。これまで大学教員も高専の先生方も自ら開発して、新しいことをやったりして、自己改革してきましたが、それに対して、組織として、きちっとした形をとっていく。これは非常に重要で、そこがうまくかみ合えば、おそらく組織としては、どんどん成長して、改善していくだろうと。そういった組織としての素晴らしい活動をされているなと思います。

少し重点テーマというところが見えにくかったのですが、例えば、実際に成果として留年率を改善し、実際に数値としてあがってきています。それが本質的かどうかというのは、私としては、まだ疑問はあるのですが、新たな取り組みを試みた後、きちんとそれに対してその後もフォローアップをされているのではないかと思います。そのようなことを組織として、きちんと回していることが非常に素晴らしいことだなと思いました。単に報告書をつくるためのP D C Aになりがちなところを、実質化されているというところが、報告書からもある程度、読み取れるところです。

それと、高専機構の第4期中期計画のベースがありまして、あるいは中期目標・中期計画、これが本質的に素晴らしいものであり、各高専が独自のK P I（重要業績評価指

標）を決めているということがあれば、中期計画の中でどこまで、学校が達成しようかという目標を定めて、それに対して年度ごとに、どのように進展していくのか明確にした方がよいと思います。

また、鹿児島高専の中期計画あるいは機構の年度計画と、今回の自己点検がどのような相関関係にあるのか、そこがあった方がいいかなと思います。鹿児島大学も第4期の目標を定めさせられて、それに対してどのような成果を出していくのかを検討している。特に数値目標を文科省から「決めなさい」ということで、かなりアバウトなところで決めざるを得ない。何故、こうなるからと言う根拠が十分ではなく、実績ベースで、多分もう少し上がっていくだろうという形でしか決められない部分もありまして、非常に数値を決めることは難しいところではありますが、方向性としては、国もこのように舵をきっている。我々としてもそこに沿うような形で、なおかつ特色やオリジナリティを出していくということですので、おそらく高専もそのような形になっていると思うので、それが見える形にさせていただきたいということが、私が2つ目に出した最初の点であります。

最後に教員の業績評価と給与評価。今回の外部評価委員会には直接関係ないかもしれませんが、高専の先生方あるいは事務職員の方々も過剰労働になっている部分があるのではないかと。ある数値目標を掲げて、「よし、やりましょう」となったときに、多分健康面も含めてメンタル的にも個々人に負荷がかかる。そのメンタルケアもある程度やっていただきながら、個々人がこのような目標を掲げて、全体として「目標達成で

きた」という喜び等を感じなければ、きつい話しになってくると思います。1つは、個人の業績評価をどのように行い、それが給与にどのように反映しているのかというのはお聞きしたい1つです。ベースアップが基本的に公務員体系ですので、なかなか難しいですが、どの程度その部分を給与などにのせられているのか。それから繰り返しになります、学生はもちろん教職員の全体的管理、特に健康管理あるいはメンタルケアに関して、どのような仕組みがあるのか、そこが質問です。よろしく願いいたします。

<氷室校長>

中期計画に関してなのですが、基本的には、ほとんど機構が出しているものに沿って作っています。本来は、この場に持ってきてやるといいのですが、もの凄く時間がかかってしまうのです。ですから、この外部評価委員会のあり方というのも、だいぶ悩んでいます。何か表面上のトピックを評価していただいた方がいいのかなと思ったりしています。

これまでのやり方は、本校の取り組みすべてをここに持ってこれないので、一部を取り出した形で全般を見るので、ややこしくなってくるのだと思います。

数値目標にございますが、例えば、女性の教職員の割合を30%にするなど、なかなか達成できていないところもありますが、高専機構の中期目標に沿って取り組んではおります。

個人の業績に関しては、これは他の大学とも一緒だと思うのですが、教育、研究、社会貢献、国際交流などを含めて、全て点数化

してありまして、点数に応じて記録するシステムをとっております。細かい事を言いますと、レフリー付きの論文を書いたなど、そういったことも含めて評価しているところがございます。

委員長がおっしゃった過剰労働、メンタルヘルス、ヘルスケア、そのようなところは、1番過剰労働になっている先生に答えてもらいます。

<松田教務主事>

1番感じるのは、事務職員が教員にできない細かなところまで見てくれています。教員もそこに甘えている部分もあるので、学校全体として改善していかなければいけないと、常々感じています。確かに教員にしても、職員にしても、優秀な人のところに仕事が集まってくるという仕組みは、どこでも同じだと思っています。そのような現象が起きているのだろうと思うが、かといって均等に仕事を割り振るとうまく回るといって、そうでもありません。その点は悩ましいところだと思っています。

広い意味でのストレスマネジメントという意味で、自分自身は普段から気を付けて仕事をしていますが、それが全教職員にいきわたるようになっていく必要があると思っています。昔は色々な研修会に教員がどんどん出ていましたし、学校も予算を付けてくれていました。最近は、研修会参加を呼び掛けるアナウンスがありませんが、研修自体減っているのか、そのような出張を減らしているのか、分かりませんが、そのようなものがもっと広がればいいと思います。

<深見事務部長>

事務職員の能力の関係あるいは残業対策について、今年取り組みになりますが、事務職員の研修方針をしっかりと立て、どのような人材を事務職員として育てたいかを明確にしようと考えております。

研修についても、基本は学内でできる研修と外部でできる研修となりますが、基本的には、個人の資質・力量を高める研修と組織の力量を高める研修、2つのところを変えようと思っています。もう1つ違った研修で、メンターを付けるという研修を考えています。これは人事異動があった時、あるいは少し自分には難しいという業務にあたった時に、それを支えてくれる人のこと。それを求める人から2人指名して、その人に教えてもらいながら仕事を行うということでもあります。個人が困らないように、あるいは個人の業務をなるべく残業しないですむという、助けられるような研修というものを考えていこうと思っています。

やり方や業務をどのようにやったら効率的にできるか等、つながりということを色々考えて、企画しているところであります。おそらく今年から、そのような研修をやることにより、組織の質あるいは個人の質を高めて、なおかつ残業の軽減などにつなげていこうと考えています。

インセンティブはあるかという事について、業績評価を年間2回行っています。業績については大学と一緒にだと思えますが、目標を4月と10月に立て、それを上司との間で何をどこまで行うということを立てる。それに対してできた人については、ボーナスなど反映する、あるいは定期昇給に反映する形では、やっています。

<木下議長>

私は鹿児島大学にいまして、周りの事務職員や教員をみると、先ほど言われた鹿児島高専と同じように仕事ができる人に集まっており、なかなか非効率的な部分があります。これは企業から言うと、マネジメントとしては「何をやっているんだ」と思われるので、なかなかうまくいかないところがありまして、先ほどのメンター制度は1つの良い試みだと思います。できれば、共にそのようなところ少し改善できればなという観点から質問させていただきました。ありがとうございました。

外部評価委員会 講評

<木下議長>

それでは講評に移りたいと思います。

①鹿児島高専としての中期目標・長期目標を設定し、それに対して重点項目が何かを明確にした自己点検・評価の実施。鹿児島高専独自の自己点検・評価を行うこと。

委員の話し合いで出た意見が、中長期目標を立てていただくと、最初に伺った校長の話の内容を、実際の報告書の中に織り込んで、中長期目標を設定していただきたい。その中でも重点テーマの設定、鹿児島高専独自のKPIを含めた重点テーマに沿って中長期プランを立て、それに対してどのように評価していくか。

単年度、単年度の評価や、「ここまでできました」というだけでは、将来性としては「どこに向かって何をしたいのか」、「それに対してどこまで進捗しているのか」が、本

当の意味での進歩です。目標を達成しているのか。そこが明確にはならないので、そのような形を模索していただきたいというところでは。

中長期プランとしては、将来構想を見据えた形ということになります。特に年度、年度の達成度評価の話がありましたが、進捗の部分もあってよいと思います。これは、先ほどの重点テーマに対する達成度評価ということになろうかと思えます。

その辺りをどのように工夫して、「年度計画」と、「中長期、重点テーマに基づくもの」というところを少し明確にさせていただけないかということでは。

全てクリアするというより、独自色を出して、その意味のある鹿児島高専がより輝き、あるいは生き残るという意味にもつながると思えます。

②事前質問に関する情報共有

評価委員からの事前質問は、委員会の中で情報共有ができていない。各委員が互いに情報共有できるような形で外部評価委員会が進行出来るように工夫していただきたい。

「委員それぞれがどのような意見を持っているのか」、「このようなところに何かサジェスションをした方がいいのでは」等がより明確になり、外部評価委員会がより有意義なものになると思えます。

全体的な講評としては、新しくミッションをベースにした評価、それからPDCAについて、各委員には非常に好評でした。限られた時間の中で、それを少しずつ進化させていることに対し、非常に敬意を表しますので、これをさらに進化させてもらいた

いというところでは。目標を設定し、どのようにして自己評価を行い、さらにまた目標を進化・再設定していくのか。是非、そこを組織として進化していただきたいというところをお願いといたしますか、期待したいことでもあります。

評価委員の方々が言われるのは、「かつてに比べたら物凄い進展具合だ」ということですので、これを更なる校長のリーダーシップの下、各先生方が一致協力して、一丸となって推し進めていただきたい。学生も鹿児島高専にきて本当に良かったなど、また教える先生方もこの職場にきて本当に良かったと思うような、そのような環境をつくっていただければ幸いです。今日は、ありがとうございました。

<氷室校長>

皆様、本日は本校の取り組みについて、いろいろと貴重なご意見をいただき、誠にありがとうございました。

委員からの意見も、年々レベルが高くなり、我々も非常に高いポテンシャルをもっているような気がします。

特に、令和3年度は、混合クラスの導入の決定、カリキュラムの改定作業、教育理念の改定、企業との共同教育、Well-beingを志向する高専教育の導入など、いくつかのプロジェクトチームを立ち上げて魅力ある鹿児島高専を目指して取り組んできました。

学生から「鹿児島高専に入学して良かった」、卒業生から「鹿児島高専を卒業して良かった」、また地域の子供たちから「ぜひ、鹿児島高専に入りたい」、勤めている教職員から「鹿児島高専に勤めて良かった」と思えるような高専を目指していきたいと思いま

す。

昨年のこの委員会の最後のあいさつで、半導体、電気産業の衰退の問題は、高専における技術者教育をどのように行うべきかという問題に重要な関わりをもっていると話しましたが、今年に入りTSMC熊本進出に伴い国からの半導体に関する様々な知識・技術を学べる体制構築が求められました。

また、教育未来創造会議が発足し、高専には産業界や地域のニーズを踏まえた機能強化が求められるようになりました。

これまでの学科構成を大胆に見直し、再編を促進する必要があるかもしれません。皆様からいただいたご意見を参考にさせていただき、さらに魅力ある鹿児島高専にしていきたいと思えます。今後ともどうぞよろしく申し上げます。本日はありがとうございました。